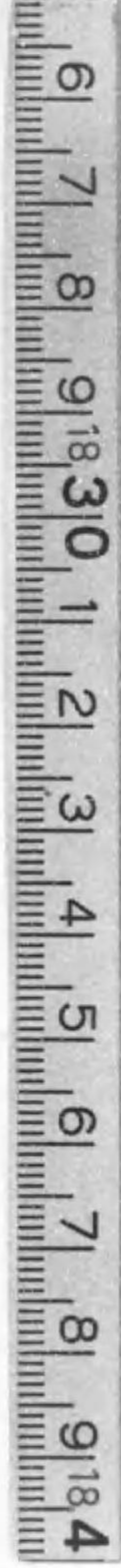


善行美談集

特 218

270



始



特218
270



美談集



東洋紡績株式會社姫路絹糸工場

阿部社長題字

阿部社長
御覽
敬啟者
此係
阿部社長
御覽
敬啟者
此係

阿部社長
御覽
敬啟者
此係

同 陪 揮 吳 國 字

德不孤

望湖



緒言

我國に於ける最高至重の盛儀たる、御登極の御大典を擧げさせ給ふ曠古の歳に當り、吾等臣民として奉祝拊舞の誠意を永久に記念せむがため、その事業の一として、當工場従業員の『善行美談集』を刊行するを得たるは、衷心欣快に堪へざる所なり、時恰も當工場創立第十周年を迎ふるの機縁に際會し、更に此の企てをして意義深からしめたるは、慶福之に過ぐるものはなき次第なり。

抑もこの『善行美談集』は、大正八年當工場が東洋紡績株式會社の絹糸工場として創設せられて以來現在に至るまでの全従業員中（社員及役付者を除く）、篤行衆に範たる人々に對し、特に團體公職又は僚友等の推薦に係るものに就き、其言行事蹟を蒐集したるものにして、而も其事實並に内容の正確を期するため周密なる精査を遂ぐることに約半歳に亘り、當工場御大典記念事業中最も主力を注ぎたるものなり。

本書に收めたる人員壹百餘名は、固より資産なく、地位なく、教養も亦充分に受け得ざる環境裡にありながら、其行爲一として至誠の發露ならざるはなく、眞に感奮欽仰すべき事柄にして、今日の如き外來の惡思想漸く浸潤し、動もすれば大和民族固有の傳統的忠孝節義の精神を汚濁し、光輝ある我が國家社會の安寧秩序を紊亂せんとする、不逞暴逆の徒を生ずるの危機に際し、之等の篤行は確かに清新なる一服の解毒劑として、大方醇化の資たるべきを信じて疑はざるものなり。

近時修養團精神の鼓吹により、流汗鍛錬の尊さを自覺し、同胞相愛の悦びに横溢する、三千有餘の當工場従業員は、同心協力して明るき世界の建設に涙ぐまじき精進を續けつゝあるが故に、本書に蒐録せるものゝ以外に尙幾多の隠れたる篤行美德者を有するならんも、是等は恰も地中を流るゝ清水の如く、全員感化の源泉をなすものにして、其陰徳は何時かは必ずや陽報の餘慶を享くべき秋あるべし。

『善行美談集』編纂の企てを發表して以來、特に貴重なる資料を提共せられたる、各町村長、學校長、警察官の各位、及び工場内各團體僚友たちの美しき温情と編纂委員諸氏の非常なる努力に對し、茲に謹みて滿腔の謝意を表するものなり。

昭和三年十一月

東洋紡績株式會社姫路絹糸工場

工場長 作川 鐸太郎 謹

凡 例

- 一、本書に收むる美談を『善行美談集』『美談一束』及附録の三部に分つこととした。
- 一、美談集及美談一束は何れも個人の篤行を頌説したるものである、と云ふて『美談集』及『一束』の間に本質上の甲乙を認めただのではない、唯だ編輯の都合上抒述の方法を異にしたのみである。
- 一、附録は主として多くの篤行者を包擁する團體の活動状況を參考のために摘録したるに過ぎぬ。
- 一、社員及役付者で善行あるもの又は美談を有するものは勿論少くないが之等の人々は其の職責上衆の模範たるべきは當然の事に屬するが故に其掲載を省略することとした。
- 一、編纂の同人は當工場の職員で各自職務の餘暇を以て夫々分擔編輯に當つたのであり而も事實の正確を期するに勉めたる爲めに文章構成上の推敲は固より不十分なるを免がれない。讀者諸彦幸に此の事情を諒とせられんことを希ふ。

昭和三年十一月

編 纂 委 員 識

目次

一、愛と汗の権化	小籾ます子	推薦人	東洋三木三夫人會	一
一、孝子の一念	松尾藤市	推薦人	澤田廣次氏會	一二
一、村の感激	川口さゑ	推薦人	大西玉枝氏團	二四
一、榮光を仰ぎて	伊森あや子	推薦人	長濱安江氏校	二七
一、獨立自尊	山元善治	推薦人	立岩笑保氏會	三六
一、忍苦十年	河井よし子	推薦人	和田小學校長 宇都宮豐氏	四一
一、鶏群の一鶴	青木アサ	推薦人	寄川治郎右衛門氏	四八
一、模範青訓生	津田 巍	推薦人	佐々木房藏氏	五〇
一、母校愛	中原松子	推薦人	女々木房藏 宿舎 修道小學校長 中原龜吉氏	五四
一、愛は總てを生かす	遠藤わい	推薦人	眞野ユキ氏團	五九
一、大野の苺	松尾政治	推薦人	澤田龜之助氏會	六七
一、家産復興のツネ	伯田ツネ	推薦人	東洋婦人會 前田岩次郎氏	七一
一、道のために躍進	石坂ふじゑ	推薦人	塚本熊市氏團	七四

一、尊いかな人命救助 原田 一
一、光 は め ぐ る 同 福 田 ツヨルエシ
一、至 誠 の 人 岡 田 か め の
一、若き日は躍る 梶 師 唯 市
一、更生の悦び 白 井 ま つ ゑ
一、愛郷に燃ゆる心 中 本 サ シ ゲ エ 枝
一、男子の本領 難 波 徳 太 郎
一、少女の力 坂 口 カ ワ エ ノ
一、捧 ぐ る 心 宮 ノ 原 ッ キ
一、一石の波紋 塚 本 熊 市
一、伸びゆく生命 赤 井 久 野
一、寄宿の小父さん 石 原 定 吉
一、艦 鑑 谷 口 作 次 郎
一、母に代りて 藤 原 き く ゑ
一、父を慕ひて 澁 川 イ サ ミ

推薦人 柴崎金次郎氏 一五九
推薦人 本 田 秀 助 氏 一六九
推薦人 青 木 愛 二 氏 一七三
推薦人 伊 藤 忠 太 郎 氏 一八三
推薦人 上 郷 軍 人 氏 一九〇
推薦人 千 原 新 太 郎 氏 二〇一
推薦人 塚 本 熊 市 氏 二〇六
推薦人 本 田 秀 助 氏 二〇九
推薦人 青 木 愛 二 氏 二一〇
推薦人 澤 田 秀 徳 氏 二二〇
推薦人 和 田 村 駐 在 所 桑 原 壽 二 氏 二二四
推薦人 立 岩 美 保 氏 二二八
推薦人 月 村 子 眞 宿 氏 二三四
推薦人 東 洋 金 次 郎 氏 二三七
推薦人 今 修 氏 二四二
推薦人 東 野 初 女 氏 二五〇

一、堅 忍 不 拔 吉 田 徳 藏
一、聖 愛 の 生 涯 加 藤 キ ャ ノ
一、奮 闘 の 青 年 下 野 園 盛 良
一、逆境に立ちて 高 木 根 朝 治
一、労働の歡喜 檜 本 藤 太 郎
一、麗 しい 涙 武 田 政 子
一、夜更けて曉に近し 高 橋 君 枝
一、聖 き 祈 吉 岡 文 子
一、優れたたる努力 大 畑 榮 吉
一、眞 珠 多 田 ト ミ
一、靈 火 石 川 米 治
一、百 行 の 本 藤 本 い と ゑ
一、一 路 向 上 境 コ チ ョ
一、聖 義 の 勇 士 竹 中 三 市
一、覺 醒 知 福 な つ ゑ

推薦人 柴崎金次郎氏 一五九
推薦人 本 田 秀 助 氏 一六九
推薦人 青 木 愛 二 氏 一七三
推薦人 伊 藤 忠 太 郎 氏 一八三
推薦人 上 郷 軍 人 氏 一九〇
推薦人 千 原 新 太 郎 氏 二〇一
推薦人 塚 本 熊 市 氏 二〇六
推薦人 本 田 秀 助 氏 二〇九
推薦人 青 木 愛 二 氏 二一〇
推薦人 澤 田 秀 徳 氏 二二〇
推薦人 和 田 村 駐 在 所 桑 原 壽 二 氏 二二四
推薦人 立 岩 美 保 氏 二二八
推薦人 月 村 子 眞 宿 氏 二三四
推薦人 東 洋 金 次 郎 氏 二三七
推薦人 今 修 氏 二四二
推薦人 東 野 初 女 氏 二五〇

一、春の訪れ	光永八千代	推薦人	東洋木かゝる氏	二五三
一、やがて陽光は上る	中居しづゑ	推薦人	東洋女學校	二五六
一、至孝至愛	岸本シズ	推薦人	上野初宿氏	二五九
一、死線を越へて	川越重次	推薦人	青友年信記氏	二六四
一、美しき心	土井トメ	推薦人	立東岩信保氏	二六七
一、輝きを追ひて	金川正一	推薦人	吉在郷軍藏人	二六八
一、明魂	平木ハル子	推薦人	村上子寄前氏	二七二
一、純眞	菅原一徳	推薦人	吉在郷軍藏人	二七八
一、白百合は香ふ	藤輪ユケノ	推薦人	大北子俊宿氏	二八〇
一、明るき人生	中原一郎	推薦人	澤修田秀穂氏	二八三
一、信仰に生きて	高松きため	推薦人	月女子惠真氏	二八五
一、健氣な女性	尾花いくゑ	推薦人	經女子彌宿氏	二八七
一、國士の佛	澤田杉市	推薦人	竹修中三市氏	二九一
一、自分をみつめて	立石く	推薦人	田修中秀子氏	二九四
一、禁酒美談	小林瀧次郎	推薦人	安井酒藏忠氏	二九八

美談一束目次

一、御佛の光の中に	川上金代	推薦人	大東如洋三人氏	三〇三
一、貴き使命	田村正一	推薦人	青田年龜雄氏	三〇七
一、永代燈	岡修田鐵養男	推薦人	長安江宿氏	三一七
一、宮崎よら	長濱安江	推薦人	藤在郷軍舒氏	三一九
一、佐古良助	藤野舒人	推薦人	大東如洋三人氏	三二〇
一、萬竹シゲノ	大東如洋三人	推薦人	大東如洋三人氏	三二三
一、川端捨吉	檜修養太郎	推薦人	川東越洋重女治學氏	三二三
一、松田スエ	川東越洋重女治學氏	推薦人	神在郷軍義人氏	三二五
一、白川夏一	神在郷軍義人氏	推薦人	廣島縣加茂郡川上村役場	三二六
一、奉謝	廣島縣加茂郡川上村役場	推薦人	眞女子寄宿氏	三二七
一、鐘撞橋子	眞女子寄宿氏	推薦人	眞女子寄宿氏	三二八
一、小林正義	眞女子寄宿氏	推薦人	眞女子寄宿氏	三二九
一、藤田オケイ	眞女子寄宿氏	推薦人	眞女子寄宿氏	三三〇

一、上月よしゑ	推認人定	眞野子	寄宿	三三二
一、熊井福松	推認人定	上野初	養治	三三二
一、木村なをゑ	推認人定	眞野子	寄宿	三三三
一、日野とく	推認人定	長濱安	婦人	三三四
一、小田よね	推認人定	青山ハ	寄宿	三三五
一、清い眞心	推認人定	女幸小	學校長	三三六
一、金川シズ	推認人定	大東洋	俊婦	三三八
一、木下やす	推認人定	塚本	寄宿	三三九
一、松岡カエ	推認人定	青山ハ	寄宿	三四〇
一、田尻秀二	推認人定	竹中	三養市	三四一
一、西山タツミ	推認人定	大東洋	俊婦	三四二

附 録 目 次

一、明魂發輝の道場	三四五
一、告 辭	三四七

一、勅諭の御旨を奉體せる在郷軍人分會	三四八
一、東洋女學校に就て	三五二
一、家庭に於ける主婦の力	三六〇
一、善 行 表 彰 式	三六二
一、各年次善行表彰者一覽	三六三

(終)

善行美談集



原籍 廣島縣賀茂郡川上村
現住 東洋紡姫路工場

小 簀 子

明治卅六年九月二十日生

愛と汗の権化

(一)

皆さんの内でお父さんも、お母さんも亡くなつて、外に頼るべき人も無いといふ時、これからどうしようとお考へになりますか？

皆さんがまだ二十にもならないか弱い乙女であるとしたら……

そして失禮ですけれど、お宅にはあまり餘裕が無く、どちらかと申せばその日の暮しにも差支へるといふとき親類にも頼るべき人も無くそして、まだ幼い弟さんや妹さんがあつて、貴方が直接養育して行

かねばならないといふとき、例しに、貴方ならどうするかといふ事を考へて見て下さい。

これから述べようとする、小簀す子さんは、貴方でも心から至難だと考へになる、この困難な道を風にも耐えぬ乙女の身を以て、敢然進んで行かれたのです。そして自分の力で遂に、妹は嫁しづかせ、弟は中等學校に入學させられたのです。

こう述べただけでも、もう感じ易い貴方の胸には、心からの尊敬の情がこみあがつてくる事だらうと存じます。

彼女の故郷の村で催された、彼女の表彰會で、處女會の方の祝辭に、こういふのが御座いました。

「會社が幾千の女工中より榮譽ある表彰状を嬢に贈られたのは實に故ある事だと存じます。

私どもは、古來弱者よ、汝の名は女なりといふ motto を冠せられてゐました。然るに、今や嬢に依り男子も企及し能はざる意氣を示されたことは、本村處女會員は申すに及ばず、一般女性の痛快に堪えないところでございます。……」

力を入れて、かくまでも賞讃せられた方の、御氣持が、よく解るので御座います。

(二)

この健氣な小簀さんは、十四の時まで、廣島縣賀茂郡川上村の美しい静かな村で、楽しい少女時代を送

られたのでした。

若し、この時お父さんが、亡くなられなかつたら彼女も世間並の平凡な生涯を送られた事と思ひます。

「境遇は人を造る。」といふ言葉は飽くまで眞理です。長い病氣の後、お父さんが到當永遠の眠りにつかれた時、今迄幸福だつたこの家にも、さつと暗い魔の手が差し始めたのです。

そうして、杖とも柱とも頼むお父さんを失つた一家の深刻な悲嘆も、移り行く時の歩みに、次第に薄れゆく頃、更に第二の打撃を受けねばならなかつたのです。父亡き後は、唯一の力とも頼む見さんと（前途

ある、青春二十一歳を一期として）、永遠の別離を告げなければならなかつた事です。この時彼女は、十七歳でした。

世の常ならば、華やかに送らるべき乙女の頃に、こうして深い悲歎に直面しなければならなかつた、彼女の歎きはどれ程だつたでせう。

亡き人を蘇す爲には、清淨汚れ無き身を以て、眞夜ひそかに、一帯毎に神に祈りて成れる涙の玉を、碧瑠璃の盤に盛り、百夜の斷食の後、亡き人の顔を洗へば閉ぢたる眼、再び開くべしといふかの傳説も、その時の彼女の氣持では、實行したかも知れないと思ひます。

父去り、今また兄を亡くし、残り給へる母上も、昌仕事だに爲し難き病い勝の御身と思へば、そして妹幼く、弟に至つては更にか弱き事を考ふれば、前途荒涼たる間、一すぢの光さへ無く、心細さは如何ば

かりだつたでせう。

あれを思ひ、これを思ひ、彼女の胸に納めるには、あまりに重きこの悲痛の情に、心は千々にみだる、ばかりでありました。

併し、萬人に一人ともあるまじきこの迫害された魂は、次第に悲壯な決心に變つて行つた。

……自分が今起たねば、我家は如何になりゆくであらうか？……

……我起たう。總てのもの、犠牲になつても、他の新しき生命を成長せしめ得るなれば、……

そこに一つの啓示がありました。

『東洋紡績姫路工場』

それは、一つの光明でした。暗々たる闇路を照らす燈明でした。

お母さんと、盡きぬ別れを告げ妹のかすみさんと共に播丹線野里驛に降りたのは、それから數日後でした。

(三)

それは丁度、大正十年四月の事で、市川の水は温み、姫山公園の櫻は既に咲き初め、賑はしき花の便りは全市の人々の心をそゝり、春の歡樂の幕は、靜かに開け様としてゐました。

そゝる心で、狂亂狂醉を續けている人々に背いて堅い決心を工場服に包んだます子さんの忍従と努力の尊むべき新生涯のスタートは切られたのです。

前紡科の一角で、雄々しくも力の限り立働きます子さんの姿は、日ならずして、朋輩の人々の驚異となり、やがて上席の人々の注目の的となつたのです。驚異は次第に敬意となり、注目はやがて、深い印象と變りました。

新しい生活の爲に、惱ましき春もやがては過ぎ、増位廣峯の新緑次第に加はると共にいつしか陰鬱な梅雨の日がやつて参りました。

じとくと降續く雨脚を、寄宿の部屋で眺めるとき、思ひは、いつか故郷の空へ走るのでした。雨の中に、まぎれいる、まぎれいる郷愁の惱みは、耐え難い寂寥の氣を更にそゝり立てるのでした。併します子さんは力を落しませんでした。鼓舞と激勵は、悲壯なハーモニイを奏しつゝ、彼女の周囲を取巻くのでした。

焼けつく様な炎暑の日がやつて参りました。卒倒する様な苦しい午後の事でした。火の様な息に、あえぎながら懸命に働く内に汗の爲に職服は絞る様になつて來ました。

兎もすれば、怠らうとする朋輩の意地悪い誘ひを、物ともせず、更に勇氣を倍して働くのでした。終業の汽笛が鳴響いて、漸く仕事を離れたとき、今日の日を無事に済んだ喜悅と、感謝が、泉の様に

胸に湧き上つてくるのでした。

夜の事でした。もう快い軒も側から聞えて來ました。

静かな夜の窓を透して、一道の月の光が差込んで參りました。

故郷で今時分静かに眠りつゝある、母と弟の事が偲ばれ目を閉ざれば、そこに母と弟の顔は、莞爾として微笑かくるのでした。肉親への深い思慕が、嵐の様に體中を驅廻り目頭の熱くなるのを覺えました

(四)

妹さんと二人で、こうして、獻身的な汗の結晶が毎月の送金となり家計を補ひ弟さんの學資ともなつたのです。弟さんは、姉さん達の熱い愛情に感激して、如何に一生懸命に勉強したことだらうと察せられます。

月に幾度となく、ます子さん姉弟の間には、脈々と流れる肉親の温かい情が書信となつて取換はされたのです。

こうして二人が漸く工場生活に慣れてきた頃、不幸は更にこの可憐な姉弟の上に落掛り、なつかしいお母さんも又到頭亡くなられたのです。

姉弟達は、遂に兩親に別れた孤兒となつたのです。

亡き母に對する追憶の數々は胸に迫り、天に哭し、地に伏して慟哭を續け神を恨み、佛を呪つたのも無理からぬ事です。

まだうら若い乙女子が、父も兄も失ひ、更に母も亡くし、天涯頼るものとても有たぬ、孤兒となつた日の概きを想像して見なさい。

明日からは、誰が養つてくれるでせう？、

誰が、暖い手を差出して呉れるでせよ？、

しかも妹と弟の生命が、獨立さへもなし得ぬ現在の自分に頼つてはありませんか！

外には冷酷極まりなき浮世の荒波が待つています。

計り難き天の試練とは言へ、實に、一少女の身にはあまりに慘き運命でありました。

(五)

血涙を以て、お母さんをお送りしてから、さてこれからの責任の重大さ、自分以外には何者も負ふ者の無い義務と思ふとき、悲みに滿された心の中には、悲壯な氣持が燃上つて來ました。彼女の忍苦の生活は、再び新たな決心を以て、始められたのでした。

彼女の關心事は、今は弟さんの事のみでした。家を興すも興さぬも、唯弟さんの如何にあるのでした

姉としてのやさしい心使ひの上に、痛烈な激勵の手紙は、幾度となく送られました。姉さんの氣持に同感した妹さんも一緒に、更に一層の努力と勤勉によつて得た収入の大部分を、弟さんの學資と生活費に送金されたのです。極端な節約の結果であることは申すまでもありません。こうした努力を續けている間に、彼女の徳望は、遂に寄宿の寮の人々の敬意と信頼を博し推されて、寮長となり、技術の熟達と勤勉は、工場では組長を命ぜられるに至つたのです。月日は次第にたちました。

やがて、弟の富士三さんは小學校を卒業致しました。

いまして、両親の無い身を、或る時は父となり、或時は母と代り、激勵し、慰撫して、その身は、うつろひ易き乙女の美の盛りを、紡績工場に勤めて、養育して下された姉さんの長い苦勞と心配を思ふ時、弟として、此上更に姉さんの愛に絶する事は出来ませんでした。

富士三さんから、他家へ奉公の相談が、ます子さんにかげられたのです。

諾か、否か、その如何に依つて、弟さんの將來が定まるのです。妹さんとも、長い間の相談の結果、遂に返事は出されました。

「これからの男が世の中に立つには、少くとも中等學校卒業程度の素養が無ければならぬ。愛する弟のためには是非とも學校に入れてやらねばならぬ。」

それが爲の辛勞、努力位何であらう。如何に弱い女子の力であらうとも、一心になれば、たつた一人の學資位は稼ぎ出せるであらう。愛する弟よ。しつかりしておくれ。きつと學資は送つてあげるから一生懸命に勉強して中等學校を卒業しておくれ。

何といふ深い愛でしょう。

何といふ犠牲の尊さでしょう。

この手紙を読んだ時の、弟さんの感激がどれだけであつたか、如何に狂喜して、姉さんの慈愛に泣いたか、皆さんはお察しが出来るでせう。

この姉あつて、弟あります。一心不亂の勉強の結果弟富士三さんは、商業學校の校帽を載く様になりました。

(六)

一度は冷酷無慘な天の試験に泣いた身も、遂に神様から嘉みせられる時が來ました。

大正十四年二月二十三日、彼女の出身地である廣島縣賀茂郡川上村役場で、郷里から輩出したこの乙女子に多大な誇りを感じて盛大な表彰式が催されました。

我工場から社員宇野秀方氏は特に列席して表彰文を朗讀したのです。この表彰式は彼女一人の爲に催さ

れたものでした。彼女の事を聞くもの皆泣きました。郡長も泣き、村長も泣き、可憐な乙女の雄々しい氣持と努力に思い至るとき感涙は來賓一同に傳つてゆくのでした。

更に、姫路市武徳殿に於て、同年十一月二十三日、兵庫縣善行者として、表彰の榮を受くる事になつたのでした。

この榮譽に更に勢づけられたます子さんは、一層刻苦勉勵を續けました。

かくて、月日は次第に移りゆき弟さんの學校も段々と難かしくなつて参りました。

併し姉弟は互ひに、勵ましあつて、一日も怠る事はありませんでした。

彼女達を取巻く冷酷の運命は、尙その呪ひの手を弛めませんでした。彼女の側で常に力付けてくれる唯一の妹さんは不幸病を得て、この工場から退社して彼女と別れなければならなくなりました。それでも

彼女は落膽する事なく、更にその費用も送金したのでした。やがて病も癒えて、間も無く妹さんは結婚

致しました。總ての出資は、彼女から出されたのです。

やつと安心したと思ふも、つかの間、最早卒業まで一年といふ時、唯一の希望である弟さんは、手足

に腫物が發生して、とても通學する事なんかは出来なくなつたのです。

この悲報を受けたとき、意外の打撃に、如何にます子さんは驚いたこととせう。

しかし與へられた運命に敢然戰ふのは、ます子さんの性格でした。彼女はひるみませんでした。

誰一人看護してやるものもない弟の爲に、暖い手を延ばしてやる事は姉としての務めであると思つた、彼女は、弟を姫路に迎へて、赤十字病院に入院させたのです。

丁度、それは炎熱焼くが如き夏の事でした。

工場の一日の仕事が終わると、彼女は、憩ひもせず、病院に駆けつけるのでした。衰へた弟さんの顔を、白衣の中に見付けたとき、疲労も打ち忘れ、激しい肉親の愛情はひたすらに看護に全力を注ぐのでした。身動きも出来ない苦痛の身を病床に横えて居る弟さんは、病氣の爲とは言へ種々な無理も言兼ねま

せんでしたが、彼女は、色々とし、慰めるのでした。

唯でさへも寝苦しき夏の夜、而も看護の身は、碌々まどろむ事も出来ませんでした。唯の一日も休む

事なく、翌朝は欣然として、會社への勤めに急ぐのでした。

彼女の獻身的な、神にも通ずる熱誠な行動は一月に亘つて繼續されたのでした。

漸く寝入つた弟さんの顔を眺めながら病室の窓硝子を聞き星斗闌干として輝く夏の夜の太空を仰ぎ肅

然として、熱烈なる快癒の祈りを捧げたのでした。

こうした夜が幾日續いた事でしょう。

漸く弟さんの全快する事の出来たのは、一ヶ月あまりたつた時でした、この病氣の爲に要した多額の

費用は、總て彼女に依つて支拂はれたことは勿論です。

11

昭和二年二月、當工場で催された表彰式で、貯送金多額の廉を以て、二回目の表彰を受けたのでした。この榮譽の裏にひそめる血で彩られた苦闘の歴史を思ふとき誰か感奮しないものがありませう。彼女は現在も尙汝々として工場の業務に勤めて居ます。弟さんの卒業もやがて間近く、彼女も今迄の勞苦を、愉快なる記憶として、追想する時も來るでせう。

我が工場の一人として、こうした尊い、小簀ます子さんを持つ事は、私達の誇りでなくてなんでせう。



兵庫縣神崎郡川邊村西川邊九六九
止吉二男

松尾藤市

明治廿五年七月二日生

孝子の一念

残されたる使命

昭和貳年九月廿八日の夜は、ほのぼのと明けた。

今しも曉の波を蹴つて瀬戸内海巡船船ミドリ丸は土庄の港に入つて來た。船が岸壁につくや船客は吾れ先きにと。思ひ思ひの方へ四散した。

この中に背に笈を負ひ手に白小手、足には脚絆、白緒の菅笠を被つて金剛杖に縋りながら船から上つて來る憐れな巡禮の母子がある。

それは長い病に今は生れもつかぬ盲となつた母の手を曳いて、碧海奇峭に心機を轉じ、翠巒清流に心の垢を洗ひつゝ、靈驗あらたかなる小豆島八十八ヶ所の靈場に苦行の旅を續けんとする世にも孝行な松尾藤市君の尊い姿であつた。

貧困の家庭

兵庫縣神崎郡川邊村の小百姓の二男坊に生れた藤市君の家族は老いたる父母に隻眼の兄を頭として、一人の姉と三人の弟に二人の妹といふ十人の大勢な家内であつた。

別に祖先から傳はつた家産が有るでもなく、而も父母は荷馬車曳のこととして定まつた収入も無いと云ふ全く赤貧洗ふが如き慘な生活であつた。

斯うした其の日の糧にも困る苦しい中に、八人からの子供を育て、行く父母の艱難辛苦は實に並大抵ではなかつた。

親は涙の中に子を育て、子は涙の中に親に仕へた。
父母は毎朝三時には床を離れ馬車を曳いて稼に出で夜は九時頃までも家を留守にした。

兄は奉公に出て居り、姉は年もゆかぬに弟や妹の面倒を一切見ねばならなかつた。藤市君は何時にも末の弟を脊負つて山に登つて柴を拾ひ野良に行つては馬草を刈り、十歳の頃から繩を繰ることを覺へた。

寒い冬でも火鉢に火はなく指は凍へて垢ぎれは一面に眞赤な傷口を開け二目と見られぬいたいたしさ、而も指先に力を入れると爪の下から血がにじみ出るのであつた。

繩を繰りあげると町へ出て賣り歩き夜が更ければ疲れた足を引き摺つて三里の野路を我家へ急ぐのである。

斯うした藤市君の幼年時代は獨樂廻も凧揚も水遊びも一切出来なかつた。

發 奮

神は此の憐れな一家に更らに大きな試練を與へた、藤市君の母は次の弟を生んでから産後の肥立ち悪く種々手を盡して見たがその甲斐もなく遂に生れもつかぬ旨となつた。

澤山な子供を抱へて母の失明一家の慘状は言語に絶するものがあつた。

藤市君もこの有様を眺めては發奮せずにはゐられなかつた。

「思へば私も親不孝であつた、今までは氣の弱い我身でありながら強いことを口にして親を泣かしたことも度々ある。過去の自分が恥しい。」

私も一個の男子だ。何時までも親の厄介になつてゐる年でもない。身の不自由な兄に代つて働かう」我身を犠牲にしても一家のために働かうと奮起した藤市君は大正十年三月五日東紡姫路工場へ入社した。

働き易い工場だとは教へられて來たのだが現在自分が働いて見ると一層その感を深められた。一緒に働く皆んなの顔には明るい光が満ちてゐる。

新參者の自分でも親切にして下さる。

上役の方も不幸な我身を不慥に思つて良く導いて下される。

藤市君は今まで想像もしなかつた楽しい世界があることを知つて歡喜した。

それからの藤市君は、働いた働いた、面白いほど働いた。

會社から頂く給金も殆んど全部家に持つて歸り父母や弟妹の喜ぶ顔を見るのが何よりの楽しみであつた。

病魔に襲はる

漸く恵まれんとした君は亦も神より第二の試練を授けられた。

藤市君も早や廿五歳の春を迎へた。

絶えざる労働に身心ともに漸く疲れを覚えんとせし時、此の虚を狙つて病魔は襲ふた。悪性の瘰癧に悩まされて藤市君は勤めの傍ら福崎の病院で手術を受け一時小康を得たが旬日を経ずしてまたも悪化した。

今度は姫路の或る病院へ通つて一心に治療を受けたが、これも餘り面白くなく、悪性の病は到底根治するものとは思へなかつた。

今は僅かの貯金も全く費ひ盡して、悶々の情やる瀬なく悶へは刻々に深められていつた。良薬も効なく名醫も匙を投げた不治の病に捉へられて藤市君は日夜悩み悶え今や自ら自分の骨を削りつゝあるのであつた。

暗い魂を透して眺むる世界が暗いことにも氣が付かず自らを怨んで悩みを深め自らを呪つて墓を掘りつゝ死に勝る苦悶を續けながら疲れ切つた聲をしぼつて泣くのであつた。

魚は水によつて生き人は愛によつて活く。愛の燈火が消ゆる時人は死の旅路を急ぐのである。

更生の歡喜

病魔に悩む藤市君が己が生涯を救はる可き更生の日は來た。

叶はぬ時の神頼み。然しそれは求めざるに如かず。

偶々中川日史氏の佛教讀本を手に入れた君は恰も渴する者の水を求むるが如くこれを貪り讀んだ。

平明通達なる文章の裡に我肱三折、難信難解の佛教哲理が何人にも解り易く叙述されてゐる。

求めよ與へられ叩けば開かれん。

無學の君の心にも佛のお聲が聞えた。

曾て肉體の美はしかつた時には、大徳主恩さへ感謝することを知らなかつた君の鈍れる魂は、今日始めて輝き出したのである。

凡そ生あるものは必ず滅す。肉の世界は生老病死の四苦に鎖されてゐる。須らく肉より脱れ迷より醒めて永遠に安住す可き靈の世界を求むるに若かず。

永劫に變ることなく愛護し給ふ絶對の力を信すること、即ち信仰に依つて呪ひは清められ悩みは脱せられ生老病死を超越した安住の世界に入ることが出来るのだ。

残された使命を悟り、肉に死するも靈に生き、枯骨の病者も明魂を現はす時明るき世界は現はれん。

生死の間に目醒め宗教的信念によつて心扉を開かれた君は茲に更生の紀元を劃した。

靈に活きた藤市君は死の悶えより離脱し得たばかりでなく癒り得ぬと思つた悪病までが不思議にも刻々と快方に向つて行つた。

一日、この喜びを父母に傳へんものと藤市君は懐しい故郷に歸つて來た。
 久し振りに戻つて見れば戀しい我家は……。

噫！ 天は、是か、非か？

楽しみに歸へつて來た懐しい我家は依然として哀愁に鎖されてゐるではないか……。

母の眼病は意外に悪くなつてゐた。

今は人手に支へられなければ道も歩けぬ不自由さである。

然しこの憐れな盲の母は我身を持って餘しながらも良く夫に仕へ大勢の子供の面倒を見てゆかねばならなかつた。

何故に世の母は我子の爲めに斯くも、快く總てを抛つのであらう。

この尊い母性愛を面の邊りに見せつけられた時、藤市君の胸は高鳴つた。

『あの痛ましい母の姿がわからないのか。』

一寸先も見へぬ悲しさに手振り足振り探し廻るあの頼りない母の姿を見よ。

あのよろめく足どり、おののく手先。

噫、老いたる母は我身の不自由を忍んでも可愛い子供のため、快く總てを抛うたのだ。

此の不仕合せな母を故郷に残して私は一體何處へ行くつもりだつたのか！

紅顔それ幾春秋。今にして父母に孝ならざれば更に何れの時をか待たん。

優しい人の子の心に、甦つた藤市君は老いたる母のために最も忠實な杖となつて此の世の限り仕へんと決心した。

立身出世の身の華よりも老いゆく父母の唇から優しい我が子と呼ばれたくなつたのだ。

小豆島靈場へ巡禮

孝心に眼醒めた藤市君は自己の尊き體驗より今や母を救ふものは神佛の外にないと信じ盲の母を介抱しながらはるばる小豆島八十八ヶ所の靈場として巡拜の途に就いた。

我が家を後に遠く海を越え四國遍路に出て行く憐れな母子の姿を見送る村人は何れも異常な感激に打たれ

れ
 『希くば彼等母子に佛の加護を垂れ給え』と祈るのであつた。

九月廿九日土庄の港に渡つた藤市君母子は前島靈場を打始めに夜を日についで峰をよち雲を分ちて難行苦行を續けた。

瀬戸内海に浮ぶ小豆島は神代より顯はれた古島にして峻坂聳る深谷横たはり巨岩累々として途に迫る等母子の難澁も一方ではなかつた。

重い足を引き摺りながら金剛杖に縋つて

『南無大師遍照金剛』と一心不乱に御寶號を唱へつゝ合掌祈願する敬虔の勤行は誰か涙なくして見得られよう。

有名な笠嶽の難所にさしかれば木の根や鐵鎖に縋つて、そゝり立つ大岩壁に攀ぢ登り、更らに金剛力をふりしぼつて鋒先の如く雲を破る絶頂に達した。

その瞬間谷底の雲を裂く雷光あり。俄に轟々たる雷鳴は下界にとゞろき渡つて莊嚴森嚴の極みに母子は化石の如く瞑目するのであつた。

情の宿に泊つては、連日の難行苦行に今は全く疲れ果てた母を慰めいたはり足腰を揉み安らかに眠むると見れば藤市君は更らに一日の汗と埃に汚れた肌衣や脚絆も洗濯するのであつた。

窶れ果てた母の姿も涙なれども我が身を粉にして只管大師を念じ聲を絶え絶えに稱名する藤市君の姿も亦痛ましい限りであつた。

同じ宿に泊り合せた人々も餘りのいたいたしさに見兼ねて藤市君に歸國を勧めるのであつた。が。

『いや、私の祈が足りないからです。祈りが通じたら屹度お利益を頂いて母の眼も開く時が有りましょ、今私が歸つたら誰れがこの母の爲めに祈りましょ。』

この位の苦勞は物の數とも思ひませぬ。弘法大師が石を枕とし草を茵として衆生濟度のために流された

尊い涙と血とを慕ひまつる時私の苦行は其萬の一にも足りませぬ。

私は佛の御心に縋つてこの修行を續けます。母の病が治るまで如何なる艱難も忍びます……。

清き涙は頬をつたう。固い決心は融るとも思はれず。人々は堪へかねて共に咽び泣くのであつた。

弘法大師がお巡歴の際、足に豆が出来て大變難澁されたと云ふ豆坂の嶮峻に向つては、流石の母子も身體綿の如くになり足の痛みに母は今や一步も進み得ず遂に其の場に泣き伏した。

『まう駄目だ。私は神にも佛にも見放されてしまつたのだ。こゝでこの儘朽ち果つるのも運命か……』

『ア、勿體ない、母上様。』

眞の信心は疑心を除けよと申します、どうか佛様を疑はず、元氣を出しませう』

竹の笹で谷川の清水を掬ひ、母の口に注ぎ與へ、自分は岩頭に座つて

『三世十方の諸菩薩、希くば我等母子に不二の妙典を示し給え』と一心不乱に祈誓を凝らして遂に夜に及んだのである風は雲を拂ひつくして山色清淨、皎々たる秋の月は樹梢を照らして觀音微妙の相を現はし滔蕩たる内海の碧波は説法度生の響きを傳へ、天地の事象悉く如來の慈悲智慧光明の顯現なりとの無限の感に打たれたる藤市君は、佛の靈驗今こそ身に享け得たる心地して、言ひ知れぬ觀喜の情に奮ひ立ち、立つことも出来ない母を背負つて更に山又山を越えて猛進するのであつた。

斯くも敬虔なる動行と眞摯なる祈念とに依り孝子の至心は佛天に通じけん。不思議にも靈場通路の終りに近く老母の顔は次第に晴やかになつて來た。

涙の腫は祈りに依つて輝き不治の業病も徐々に快方に向つた。

現代に於て奇蹟と云ふものがあるならば此の時、母子の身邊に起つたこの事實こそ、その奇蹟と言ふ可きである。

歡喜に躍る母子二人は相抱いて共に泣いた。

今しも西海に落ちる夕日を仰いで感激に満てる二人が尊き佛の名號を稱へた時の嬉れしさは到底他の味ひ知ることの出来ない歡びであつた。

報恩謝徳の參籠を終り喜びに堪へ難れた母子は更に船で讃岐の多度津に渡り金刀比羅大權現に詣でた。

我が家を出でて早や三週目、あらたかなる佛の加護を蒙つた母子は喜悅の袖を絞りつゝ再び故郷へ歸つて來た。

父や兄姉はもとよりのこと、村の人々も此の奇しき有様を見て大いに打驚き靈徳の廣大なるに感泣せぬ者はなかつた。

神明は一人も遣し給はず

死に勝る尊き苦惱の體驗を経て遂に大慈大悲の佛の御手に抱かれた藤市君は其後益々信仰の道に精進して居られる。

今年の春も早々父を伴つて出雲の大社へ參詣し又最近には村の神聖講の修驗者達に加はつて、大和の大峯山に一家の安隱祈願を捧げられたと聞く。

現在は再び姫路に出で或る會社に勤めながら末の弟に學資を貢ぎ又妹達の面倒も見て居られる。佛の様な君の温容と、誠の心からなる應待に接しては總てのものが明い氣分に更生するのである。

實に藤市君は徳の人であり人格の人であり又熱烈なる汗愛の行者でもある。

天界と人界とを貫通する大悟大覺は學びて得らる可きものではない。それは血みどろになつた體驗による金剛不壞の信念によつてのみ與へらるゝのである。

萬人に棄てられて始めて天意を悟り死に勝る苦惱の修行を経て遂に限りなき愛にはぐくまる。

それ名工は一木も棄てず。神明は一人も捨て給はず。

残されたる使命を與へらるゝ者は幸なり。

謝致し候 前陳の如き可憐のものは尙此上とも特別の御引立を仰ぎ度候 同人に對しては小職より感謝
狀を呈しおき候間御含み置き下され度貴意を得申し候

昭和三年九月十七日

拜具

宮崎縣高岡町長

谷 口 元 次

姫路工場 長殿

X X X X X

このさるさんの寄贈にかゝるお金は額こそ少いが精神的には實に千金に勝るべき尊いものとして當時の
宮崎縣下の數種の新聞紙上に掲載せられ廣く社會に報導せられて幾多の眠れる魂に警鐘を亂打したので
あります。

今では弟さんも出で、働くことが出来る様に成人せられかくして人生の難關を切りぬけたさるさんは
川口家を復興すべく毎日元氣よく働いて居られます。



兵庫縣神崎郡香呂村仲仁野

伊 森 あ や 子

明治四十年三月十七日生

榮光を仰ぎて

秋も半をすぎた何んとなく物淋しい晩である。

白布を吹きながした様に、北から南へ長く市川が流れてゐる邊 西には背の低い一帯の山を負ふて薄暗
い山の蔭に見すぼらしい一軒の田舎家がある。屋根裏から漏れる焚火の煙に壁は眞黒に煤けて、庇の瓦は
波を打つて二三枚も割れて落ちかゝつてゐる。煤けた障子の蔭には二人の黒い影が映つてゐる。

「ねえ、本當にお前が可愛想でならぬ、

昔の様な家なら、こんなみすぼらしい姿をさせんのぢやが。なあ、罪のないお前が可愛想ぢや、許し
ておくれ。

來年の正月には、せめて新しい下駄の一足位は、買つてあげる事も出来やう……」
あや子さんの家は、元は村でも相當な暮を立てゝゐたのであるが、今ではお父さんの好きな酒のために

家産は日に日に傾いて来た。一攫千金を夢みた父は、やがて相場に手を出しはじめた。然し世の中はそんなに簡単に片付くものではない。藻掻けばもがく程、焦ればあせる程、益々深みへ落ち込んで行つて、終ひにはあや子さんの家を見るかげもない零落の淵に陥つてしまつたのである、其後のあや子さん一家の苦しきは到底、言葉には表せない程悲惨なものであつた。然し旃檀は既に二葉から香しい。彼女は夕食がすんで母との間に何時もの様に涙の物語りが始まると、

『お母さん、わたし大きくなつたら、きつと立派な人になりますよ。そしてお母さんのお手傳ひをしますよ。……』と

子供心にも貧の惨めさを味つた彼女は、かく母親を慰めるのであつた。そして他の子供が鬼ごつこをしたり縄飛をしたりして遊ぶときにも、決して彼女の姿を見ることはなかつた。母の手傳ひと学校の復習とが彼女の日課の全部であつた。

桃の花が開く三月の或日の午後のことであつた。あや子さんは學校からかへると、お母さんの前に兩手をついて

『お母さんね、わたしもう直ぐに尋常五年生になるのです。五年生にもなつてお母さんのお手傳ひの出ない筈がありません。お母さん願ひですから、四月から學校から歸つたならばあの高橋工場へ通はして下さいどうぞ御願ひですから』

『あや子、お前の心持ちはよく分るが、然しお前にそんなことが出来るかい。』

『出来ますともきつとやつて見せます。お願ひですからどうぞきいて下さい。御心配なさらずにきいて下さい。』

彼女の顔には固い決心の色が見えた。容易に翻し相にもない其態度を見て、母は父と相談の結果兎も角も彼女の願ひをきゝ入れることにした。

かくしてあや子さんは尋常五年生の四月から近村にある高橋工場に一女工手として働くことになつた。

僅かに尋常五年生になつた許りの少女が殊勝にも家計の援助を思ひ立ち、毎日學校から歸つて来ると、雨の日も風の日も缺かさず工場に通ふいぢらしい姿を見るとき兩親は泣かされるのであつた。

苦學二ヶ年の後、あや子さんには尋常科を卒業する時が来た。卒業證書を手にして懐しの母校に別れを告げる友達もあれば、進んで高等科に入學する者もあつた。あや子さんは勿論高等科へ行き度くてたまらなかつたが、家庭の現状を思ふとき、その様なことが許されさうにもない。さうかといつて學校好きな彼女に夫れが思ひ止まれる筈がない。彼女は煩悶に煩悶を重ねた後、この苦しい思ひを、平素から親の様に信頼する嵯峨先生に打ち明けた。彼女に就いて豫てから始終を知つて居られる先生は彼女の切ない願ひを聞いて御兩親に對し是非高等科へやつて貰ふやうにと勧められた。彼女は終ひに到頭高等科へやつて貰ふことになつたが、友達の様にかに居てお臺所の手傳ひをする位では到底學校には行かれないので、恥しさを

も忍んで今度は播但線香呂驛前の薙吹會社にて吠縫をすることに成りした。會社は學校へ行く途中にあり

ましたので、朝は早くから起きて會社に行き學校が初まるまでに何枚かの吠を縫ひ歸へりには又會社に立寄りて夜おそくまで縫ひ、忙しい時には午後十時頃まで仕事をして寒い冬の夜など淋しい墓場のほとりを一人トボ／＼歸つて行くのでした。かくしてあや子さんは學校へ通ひながら少くとも毎月十五圓のお金をお母さんに渡すのでした。卒業旅行に友達が楽しく出發する時も、彼女は會社の窓から一人淋しく夫れを見送るのでした。かくて大正十年三月二十六日、幾多の嘲笑と恥しさを忍んで漸くにして高等科を卒業したのであります。

此卒業を機會に勤める人があつて彼女は更めて四月四日から東紡姫路工場の仕上科に働くことになりました。初めの中に自ら志願しながら流石に彼女の胸中には色々の悩みがあるらしかつたがあくまで理性に富む彼女は翩然として悟つた。

『かうして働くことは貴いことである。世間の皆さんにまけぬ様に勉強して女學校の本が皆讀める様になるまではもつと奮闘しなければならぬ』

かく決心した彼女は掛員の方にお願ひして其七月から女子寄宿舎事務所の給仕として働くことになりました。間もなく會社の中に設立された東洋女學校に入學し一日の勞働を終へて彼女は楽しくこの學校で勉強するのでした。一日僅かに二時間年限にして三ヶ年の勉學ではあるが、眞劍な彼女の奮闘は普通の女學

校の五ヶ年の勉學にも優るべきものであつた。かくて大正十三年三月二十六日、彼女は東洋女學校第一回の卒業生として榮ある卒業證書を授與されたのである。彼女は亦かくの如き勤務と勉強の餘暇生花、抹茶裁縫の稽古に一寸の油斷もなく然も四ヶ年の間に實に千圓に餘る貯金もいたしました。かくてお盆やお正月にお母さんにお金を上げるのが彼女の唯一つの楽しみでした。あや子さんの努力によつてやがて彼女の家には一頭の牛さへも飼はれる様になり、姉さんの嫁がれるときには數百圓のお金も提供されたのである

惡戰苦闘、日は流れて大正十四年四月十五日、愈々綾子さんの兼ねての念願である遊學に旅立つ日は來た。彼女は今日あるがために貯へておいたお金と、日々のつらい勤務の傍寸陰を惜んで學んだ其實力とを唯一の頼みとして住みなれた姫路の地を後にして東京帝大醫科の附屬病院看護婦養成所に入學することになった。この雄々しい門出を見送つた係や友達は汽車が見えなくなつた頃、みんな顔にハンカチをあてた。僅かに十九歳の少女が前途に遠大な希望を抱いて日夜血の涙が出る様な働きによつて儲けたお金と僅かに養ひ得た學力とを頼みに遠く帝都をさして旅立つ姿は實に崇高なものであると同時に亦餘りにいたましいものでした。かくて一學期の勉強を終へたとき彼女は感ずるところがあつて突如退所して家に歸へることになつた。其の理由については後文彼女自らが語るところによつて、明かなるが如くそこにも明かに彼女の理性の閃きを窺ふことが出来る。彼女は家にかへつた其日から翌年の四月まで、家事の手傳ひをす

る傍、夜の目も碌々に合さないので東京から持ちかへつた本を全く字引と首引で讀破し始めたのである。かくして獨學僅かに八ヶ月にして翌年の四月十一日、岡山縣廳で施行された看護婦試験に目出度く合格したのである。隠れたる奮闘努力は以て察するに餘りがある。同年四月十五日、某會社附屬病院に看護婦として勤務することになった。

向上心にもえて止まることを知らない彼女は、その年の七月ふとしたことから受験雜誌を讀んで専檢といふ試験に合格さへすれば獨學によつて縣立女學校卒業生と同等の資格を與へられたものゝあることを知り手をつけかけた産婆學の勉強もそこゝに其後は女學校の教科書について勤務の傍、更に必死の勉強をつづけたのである。一心といふことほど力強いものはない。翌昭和二年の九月には實に兵庫縣下百何十名といふ受験者中唯一人の専檢合格者として其宿望を達したのである。

當時各新聞紙は筆を揃へて彼女の努力と其名譽とを廣く社會に宣揚したのである。昨年十一月彼女がある受験雜誌に投書したものの要點を抜萃して、彼女自身の口から其苦辛談を聞くことにしやう。

苦しかつた私の過去を顧るとき……いや現在も猶苦しみと闘ひつゝある自己をみつめた時……努力!! 努力!! この努力なくして何が成し得られませう。

私は本年九月第二回専檢に臨んで幸ひにも合格の榮冠を得た一人です。貧弱な受験記を皆さんの前に述べ

べる事は心苦しいと思ひましたが、後進獨學者の爲めに幾分か參考になりましたら幸だと思つて認めたのであります。

私は大正十年小學校を卒業しました。しかし小學校だけで満足の出来なかつた私は、どうかして女學校へ入學したいとたへず願つてゐました。しかし物質的にめぐまれなかつた私は女學校の校門をくゞる事は許されませんでした。くやしい思ひを胸に密めて十五の春私はH市にあるT會社へ給仕として採用されて働きました。しかし學慾にうえてゐる私は他の人の様に暇があつても遊びませんでした。勤務の餘暇同會社内に設立される私立東洋女學校に入學して一心に勉強しました。勤務中は務めを大事と働きましたので主任の方にも年はゆかぬが仕事が出来るといつもほめて下さいまして事務の方にまはして下さいました。

T會社に居ること四ヶ年東洋女學校も卒業した十九の春、私は大きな望を抱いて上京いたしました。そして東京帝大醫科附屬病院の看護婦養成所に入學いたしました。私の希望は晝は看護學を學び、夜は夜學校に通ひ度いのが目的だつたのです。しかし看護學だけでも一心にしなれば人後におちる位むづかしいのですからとても夜學には行かれませんでした。殊に學生時代の二ヶ年間は夜の外出は絶対に許されませんでしたので私の望みはすつかり絶たれました。そこで私は獨斷的な大學退學の決心をいたしましたそれに對し兄から色々とその心得違ひを親切に勸めて呉れましたが一旦決心した私の心はやさしい兄の言葉でさ

へひるがへす事は出来ませんでした。

九月一日、東京の地を去つてなつかしい我家に歸りました。家に歸つた私はこれからは静かな田舎で思ふ様に勉強が出来る事と思つてゐましたがやはり其處にもめぐまれない物質上の苦しみがありました。働かねば食べてゆかれない私の家は本當にみじめでした。未だ計畫も立てゝゐない中に其年もくれてゆきました。これでは駄目だと奮起した私は先づ看護學の方からと思ひ四月の試験までにと時間を作つて一心に勉強しました。四月中旬岡山縣廳で施行されたのに應試しました所幸にも合格してゐましたので四月十五日、現在勤めてゐるK病院に勤務する様になりました。生活の安定を得た私はそれから専檢突破を目標として進みました。

理想に燃え大なる希望を抱いて獨學の道にいそしむ時一人己が心はおどります。同僚間からは變人といはれ、或は嘲笑されても虚榮享樂の誘惑を斷じて退けることが出来ました。強固な意志と不斷の努力を以て目的に突進するならばどんな大難關をも突破する事が出来ます。

私の土地は女子の夜學校もございませんで先生に講義を受ける事も出来ず、私は高等女學校の教科書を全部あつめて主として教科書本位で勉強いたしました。参考書も一通り買ひましたが、やはり教科書によつて勉強する方がよろしい。筆記は最も記憶を確實にするもので一通りは全部筆記いたしました。次に多讀主義です。何回も〜精讀して自問自答します。答案の書き方にも注意して、試験委員の流に合ふ様

に要は簡單にしかも要領を得てゐる様に書く事です。あまりまはりくどく書かぬ様に簡條書にして字は丁寧に眞面目にかく事です。

試験場にては睨目して氣を落着け試験問題紙が配布されても決してあはてず心靜かに目を開き問題を一通りゆつくり落付いた氣持になつて先づ出来易い問題から書き始めます。最後に時間のある間はゆつくりと誤字はないか書落しはないか番號は書いたかよく調べて出す事一度出した答案紙は再び手にもどりませんからよく〜注意する事です。

専檢必ずしも難しい事ではありません。成せばなる成さねば成らぬ何事も成らぬは人のなさぬなりけり獨學者の多くは種々な逆境に立つて運命の開拓に努力せられつゝある事と思ひます。霜雪に打たれるればこそ紅葉も錦をかざる秋は來るのです。

かくの如く岩をも溶かし大地をも焼き盡さんとする意志の力とあらゆる誘惑に打勝つて高遠なる理想に邁進する理性の力とは終ひによく彼女をして専檢の難關を突破せしめたのである。流石に此時は鬼の首でも捕つた様な喜びを感じたのであるが、然し小成に安んずる彼女ではない。彼女の胸からは、汲めども汲めども盡させざる泉の如く、一業成れば更により高く伸びんとする向上の精神が湧いて來る。其年の十月から看護婦長として同病院に勤務する傍、勉學を怠らなかつた彼女は更に大成を期して、東京女子専門

學校に學ぶことゝなつた：東京市本郷區湯島六丁目にありて渡邊滋氏を現校長とする學校である：：聞くとそこによれば目下級長として運動部長として奮闘を續けてゐるといふことである。

嗚呼！奮闘の人、意志の人、理智の人、水晶の如くに透徹なる頭腦と、多年養ひ得たる春の女神の如くに高潔なる愛の力とを以て、使命への充實したる生涯を捧げよ。彼女の健康と幸福を祈つて擱筆する。



兵庫縣神崎郡川邊村上田中

山 元 善 治

明治廿三年四月廿五日生

獨立自尊

工場 の 明星

倉庫の山元善治君と云へば「あゝ、あの現場掛の次席さんかい」と誰れ知らぬ者もない吾が工場切つての徳望家であり人格者である。

平素君の嫌な顔を見た人はよもやあるまい。所謂「怒を移さない」とは君のことである。數多い血氣盛りの倉庫従業員も君が神の如き温容と佛の如き慈顔に接しては凡てが明るい氣分に更生するのである。

實に君の表裏なき至誠と最も旺盛なる責任觀念とは常に同僚の畏敬する所であり先輩並に上役の推稱して止まぬ所である。君が全身全靈を献げての日常は眞に汗愛の行者であり吾が姫路工場の明星である。

君の生ひ立ち

山元君の生ひ立ちに涙ぐましい想出話がある。

君は田地の二町歩も有つた地主の長男に生れ幼時は父母の暖かい胸に抱かれて何不自由のない幸福な月日を送つたのである。

君の母は次の弟を生むや産後の肥立ちが悪く生れたばかりの赤兒と愛しい君を残して遂にあの世の人となつてしまつた。最愛の妻に先立たれた若い父は二人の幼兒を抱へて悲歎の涙に暮れながら淋しい日を過さねばならなかつた。

母乳を奪はれた赤兒も亦幾許もなく母の後を逐つて此の世を去つた。

やがて今の母が迎へられ二人の弟妹も出來たが家庭は更らに味氣なく君は絶えず小さな胸を痛めねばならなかつた。

然し幼いながらに賢い君は繼母に良く仕へ弟妹を勞り學校から歸れば直ぐ野良に出て父を助け農事に勵んだ。

斯くして歲月は流れ明治四十四年君が廿一歳の秋姫路の歩兵第十聯隊へ入營することゝなつた。二ヶ年間の軍隊生活！、君は總ての私情を忘れ只管國家の干城として國民の義務を立派に果たしたのである。

山元君は高等一年半途退學生でありながら頭腦明晰而も其の勤務振りは隊中の模範となり忽ち上等兵となり破格の拔擢によつて伍長に昇進し除隊に際しては時の聯隊長三原大佐より特に成績優秀の故を以て善行證書を授與するゝの光榮に浴したのである。

結 婚

大正元年十一月卅日、多くの村人に迎へられながら山元君は二年振りに懐しい故郷へ歸つて來た。

君の歸りを待ち兼ねて態々村端れまで出迎へた父は見違る迄に立派になつた吾が子の軍服姿を眺め餘りの嬉れしさに咽び泣くのであつた。

君が家に歸つて間も無いこと父母は一家が圓くゆく様にとの心盡しから母方の姪を君の嫁に迎へたのである。

然し日の經つにつれ此の期待も見事に裏切られ意外にも今度は母と妻との仲が兎角圓滿を缺く様になつて來た。

君は氣ひずかしい母を慰撫しどんな無理を云はれても凡て己の信心が足らぬ故と聊かも母を怨むことがなかつた。

然し母と妻との醜い争は日毎に募り何時果るとも思はれなかつた。

遂に最後の日は來た。君は決心の臍を固めたのである。

『家を出よう。自分さへ居なけりや總てが解決するのだ。働き盛りの男が田舎で一生を終るのも残念だ』と一念奮起の心に燃へた山元君は早速父に出郷を願ひ出たのである。

然し君の心事を識る父は不憫な我子の行末を案じて始めは容易に許さなかつたが君の固い覺悟に流石の父もその熱誠に動かされて今は老の眼を瞬きながら

『善治！、若い中に苦勞するのよ又よからう。

然し決して家を忘れてはならぬぞ。お前は山元家の大切な總領じや、父はお前の出世を楽しみに待ちますぞ……』と遂に父親も繼母の手前、家庭の平和の爲めに心にもなく吾が子の家出を許すのであつた。

東 紡 へ 入 社

郷關を出で、新天地創造の熱に燃えて居る若夫婦は終に姫路に辿りついた然して岡らず邂逅した同郷の先輩の世話で急に君は東紡の姫路工場に働くことゝなつた。

それからの君の奮闘努力は實に眼覺しいものであつた。
夏の日も冬の日も撓まず倦まず天に祈り地に禱りて己の使命に邁進する其の眞剣さにはよしや同僚たら
ずとも誰か涙なくして見られやう。成績もグン／＼向上して行き其の刻苦精勵は逆も筆紙の良く盡す所
はない。

平職工で入社した君は忽ちにして優等工となり組長となり更に擢拔されて次席工に昇進し今は多くの倉
庫従業員を指揮して明晰なる頭腦を遺憾なく發揮してゐる。

曾て大正十三年三月會社は君の穩健着實にして職務に忠實なるを賞し其の善行を表彰した。

尚ほ君は又推されて在郷軍人姫路工場分會の評議員となり大正十五年七月青年訓練所が設置するや同
時に之が指導員となつた。其の熱心懇篤なる指導は常に所生の心服する所となり遂に昭和二年十月廿三日
在郷軍人の模範たる者として工場分會より表彰状を授與されたのである。

汗愛の家庭

現在山元君には一男三女があり其の家庭は隅々まで汗愛の結晶に輝いてゐる。

長らく吾が子の爲めに心を悩み續けられた父も晩年は君の立派な姿を眺めて安堵の胸を撫で下し心から
吾が子の更生を喜びつゝ先年君の手厚い看護を受けて遂に亡き母の後を遂つて此の世を去られたと云ふこ

とである。

君は常に自らを謙遜して語られる

「身に懸る凡ての困窮迫害不幸等は皆永遠の生命に到る神の試練であると思ふ時逆境の恩寵を喜ぶ様にな
りました。一汁一菜でも家庭さへ圓滿なれば之に勝る幸福はないと思ひます喜んで下さい、此の三四年は
お蔭で誰一人病氣にも罹らず息災で働いて居ります、今の私には吾子の成長が何よりの楽しみです、自分
は夫として幸福に生き得なくとも吾が子の爲めに良き父となつて尊く生きたいと思ひます。

私は吾が子の爲めに祈つて居ります」

何んと尊い祈りではないか。君は燃ゆる愛と進る汗とによつて現在の地位と現在の楽しい家庭とを作
り上げたのである。實に求む可きは聖き愛と汗の生活である。



廣島縣双三郡和田村向江田七〇一ノ二

河井よし子

明治三十九年十二月二日生

忍苦十年

其日／＼の煙も上りかねるといふ貧しい家に生れ、お金さへあれば朝からでも徳利の側でチビリ／＼や

るといふお酒の好きなお父さんを持つたよし子さんは、未だ物の辨へもつかない幼少の時からお母さんと共に、殆んど廣い世の中にもこれより不幸な人はあるまいと思はれるほど、あらゆる辛酸を嘗めなければならなかつたのです。可憐な女の腕で赤貧の苦しみと戦ひつゝ十歳を頭に幼い四人の子供を養育されるお母さんを見る時に、漸く小學校へ行く様になつた許りのよし子さんの小さな胸にも堪え切れない悲しみが
ありました。

かくて恵まれないよし子さんは早くも、尋常三年生になつた頃から毎日學校から歸つて来てカバンを置くなり家の中へも上らないで、十日或は廿日と他家へ子守り奉公に行つたのであります。お臺所開りの手傳ひがすんで夕飯と風呂をいたゞく頃には最早奥山には梟の啼く聲さへ聞えて、屢々其家で泊つて歸るところさへもありました。夏休みになればどこの家の子供も山よ川よと毎日楽しい日ばかり送るのですが、勿論よし子さんにはそんな楽しい日は一日として恵まれさうな筈がありません。休みを幸に今度の休暇はどこの宅へ次の休暇はどこの宅へと七夕祭も盆の喜びも他所に子守奉公に參りました。然しよし子さんは一寸の暇も勉強を怠らなかつたから學校ではいつも首席を占めて居りました。

六年の義務教育を終へると直ちに田幸村鹽町の鈴木某方へ下女奉公を勤めることになりました。其翌年よし子さんが丁度十五歳の春を迎へた四月のことです。お父さんは酒がもとでふと病床につかれいろく看護もされたが遂に多額の借財を残して亡くなられました。何んといふ悲惨な家庭で御座いませう。さらぬだに貧しいよし子さんの家は、父の死によつて文字通りの赤貧洗ふが如き苦境のどん底に陥らなければならなかつたのです。それからといふものはお母さんと共に毎日涙の日を暮しました。

かくてよし子さんは神の試練といふには餘りに悲惨な五ヶ年の下女奉公を務めた、大正十三年の五月六日齟然として家運の挽回を決意し吾が姫路工場に入社せられたのであります。この血涙が滲む様なよし子さんの工場生活への第一歩は堅實な思想と涙ぐましいまでの努力とを以て續けられました。そして来る月も来る月も多額の送金を以て母を援け國元への通信の中にはいつも弟さんや妹さんへの慈愛溢るゝ激勵の辭が事細かく充滿してゐました。

(弟 よ り)

X X X X X X X X X X

前略 僕が學校に行くのも皆姉上様の御力でありませう。やがて學校を出て或る仕事にたづさはつて一人前の人となれば、きつとこの御恩はおかへしいたします。僕は職人となつて働くがよいか、又勉強して軍人で暮らすかよいか御定め下さい姉上様の云はれる通りを守ります……

(弟 よ り)

前略 先日新聞に姉上様の事が出て居ました。夫れを讀んだ時何んとも言へん思ひがこみ上げて胸一

河井よし子様

數年前から工場の一角に點ぜられた汗愛の靈火は又よし子さんの心にどれほどの心強さを與へたか分り
 ません。よし子さんは修養團の講演に、又毎月配布される雑誌「愛と汗」にどれ位力を得たか分りませ
 ン。『あゝ、この尊い雑誌！ 自分を救つて呉れたこの尊い雑誌、多くの悲しめる人に讀ませてあげたい。』と
 こまでも同情心に富むよし子さんは去年の夏頃から毎月無名で「愛と汗」を母校へ贈りました。毎月無名
 で送つて來る雑誌、それはどこから送つて來るのであるかは學校では全く分らなかつた。後になつて漸く
 にして夫れがよし子さんからであることを確め得た校長さんからは次の様なお手紙が參りました。

拜啓 未だお目にかゝりませんが手紙の上で失禮致します。近頃大變お寒くなりました。御地も定め
 し同様かと存じますが御身にはお變りありませんか、お伺ひ致します。

扱て實は一寸お伺ひ致しますが此夏頃本校卒業生が修養團發行の小雑誌「愛と汗」二回ばかり又々本
 日三冊送つて來ました。前に届いた當時種々問合せたりして調べました。其時多分あなたではあるまい
 かと心付きました節がありまして夏の頃、二度ばかりあなたの宅にお母さんを尋ねましたが毎度逢へな
 かつたので其儘にして居りました。先頃又二度程尋ねましたがどうしても逢へませんので其夕方又尋ね

ましてやつと逢ふ事が出來ました。逢つて種々手紙に書いてあつた事など引合はせ問合せましたが多分
 違ひもあるまいと此所に此の手紙を送ります。

以下略

十一月三十日

双三郡和田小學校長 宇都宮 豊

河井よし子様

體驗するもののみ與へられた力とでもいふのであらうか。生れながらにして貧苦と戦ひあらゆる社會
 苦と戦つて惡戰苦闘をつゞけて來たよし子さんの胸には尋常の人に見ることの出來ない忍辱と同情と感謝
 の熱涙があります。

今年の七月十日、よし子さんの郷里では庄原より三次に通ずる縣道に沿ふた立派な家を買ひ入れられま
 した。やがて大工職を手に入れて歸つて來られた弟さんの鐵鎚の響がこの家の中から聞える時こそよし
 子さんの永年の辛苦が報いられる日であります。



鶏群の一鶴

島根縣藤川郡莊原村上莊原二二六八番地

青木アサ

明治三十一年十月十日生

蛹粉を浴びた身體をはらひつゝ、強度の近眼鏡越しに「何も人様の御世話をしたと言ふでなし婦人會にも別に之と言ふ力を盡した事もない私に美點も美談もありませんよ」と謙遜し口を閉して何も語らうとしな

アサ女は姫路市の生れで姫路市野里小學校の尋常科を卒業して、メリヤス工場に二年餘りを過し大正八年四月十四日創設當時當姫路工場に入社してより今日に至る迄で恰も十年一日の如く撰別科の組長として蔭日向なく克く立働いて居る。部下を慈しむの温情は慈母の如く、上長に對しては命これ従ふと云ふ心掛けて、事に當つて居りますから後女の周圍は常に春のやうな空氣がたゞよつて居ります、些の波風も立たず圓滿に立派に仕事に涉どるのは主としてアサ女の采配の振り方が大なる力をなして居ります。殊に此撰別工場には幼兒を持つ主婦を保護すると云ふ工場の方針に基いて主として、家族もちの通勤の人々を包擁

してありますから此等の人々を圓滿に指導統一して行くには、容易ならぬ苦心と努力を要するのであります。こんなむづかしい撰別工場が不思議にも、今日まで長い間、些の問題をも惹き起さず全くの家庭的和合氣分が横溢して居ります。

大正十三年八月社宅主婦中心の東洋婦人會が創設せらるゝや、衆に推されて幹事となり會長を助け幹旋至らざるなく爲に同會の事業は目を追ふて隆盛となりました。同會の農園經營にあたりても眞先に鍬をとりて奉仕の範を示し、集會、見學、旅行等の場合には終始總ての世話をなして飽くことを知らず、婦人會のため献身的の努力をなし只管同會の發展を祈つて居ります。彼女が多年の高風は當然酬ひられる時が來ました即ち昭和二年二月二十日當工場に於て彼女が善行を表彰せられ榮ある赤章を授けられたのであります。舊姓を岡アサと云ひしも大正十二年、青木氏に嫁し爾來琴瑟相和し人の美む家庭をいとなむで居ります。冀くば此佳人に、永久に幸多かれと祈るものであります。

兵庫縣揖保郡網干町興濱二六六番地

津田 巍

明治四十一年七月七日生



模範青訓生

孝行者で通つた津田君

大正五年の四月の末の頃、播州の山野に青葉の春が訪れて、咲き競ふ花から花へと蝶が舞ひ、着飾る人の出足も繁く、花見に興ずる季節であつた。

津田君の家は祖母と父母に兄弟四人と合せて、七人暮らしの家庭でしたが其頃祖母は老衰から臥床し一家を支え行く父は毎日の生活苦からか遂に病床に横たはる身となり、さなくとも生活に追はれ行く一家は花見もよそに打ち沈み何となく暗い感じをさへ與へてゐた。

「姉さん今日は大分張れましたね」

「おやおまへも澤山に」

「もうお薬を貰ひに行かねばなりませんね」

と姉と弟との話かもれて来る。

マッチの箱張りに餘念ない姉と弟の話が途切れた後は又前の静けさにかへつて行つた。

毎日學校から「唯今」とかへり来る間もなく、遊び度いので一杯の子供心にマッチ張りをして暗い病床に臥する祖母と父の薬代を稼ぎつゝ母を助けて行く姉と弟は、近所の人の誰もが涙して其孝行を賞めるのであつた。母の苦勞を幾分でも助けてと、心掛ける姉弟の眞情と頑是無い弟妹を愛撫して行く姿に母は人知れず涙に袖を濡すのでした。其頃ではマッチを張つた僅かなお金でさへ直ぐに父や祖母のお薬代にかへられる様な有様であつた。

神に通ずる孝子の祈りと懇ろな母の看護とによつて父と祖母の病氣は幾分づゝ快方に向つて来た。

津田君一家が永年住み馴れた網干町を涙の目に見返へりつゝ、姫路市京口町に引越して来たのも其頃のことであつた。

一生を誓ふ禁酒禁煙

姫路に来てからも相變らず學校から歸へるとマッチを張つて家計を助けて行つた。虚弱な身體の父も青物の行商を始め母と姉とは東洋紡姫路工場に通勤する様になつて始めて津田君の家にも幾分の凌ぎがつくやうになつた。

津田君が尋常科の卒業式を済した、其翌日には既に活版屋の小僧に早替りしてゐた。貫つて来る僅かばかりの給料も其儘母に渡して其喜びの顔を眺めては獨り喜んだ。偶々大正十一年の夏も終る頃、津田君も亦機会を得て東洋紡に入社するととなつたが其働らき振には實に眞剣なものがあつて皆の者が驚く程だつた。然かも其身を持つること極めて謹直で一生涯酒も煙草も吞まないと決心してこれを守つて行つた。工場に禁酒聯盟が出来たとき率先してこれに加盟したのである。

既に彼の働らきは人々に認められて一部の責任を持たさるゝ様になり其間家に届けたお金も驚ろく程の多額にのぼつたのである。

青年訓練所に皆勤すること茲に二ケ年

昭和二年の九月二十日誰よりも彼を愛して呉れてゐた祖母は一家中の心からなる看護の甲斐もなく永眠して行つた。彼は悲しみの中にも早速日頃節約してゐた貯金から百圓を引出してお弔ひの資に持ちかへることを忘れなかつた。打ち沈む兩親の顔に喜びの色を見て何にも譬へ難い満足を感じるのでした。愈々野邊の送りもすんで午後五時

「あゝ今晚の午後六時」

「そうだ訓練があるんだ」と

彼が思ひ出したのは青年訓練所の日課だつた。

「お父さん、私は今晚是非會社に歸へらねばなりません、訓練があるですから」と云へば集ふ親類の人々も驚ろき顔に見やりつゝ、

「今お葬式がすんだばかりじゃないか、もう一晚は」と云ふのも聞かず

「もう時間がありませんから」と唯一言。

身は青制服に、早や戶外へと飛び出し一目散に工場へと馳せ續けた。

息もせき／＼辿り着いた彼は勇敢に然かも元氣満々たる態度で其晩の訓練に加つた。

津田君は青年訓練所に入所して以來二ケ年間一日の缺勤もないのみならず其態度は常に一般青訓生の模範とせられてゐた。

堂々と訓練を終つた彼は大地に座して澄み渡る青空を仰いだ、そうして責任を果し得た何とも云ひ得ない好い氣持ちにはなつたが心の底から祖母を亡くした悲しみが今更の様にこみあげて來た。地上に涙の跡を残して彼は立ち去つた。

模範青訓生として表彰せらる

青年訓練所生徒 それは第二の國家の干城だ、小さい軍人だ、一朝事があれば軍人に亞いで立つべきものだ、あゝ津田君の行爲——青訓生として否帝國軍人の行爲として恥づかしからぬ行爲である、胸中に潜む精神の力は事あるときに發揮される。

然かも彼語るにあらざり人問ふにあらざり、彼の行爲はいつしか神の聲となつて工場長の耳に入り模範青訓生として表彰の讃辭を受けたのもそれから間もないことであつた。

謹嚴にして至孝なる君は、私事と公事とのけじめを正しく守り、悲痛の裡にあつて其心を取り紊さず、綿々たる私情を排して、おのがなすべき責務に忠實なる態度に實に偉とするに足るものであります。

尚右津田君の美談に關しては陸軍省內徵募課、姫路聯隊區司令部發表、高砂青年訓練所指導員、小林正夫氏編輯の『青年訓練美談』第一輯に掲載せられてあります。(昭和二年十二月發行)



鳥取縣東伯郡下鄉村下大江

中原 松子

明治四十年四月十七日生

母校 愛

昨年(さくねん)の十月のことであつた。松子(まつこ)さんがいつもの様に工場(こうば)の作業を終へて、寄宿舎(きやうしやく)に飯(い)つて來ると國元(くにもと)から一通の手紙(てうし)が届(とど)いてゐた。喜んで開(ひら)いて見ると、今度(こんど)兄(あに)さんの縁談(えんだん)が決(きま)つて愈々(いよいよ)來月(らいげつ)は式(しき)を擧(あ)げるこゝとなつたから、暫(しば)らくのお暇(ひま)を貰(もら)つて飯(い)つて來る様(よう)にといふのであつた。

松子(まつこ)さんは踊(おど)り上(あ)がるほど喜(よろこ)んで頭(あたま)の中(うち)には直(た)ちに、子(こ)供(ども)の頃(ころ)の故郷(こきやう)を描(えが)いて、暫(しば)くは我(われ)を忘(わす)れて空想(くうそう)に耽(たづ)るのであつた。

『あの懐(なつか)しい學(が)校(こう)、N先生(せんせい)はどうしていらつしやるかしらん。何處(どこ)へ行(い)くにも一度(いちど)として離(はな)れたことになつたY子(こ)さんは、今頃(いまごろ)、どんなにしていらつしやるかしらん。』

松子(まつこ)さんは、早速(さつそく)工場(こうば)のお許(ゆる)しを得(え)て久振(ひさびさ)りに故郷(こきやう)へ飯(い)つて來ることになりました。

Y子(こ)さんは自分(じぶん)の一番(いちばん)仲(なか)の良(よ)かつた松子(まつこ)さんが飯(い)つて來られたといふことを聞いて早速(さつそく)、その宅(たく)を訪(たず)ねました。そして二人(ふたり)は久振(ひさびさ)りに出會(であ)つて、あれやこれやととりとめもなく全く(まったく)時間(じかん)を忘(わす)れて語(かた)るのでした。日が暮(く)れる様(よう)になつて、Y子(こ)さんは松子(まつこ)さんと一緒(いっしょ)に、來(きた)る二十三日(にじゅうさん)に行(い)はれる母校(ほっこう)の運動會(うんどうかい)を見(み)に行くことを約束(やくそく)して別(わか)れを告(つ)げました。

松子(まつこ)さんの母校(ほっこう)は殆(ほと)んど廢(はい)朽(く)に近い古(ふる)い校舎(こうしゃ)である上に、年々(ねんねん)増加(ぞうか)して行く兒童(じやうどう)を收容(しゆよう)するには餘(あま)りに狹隘(けいがい)なものであつたが、この夏(なつ)漸(あ)く立派(りつぱ)な新校舎(しんこうしゃ)が増築(ぞうちく)されて、つい三週(さんしゅう)間(かん)許(ゆる)り前に村民(そんみん)狂喜(きやうき)の中に盛大(せいだい)な落成式(らくせうしき)が催(もよほ)されたのでした。こういふ意味(いみ)から、本年(ほんねん)の運動會(うんどうかい)は例年(れいねん)の夫(そ)れよりも遙(はる)かに盛大(せいだい)なもので、此日(このひ)は、村(むら)の五月(ごがつ)休(やす)みの時(とき)の様(よう)に各戸(かくこ)とも朝(あ)から仕(し)事を休(やす)んで、腰(こし)の曲(まが)つた年寄(としよ)りまでが孫(まご)の競技(けいぎ)振(び)りを見(み)に出(で)かけました。

朝(あ)早くから素敵(すてき)に景氣(けいき)のよい煙火(たばび)の筒音(つづみね)がする。一點(いっぴん)の雲(くも)もなく晴(は)れ渡(わた)つた秋(あき)の空(そら)には、運動場(うんどうじやう)に建(た)て

られた萬國旗が心地よく翻つてゐる。學校の前の通りには、露店が七八軒も居並んで子供の客を呼んでゐる。子供の吹くゴム笛の音が如何にも田舎らしく平和そのもの、様に聞えて来る。會場は出發の號砲がなり響く度にドット動揺する。

松子さんはお友達と一しきり競技を見た後、立派に出来上つた新校舎を一々叮嚀に見て廻りました。裁縫室も理科室も何れの教室も、これが曾て自分等も學んだことのある學校だらうかと思ふほどに立派

になつて居るのに驚きました。そうして玄關の所までやつて来ると、そこには輝くやうな新校舎の中に古びた柱時計が如何にも疲れ切つた駄馬の様に時間を刻んで居るのに氣がついた。

松子さんの眼にはこの新校舎の中に古ぼけた小さな柱時計が懸つて居るのが、如何にも不釣合ひに映りました。

松子さんは思はず其前に立留つて何事か暫く考へ込んで居ましたが、やがて胸の中には一つの考が浮んで来たのであつた。

『折角、立派な新校舎が出来上つたのに、所もあらうに、玄關先に、こんな古ぼけた時計がかゝつてゐるのは如何にも不釣合ひだ。』

そうだ。私はあのお金で立派な柱時計を買つて寄附させていたから。平素始末にしてゐいたのもこの様なときに用立てるためでした。

是非寄附させていたから。

この時、松子さんには、良子女王殿下の御成婚記念貯金といふものが九十圓ほどたまつてゐた。

それは松子さんが殿下の御成婚を祝して、月々着物が一枚ほしいと思ふときにも、下駄が一足ほしいと思ふときにも其欲望を抑へて別に積立てゝゐいた極めて意味の深い記念貯金であつた。

松子さんは何か自分の煩悶でも解かれた様に、全く明るい氣持になつて運動會もそこ〜に、其日は勇んで家に飯りました。

やがて彼女は、兄さんの婚禮式を濟ませて工場へかへると、直ぐに三十餘圓の立派な柱時計を購入して母校へ寄贈しました。

母校に於ては、思ひがけもない寄贈をうけ、然もそれが可憐な一女工さんから贈られたものであることを知つたとき、學校の先生も、役場の村長さんも助役さんも、全く感激に打れて或る深刻なものを考へさせられました。

この美談は誰いふとなしに次から次へと忽にして、村中の人に傳へられました。

十二月六日、母校の修道小學校長中原龜吉氏からは左の如き懇ろな禮狀が参りました。

X

X

X

X

拜復、初冬之候、貴女様御清穆之段奉賀候。陳者、先般は御歸郷被遊丁度其際本校秋季運動會にて

御來觀被下候趣、多忙の爲め御目にかゝらず残念仕候。

豫て當校も狭くて困り居り候處、本年漸く増築九月落成仕候次第、就ては今回増築記念の爲め結構なる大時計御寄贈に預り御芳志厚く感謝仕候。

何れ村會開催採納決議に相成候へば村當局よりも感謝狀發送相成る事と存じ候。

本校出身者にて斯かる特志者を出したるは本校は素より本村としての名譽に御座候へば、村長始め役場吏員諸彦迄が非常に喜ばれ居る次第に御座候。

時計は大切に保存方法を探り職員兒童が毎日便益を受くる様、取扱ひ致し度存居候。

先は亂筆を以て御禮申上度如斯に御座候。

時節柄御自愛之程乍蔭祈上候。 頓首

大正十五年十二月六日

修道小學校長 中原 龜 吉

中原 松子 様

松子さんの寄贈にかゝる大時計が、母校に時間を刻み行くとき、そこには永遠に勤勉と母校愛の可憐な物語が傳へられるでせう。

鳥取縣氣高郡青谷町夏泊

遠 藤 わ い

明治四十一年十一月十五日生



愛は總てを生かす

大正十五年の一月、いつになく寒い或日のことでした。どんよりした灰色の空からは雪さへ散らついで手洗鉢の水は朝から凍つて終日溶ける暇さへなかつた。太陽が男山の麓に落ち様とするこんな寒い日の夕方、凍る様に冷たい廊下の板張りの上を足袋さへも穿かずに受持のS先生のお室へどつと泣き崩れた一女性がありました。S世話掛は餘りに突然の事に驚いて

「あなた、どうなさいましたか。」

「.....」

只泣きすする聲のみで答はなかつた。

「あなた、どうなさいました。どこかお病いのですか。」

やさしい問が繰り返された時、この女性は徐に顔をあげて

「先生きいて下さい。誠にお恥しいことですが……」
踊る胸を押へながら

「私には二人の弟があります。其弟から只今手紙が参りました。其手紙によると弟等は兄さんがお酒を呑んで働かないために此の寒い日にシャツも着ず足袋も穿かないで毎日、日本海からあの寒い風が吹き荒んで来る學校へ通つてゐるさうです。こんな便りを聞いては私はもう一刻の間もじつとして居られせん。先生、少しの間外出させて下さい。私はシャツと足袋とを買つて来て弟に送つてやりたいのです。」
S 先生の眼には涙が浮んだ。

「それはまあ本當にお氣毒なことです。よろしい直ぐに行つていらつしやい。お金は有りますか……」
「……………」

「それだけでは足りないでせう…………」。さあ、これを持つてお出でなさい。」

「先生、御無理なお願ひをきいていた上に、尙も澤山なお金までお貸し下さいまして本當になんとお禮を申上げてよいか分りません。早速、これでシャツと足袋とを買つて来て送つてやります。先生、本當にありがとうございました。」

彼女は寒いのも忘れた様に町へ飛び出してシャツと足袋とを買ひ求めてすぐに之れを一個の小包とし、尙細々と弟をいたわり勵す手紙を認めて、喜び勇んで郵便發送係に托しました。

「先生、ありがとうございました。只今發送いたしました。明後日の晝頃には弟がどんなにか喜んで受取つて呉れることとせう。」

弟から喜びの返事が来たのはそれから四五日してからの事であつた。

「謹んで申し上げます。大變に寒さがきびしくなつてまゐりました。ねえさんはお變りはありませんか。家のものは一同無事に暮して居りますから御安心下さい。昨日はシャツと足袋とその他の外いろ／＼なお土産をお送り下さいましてどんなに喜んでことか分りません。又高等へもやつてやるといつて下さつて僕はどんなに嬉しいか分りません。」

僕はねえさんの言葉通り、おかあさんにきつと孝行いたします。以下略

わ い ね え 様

六 藏 よ り

読みゆく手紙の上には喜びの涙が落ち、彼女の心には愛の満足がありました。彼女はこの手紙を読み終つたとき、ほつとした思ひで足袋を穿いたのでした。
彼女の家庭は兄が酒を飲むといふことのために常に暗い蔭に閉ざされて小さい子供までが幾多の苦しみ

を嘗めなければならなかつたのです。彼女の兄は幼少の時から何時も、あのヌット海中へ突出てゐる長尾の岬の足許にある青谷町から舟を出しては日本海の荒波を乗り切つて二里三里と遠方へ漁業に出かけて居ました。漁村の常として未だ年もゆかない頃から酒を飲み始めました。初の中は交際で飲んだ酒が今では酒に呑まれて前後を忘れ其日の仕事を忘れる様になりました。少し小金がたまれば櫓を操る氣にはなれなかつたのです。家庭の不和は絶えず。時にはお母さんを足にかけることさへもありました。この兄さんの意情とやけ氣味に近い亂暴とに母親を泣かし弟妹を泣かし親戚近隣の人さへも全くもてあます様になりました。わいさんは小さい胸を痛めた。何んとかして兄さんを正しい道へ導くことが出来たならお母さんや親類の人はどんなに喜んで下さるでせう。そう思へばどんな苦しい目に遭つても兄さんのために努めなければならぬ。わいさんは幾度となく涙の手紙を書きましたが、然し一度邪道に陥つた兄さんの耳に入りさうな筈がありません。兄さんの意情は日々に増す許りでした。

『來年の正月、福崎で修養團の講習が開かれる——』この事を聞いたわいさんは小踊りして喜んだ。『兄さんの魂を明るみへ出すのは此時である。』こう考へた彼女は早速に講習の司會者である縣聯合會本部へ會費を収めて受講を申込み、兄さんの方へは左の手紙を發信いたしました。

「一筆申上げます。」

X X X X X

おなつかしい皆様、お正月も日に近づいてまゐりましたね。今日は御親切なお便りを下さりましてありがとうございました。厚くお禮申上げます。私もお陰様で毎日元氣よく働いて居りますから何卒御安心下さいませ

先日、私が歸宅致したいといふ手紙を差上げました其返事をいたゞいて私は嬉し涙にくれたのです。有り難うございます。皆様が私の歸るのを喜んで待つて下さるとのこと、私はなんとといふ幸福者でせう。けれ共兄さん、先日は歸宅する積りで御手紙を書きましたが、よく考へて見ると私が歸ることになれば初めての事ではあるしどうしても澤山なお金があると思ひます。そうすると舊お正月にお送りするお金が少くなつてお母さんに御心配をかける様にならうと思ひます。一度兄さんに來て頂き度うございます、そうして種々と話したく思ひます。新正月は海も荒れるでせう。兄さん私が可愛く思はれるならば一度來て下さいね。お願いいたします。兄さん、私がいつも修養團のことを書いて種々申上げても兄さんには解らないと思ひます、修養團の精神は一度兄さんに講習をうけていたゞかねばわからないと思ひます。勝手とは思ひましたが修養團の方へ講習をうけさせていたゞかやうに申込んでおきました。お正月までには参加證が届くことと思ひますからそれを大切にして私の所まで持つて來て下さいね……兄さん眞に家運を明るくし弟二人をよい青年にするにはどうしても兄さんに修養團精神の味を知つていたゞかねばこの弱い私一人では到底出來ないと思ひます。兄さんがこの頼みをきいて下されば私の

身はどうなつてもいとひません。又兄さんのお頼みになつたことは自分でできる事はどんなことでもきかせて頂きますからね。

兄さんは講習とはどんなものだらうと思ひなさるでせう。すべての事は講習をうけて分ること、思ひます。

十二月十日

以下略

なつかしき兄上様へ

たのむ妹より

彼女はこの手紙を出して兄さんからどんな返事が来るだらう……。と毎日、多大の期待を以つて待つてゐました。今日は来るか、今日こそ来るかと思つてゐる間に師走の空はズン／＼流れて昭和二年も暮れて参りました。然し兄さんからは何の便りもありません。

彼女は立つてもゐてもゐられず断然、意を決して先生に請ふて明る元日の午前九時三十二分の列車に乗じて歸國いたしました。そして其晩は叔母の宅に一泊して今度の企について話し叔母の同意を求めました其翌日恰も母は七里餘の所へ行商に出かけて留守中であつたので姉と兄とに懇々と訴ふる様に話しました姉は出来るだけのお金は惜しまぬから行つて呉れる様にと話しました。切な姉妹の願ひに兄も其上拒む言葉がなかつた。止むなく三日の午前十一時の汽車に乗つて兄は妹と共に姫路に來り其晩は會社で泊り翌

四日からの講習に不精無性ながら出席することになりました一喜びした彼女の胸には又娘心に第二の不安が訪れて來ました。

「あれほどきつぱりと更生するに間違ひないといつておいたのに若しもそこに何等の感激と更生がなかつたとしたならば姉さんや兄さんに何んといつて御詫びをしやう……。どうなることでせう

……いや神様はキット私等を救つて下さるでせう。」

この福崎に於ける講習は一切の傳統的差別を超越してあらゆる階級の人々を網羅した昭和三年の新春劈頭を飾るに十分な意義深きものでした。

然るにどうでせう。奇蹟とでもいはうか、かくも頑固であつた兄は三日間の講習を終へて見るからに明るい顔を以て妹を訪ねて参りました。わいさんは一目見るなり兄の心の全部を讀むことが出來ました。兄は感激と狂喜せん許りの喜びを以て細々と講習によつて自己の生れ變つた喜びを物語るのです。涙ぐましく二人の心は平和と感激にみちました。前非を悔ゆる改心の青年、宿昔の祈願を成就した少女の喜び眞に愛を知るもののみが測ることの出來る悦でした。三日間の講習によつて始めて自己の眞實の靈を見出したこの青年は引續いて開催された吾が姫路工場の一夜講習會にも出席して本當に狂はんばかりの歡喜を以つて歸國しました。間もなく作川工場長の許へ次の様な手紙が届きました。

X X X X X

拜啓 貴社におろかものが参りまして、種々御親切な御世話様に相成り誠に御禮の申上げ様がありま
せん。先生、前年御無禮之段は何卒御許し下さい。お願いであります。私は今度尊い先生方の御盡力で
修養園へ加入させていたゞきまして始めて世の中が明るくなりました。今後は絶対に禁酒して今迄のと
りかへしをするつもりですから、どうぞ宜しくお願い申し上げます。
—以下略—

×

×

×

×

何といふ尊い 魁りでせう、わいさんの喜び、お母さんの喜びは勿論、今は村中の人の喜びです。

この青年が母の前に、姉の前に、友人の前に跪いて懺悔の涙にむせびながら更生の前後を物語つた時、
かつては希みの光をさへ失つた其家庭に今はまげゆい許りの平和の光が訪れて庭に咲く草花までが生々と
して見えました。平和、希望、感謝、信仰：あらゆるもの、喜びが、わいさんの兄を愛し母を思ふの一
念から生れたのであります。

姫路市 大野

松 尾 政 治

明治十一年一月十一日生



大野の毒

愛と汗とに輝く東洋紡績姫路工場の従業員中には是れは又恵まれない家庭を擁して其燃え盛る郷土愛に最
善を盡し人知れない幾多の辛酸の努力で数年の中に郷土を富まし、村民を幸福ならしめ以つて今日他村の
羨むが如き産業の振興を來さしめたさくだに愉快な物語りは松尾政治君半生の努力である。

妻が死んでから

姫路市の北部郊外で春は櫻、秋は紅葉に天然の粹を蒐むる増位温泉に程近い大野に住する政治君は今
を去る九年の昔大正八年の頃であつた、貞淑な最愛の妻女はフトした病が因となつて後に遺る二人の子供
に盡させぬ愛着を惜み乍ら悲痛の涙の中に黄泉の客となつたのである、中年の男盛りの身で十二歳と七歳
との二兒を抱いて其日から男やもめの詫しい暮しを続けねばならなくなつた君は實に他の見る目も氣の毒

な状態であつた。

夜半の夢覺めて寂寥そゞろに身に浸み渡る時、傍にスヤ／＼と眠る無心な愛兒の寝顔を視つめて幾夜哀愁の涙を流したことであらうか、

『可愛想にな、お母あがない斗りに小さいお前達は淋しい事だらうよ、だけど不自由だらうが辛棒しておくれ、是れもいとしいお前達を繼母と云ふ冷たい人の手にかけてさせたくないからだ』君は右と左に子供の頭を撫でながら涙と共に云ひさせるのであつた。

素直な姉妹はよくさゝ分けて呉れた、流石に年上だけに母なき後の姉は涙なき妹をよくかばつてやるのである。

それでも生活に充分恵まれてゐる家庭であつたならば、君は始終家に居て二人の子供を充分愛護してやる事も出来たであらうが、何分工場に通勤する身分なので朝はまだ暗い中から家に心を残して稼に出て行かねばならぬのであつた、君が一日の労働から疲れて歸つて来る頃になるとやつと夕餉の仕度を終つた姉妹が定つた様に村はづれまで迎へに出てゐる、廣峯や書寫の夕風に吹きさらされてシヨンポリと父の歸りを待つて居るいぢらしい少女の姿に村の人々は誰一人として袖を絞らぬ者はなかつたのである。

辨當箱を小脇にかい込んで、いそ／＼と歸つて来る父の姿を見つけると二人の子供は走つて行つて左右から取り纏るのである『お父ちゃんお歸り、お父ちゃんお歸り』それは二人の子供が憧れる一日中の一番嬉

しいときであるのだと思ふと一層いぢらしくなる、時には近所の悪たれに『母のない子』としていぢめられた留守中の悲しみを涙乍ら語る事もあつた、君はそれをどんな辛い思いで慰めてやつたらう、そして、『男やもめにうぢがわく』と云ふ世間の諺も君が子供を思ふ切ない愛情の真心の前には只一片の譬喩にしか止まらなかつたのである。

燃ゆる郷土愛

こんな恵まれない家庭の主であつた君が一面に燃ゆるが如き郷土愛に大きな念願を持つて邁進した跡を顧るとき全く其崇高なる人格に敬服するのである。

『どうかして村を發展せしめねばならぬ、生命に換へても其れは果さねばならぬ自分の使命である、見よ現在の村人の生活は僅に細い煙も立ち兼ねて居るではないか、』と朝に夕なにゆらくと立ち昇る界限の煙を仰いで君が歎し且つ奮起した、當時の大野と云へばなる程山峽に僅少な田畑を擁する寒村で働きある者達は先を争ふて出稼の旅に出で、後には可弱い婦女子や老人子供が僅の瘦た田に働を續けてゐるのに過なかつた。

培れた郷土愛の萌芽

七〇
寝ても覺めても村の現狀を救ひたいと念願止まなかつた君の眞心に恵まるゝ時が來た、一日鳴尾の友人を訪ねて其隆盛な毒の栽培を親しく見せてもらつた事があつた、其とき豁然として手を打て君は叫んだ、「是れだ！是れだ、是れを他に何物があらう」

友人に懇請して毒の苗の幾何かを握つて歸つて來た君は實に欣喜雀躍したのである。

幾坪かの土地に其れを栽培した君は祈りに祈つた、而して勤勞の餘暇を以て全生命を打ち込んで培養したのであつた、愛を通して、汗を通して其處に實に尊い萌芽が育てられて行つた。

「人の至誠の通ずる所天よく之れを助く」とか、果して熱誠一年の努力は氣駄ではなかつた、大粒の毒が房々と鈴なりに實つた、村の誰彼が傳へ傳へて見に來た、「成る程、く」と云つて感心した、此の中で豫て此の様な果物栽培に非常な趣味を持つ某と云ふのが一番に共鳴した、「君やらう、麥作を止めて是れをやらう、どれ丈け利益が上るか分らん」と肩を叩いて喜んで呉れた、斯くして二人、三人四人と賛するものが只管毒の栽培に精進することになつたのである。數年後の今日姫路の大野と云へば有名な毒の生産地になつてゐる、眞赤に實る初夏の頃になると引きも切らぬ遊客が遠近からどん／＼と入り込む、ジャムとなつて捌けて行く、村がだん／＼と有福になつて行く、組合が出来た、目覺ましい發展である。古い土塀が改築されて新しい檜の門が出来た家、葦屋根に換へるに輝々たる瓦屋根が殖へる、白壁の土蔵が出来た、今年は米作が悪かつた、やれ何處其處には小作爭議だ、血の雨が降つた等と世間でさわいで居る時でも、此

大野丈けは毒から得る甚大な収益が村人を豊かな生活に恵んで呉れるのである。

松尾政治君の郷土愛の念願は遂に斯くして報いられたのである、されど努力の君は今も尙工場では用度掛助手として責任重い仕事を果しながら歸宅すると休息の暇もなく野に出て汗を流し、村人と協力して山の開墾に努めたり、組合の爲めに或は東奔西走涙ぐましい活動を續けて居られる、そして可愛い二人の姉妹は一人の父に母の分と二倍の孝養を勵んでゐられるのである。



家産復興のツネ女

兄の酒亂はどうしても止まない。それどころか遂には家産全部を之れに入れて仕舞つても尙覺めない。両親は泣き、兄は怒り、伯田家は現世の地獄かと思はるゝ程に暗くなつて行く。かの女は考へた。自分のなすべき道を考へた。私は之れではいけない。自活の道を立てなければ駄目だ、両親を兄に任かしてゐたのは私の間違であ

群馬縣佐和郡玉村町上新田
伯田ツネ
明治三十三年六月十二日生

つた。私はこれから働けるだけ働いて家屋敷を取り戻さなくてはならない。『お父さん、お母さん！今暫く御辛抱下さいませッネは屹度〱御安心の行くやう致しますから、』……

上州人特有の血を受けたかの女の信念は堅かつた。
大正八年七月六日當社豊橋工場に入社したが今迄の下女奉公に比べて見て工場の作業など何でもなかつた。拘束されない丈けでも愉快でならなかつた。

それからのかの女はほんとうに苦闘した。

ある時は着物を見て笑はれた……

ある日は日傘が時代後れだと笑はれた……

下駄がどう、帯がどう、と人の話の種にならぬはなかつたが、然しかの女は常に飾らず、装らず、自分が嘲笑さればさるゝ程両親の歡を増す事となる、即ち此反映あることを自覺して却つて千萬金に價する忠言だと感謝してゐた。

大正九年の秋早き頃姫路工場へ轉勤を命ぜられたが、その頃には自己の目的の大半は成就してゐた。即ち家が両親の許へ戻つて來たのである。両親の歡びを見たかの女は母親に飛付いて泣いた。

『お父さんお母さんもう少し御辛抱下さい田畑を手に入れる迄生きてゐて下さい。ッネは又根限り働いて御安心の行くやうに致しますから』

慰の言葉にも兄を恨むやうなことはないが神の試練はまだ止まない。兄の酒亂は嵩じて再びかの女の家を飲んで終つたのである。これを聞いてかの女は泣いて泣いて泣き通した。が、ハツと何か心に閃いたものがある。それは日頃信ずるイエスの姿である。

『イ、エ之れは兄が悪いのではない。私の祈りが足りない爲めの試練である。天の神はもつと〱働けよ苦しめよと御言ふには違ひない』と自覺した。

どうぞ神様！此のツネに鞭打つて下さい。

心に緩みが出た時などから神様に御祈りするのであつた。やがて祈りは報ひられて再び歡びの日が來たのである。

大正十五年四月、かの女は可成りな貯へを持つて宅行した。いふ迄もなく家産復興の爲めである。漸くに我名義となした家に両親を迎へて安堵の胸を撫で下ろした彼女は、今は何の不安もない、それは両親を喜悅の世界に導き得た喜びの充滿と日曜毎の禮拜から來る心の安定とからである。

會社にあつては押しも押されもしないお姉さんとして、又組長として部下を愛撫指導に全力を盡し、家にあつては生花、茶、裁縫等女子萬般の修養に餘念のないかの女にも、かうした大きな惱があつたのである。此の惱の爲めに血の出るやうな奮闘を續けて清き貴き半生を打込んだものである。今やその惱も薄いではあるものゝ酒亂の兄の爲めに朝夕の祈りは怠つてゐないのである。

希くば天父よ、此佳人により多くの恵みを垂れさせ給わんことを祈る。



兵庫縣印南郡神吉村

石坂 ふじゑ

明治四十年五月八日生

道のために躍進

定めた目標

東播の平野にジリ／＼と灼熱の太陽が照り付ける大正十五年七月一日であつた。この日は四ヶ年の高等女学校の課程と更に一ヶ年の補習科を了つた、石坂ふじゑさんが一枚の辭令を抱いて温い父母の懐から初めて社會の荒浪に乗り出した日であつた。『まあ嬉しい、到頭妾の念願が届いて先生になれた、兼々校長先生からさかされた小學校先生の生活、何んと麗しい使命でありませんか、人間が少年期に受けたあらゆる印象、衝動が永遠に忘れ得ぬものであるならば蓋し私の指導、教育なるものが幼ない者達を通して永遠の生命となつて残るではありませんか、玉となつて出るか、黄金となつて現るゝか將又一塊の土くれとなつて終るか、是等幼き者の生涯を左右する最初のスタートである、吾等教育者の責任が如何に重いもので

あるかと思ふときほんとうに涙ぐましくなつて來るではありませんか』

愛らしき教子を視つめて顧みる自分の彼岸に、こんな大きな理想と進路の喜びを抱きながら彼女は某小學校の先生になつて行つたのである。

幻滅の悲哀

喜び勇んで彼女が志した小學校の先生の生活は果して彼女に眞の喜びを與へたであらうか、初めて知つた社會其處には誰れでもが感ずる幻滅の悲哀があつた、彼女は奉職僅に一年、理想が現實の前に餘りに脆いものであつた事を發見した、彼女は泣いた、泣いて悶えて自分の餘りに人間的であつた慾望を悔やんだのであつた。

此の發見から涙を通して彼女が知つた事は道であつた、道を離れて人生なく、道を忘れて幸福がない、理想も抱負も希望も要するに道を邁進する事によつて完全に握み得るものである、と云ふ結論に到達した爾來求道の念願は一度傷いた彼女の胸に深刻に植付られてしまつたのである。

愛汗の工場

其頃姫路の北邑、水明の市川を畔に控へて立てる姫路工場では終日響き渡る幾萬錘の音に國家興隆の使

命を乗せて使ふ人も使はるゝ人も皆愛と汗との貴さに自覺しつゝ、總親和、總努力の感謝と感激に浸りながら只管各自の天職に向つて働きを續けてゐたのである、而かも麗しい修養團歌の旋律を通して人情の温かさ一杯に溢れ、滾々と盡さぬ相愛の泉が萬物に豊かな潤ひを垂れ數知れぬ美談の花、美譽の果實は馥郁たる香りと共に理想の樂士を型つてゐた、幾千の人々は此處に純眞に育くまれて固き決心で明魂發揮の向上路に「貴く生さん」として居たのである。

求むる心

求めよさらば與へられ

叩けば開く向上の

求むるものは與へられる、心の扉を叩き開けば此處に向上の世界を見出す、求道の念願に止むに止まれなかつた石坂ふじゑさんが一度愛の工場の實在を知つたときどんなに喜んだであらうか、志願書を提出した彼女が採否如何の通知をどんなに待つてゐたであらうか、更に採用を許されたときの喜びは如何ばかりであつたらう。

躍動

小學校の先生から女工さんに：「マア、人々が驚異で迎へても彼女は心からなる満足で一杯であつた地位も名譽も道の前には何等の價値もないと思つたのである。

海老茶の袴を脱いで職服に着替へた彼女の姿には何んとも云へない崇光な光があつた。

白い帽子に白いエプロン、黒い職服をきた彼女はそれがピッタリと似合つて心身ともに如何にも輕快らしく見えた。

心は躍る、躍る心で立ち働く彼女、機械の中にまめまめしく働く姿、それは天女の亂舞の様であつた、ベルトのたる音、錘の響き齒車の軋りそれ等は彼女の耳には天界から傳はる交響樂にきこえたのであつた教養ある彼女が汗と愛との生活から日一日研ぎ上げられて行く心身の向上は誠に目覺ましいものであつた眞劍味は益々加はつて來た、間もなく工場でも寄宿舎でもなくてはならぬ人となつてしまつた。

感激に生くる

失敗は成功への道程である、失敗を通じて自己の進むべき道を發見したものは成功者として遂に赫々たる喜びに到達する、今や彼女が心から貴い汗と深甚な愛の渦中で「日々感謝と合掌との外何物をも持ちません」と云つてゐる位の貴き生活に謳歌することは出來たのである、其眞劍味と熱心さには誰しも感歎せずには居られないのである、工場の上役は「ふじゑさんが入社せられて以來周囲の従業員の氣風が全く拜

七八
みたく様な敬虔なものになつた」と云つて居る、宜なる哉、其人格の反映する所善化され、美化され、教化されつゝあるではないか、而して彼女は其可細い双腕からほとばしり出づる力を稱して「労働の藝術化」と叫びつゝ涯なき向上に躍進を續けてゐるのである。



兵庫縣神崎郡鶴居村小室

原田 一 一

明治廿二年九月八日生

尊いかな人命救助

前日より降りしきる猛雨はいつやむとも果てしが無い迄に陰鬱さを増して行く。……
大正十五年六月二十六日！ 今日乙番の夜業終の日である。皆は明日の晴れを願ひつゝ夫れくの作業に働んで居つた午後九時頃明滅二三回にして電燈が消えた。動力が止つた。
同時に雷鳴に等しき大音響を聞いた人々は、その儘外に飛出した……
變電所が火事だ！

闇の中からけたましい聲が流れて来る——最も近く精練工場で作業中であつた彼れは直ちに全員に應

急處置を命じ富永宗次郎君と共に現場に馳けつげんとした。然るに四邊は墨汁を流せし如き眞の闇。

富永君に非常用提灯を持參せしめ共に變電所に着いた頃には多くの人達が口々に

「人が焼け死ぬ！危険だ！」

と叫びつゝも誰一人これを救はんとするものもなく只啞然として騒ぐばかりであつた。此の光景を見た

原田君は人々の不甲斐なきを叱咤しつゝ躍り込んだ——富永君も續いた。

入りて見れば、こは如何に被害者はや體一面火に包まれ棒立となつて聲も發し得ぬ状態であつた。

躊躇すべきでない、死は目前に迫つてゐるのであると感知した彼れは「確りせよ——大丈夫だよ」と勵

ました、被害者の燃え盛るシャツを引裂き火を消し止めて安全地帯に擔ぎ出したのであつた。此時富永君

が手助したことは勿論である。

これはほんとに瞬間の動作であつた。その動作の敏捷さはこれ丈けをなし得た後に非常汽笛が鳴りはじ

めたので證し得らるゝのである。

人に従ひ身を挺して人命を救助することはまゝあれども、然かも人を従はしむる即ち第一鞭をつけ得る

人は幾人あるぞ！細心なる不斷の注意はやがて非常時に他を驚かすべき大なる事業をなす——尊いかな彼

れの美舉。彼れの果斷！

工場は彼れの爲めに表彰式を催しその善行を永久に表彰したのであつた。

表彰状

八〇

精練科 原 田 一 一

右者資性温良入社以來業務熱心克く職責を全ふし、常に後輩指導懇切を極め衆人の模範として渴仰せられつゝあり

時偶々六月二十六日の夜雨滋き折柄變電所に於て、故障突發せる中消燈後の蒸汽發散其の他による危険を蒙り早速自己の受持區域を限なく巡視し、其異状なきを確めたる後消灯したるを以て、提灯を翳し原因を確かめんと變電所に至れり

時既に數人駆付けたる所なりしが、誰獨りとして内部に入る者なかりしかど、罹災者あるを聞き衆に率先して闇黒なる内部に充分なる注意を拂ひつゝ進入せし時、全身火傷を帯びて危機に頻せる内藤組長を發見せしかば直ちに同人の火を揉み消し戸外に救ひ出せり、右の行爲は誠に勇敢にして救急の措置宜敷を得たるものにして、正に人命救助を全ふせしものと言ふべく眞に衆人の儀表とするに足る仍而當工場善行者表彰規定により善行青章並に賞金を授與し之れを表彰す

大正十五年七月一日

東洋紡績株式會社姫路工場長 作 川 鐸 太 郎



兵庫縣神崎郡鶴居村美佐九一九
芳太郎 長女 福 田 ヨ シ
明治四十一年九月十日生



次女 福 田 ツ ル エ
明治四十四年一月三日生

光りはめぐる

親に孝養をつくし一家のために働くといふことは、子としてなすべき當然な道ではあるが、かよわい女性せいの身みを持ちながら、不遇な境涯けいがいに直面して悲かなしまず挫くじげず、弱々しい細腕ほそうでをもつて父母ふぼを助け、我身わがみを犠牲ぎせいにしてよく窮迫きうぱくを切り抜け、一家を明るき幸福きふくへ導みちびいたと云ふ、世にも感心かんしんな姉妹せいまいがある。

○
兵庫縣神崎郡鶴居村美佐九一九芳太郎長女福田ヨシ次女福田ツルエの姉妹の一家は、父母と弟三人妹一人の八人暮しである。

父は朝早くから日稼に出で母は夜晩くまで内職しながら六人の幼児を養育してゆく憐れな有様は側で見
るのも涙であつた。

かうした苦しい家庭に育つた二人の姉妹は、良く父母に仕へて朝は早くから起き、姉のヨシ女は母に代
つて小さな弟妹の學校行き其の他の世話をなし、妹のツルエ女は末の弟を脊負つて子守をなし、學校から
歸へれば母の内職の仕立物を配達して歩き、夜は一生懸命勉學をなし友達皆面白さうに遊んで居る時で
も自分は寸暇を惜んで働いた。

かやうに一身を捧げての働きによつて辛くも一家八名の者は細々ながらその日を過ごすことが出来たの
であつた。

姉のヨシ女は大正十年三月村の小學校を優等の成績で卒業した。

苦しい中から卒業はしたが、弟や妹がまた次から次と入學し、一家の經濟は却つて嵩む一方であり、
姉として自分が働くより外に誰れ一人家計を補ふ者もない我家の悲しい現狀を眼の邊りに見る時、ヨシ女
は女ながらに己の責任を痛感せずには居られなかつた。

「女にも働く道はある」ヨシ女は敢然として奮起つた。

豫て聞いてゐた東洋紡績會社の姫路工場に働かんと決心し、學窓を出で、未だ一ヶ月も経ない四月四日
人々は花に浮かれてゐる姫路の町を工場へと急いだ。

別れを惜しみ、一夜を泣き明した妹ツルエ女も、今は甲斐々々しく姉に代つて父母を慰めるのであつた
姉からは毎月かゝらず相當の金が送り届けられ、一家も多少潤ふて來た。

父母の顔には喜びが溢れ陰鬱だつた我家にも恵みの光はさし込んだ。

父母の喜ぶ様を見るにつけ、妹ツルエ女も幼な心に、健氣に働く姉が羨やましくなつて來た。

孝に眼醒めた妹は自分も學校を出たら姉と一緒に働いて、父母に孝養を盡さんと固い決心をきめた。

かくて三年の月日は流れ、妹ツルエ女も姉の後を追つて同じ工場に働くこととなつた。

今や希望に燃ゆる姉妹二人は職服も凜々しく、日夜勤めの椅子に着くのである。

互に勵み勵まされて仲の良い姉妹は、又よく上役に仕へ同僚とも協和し、仕事に熱心に其の精勤振りは
實に衆に範たるものがある。

又姉ヨシ女は現在寮舎の室長として少しも高ぶることなく、よく室生を導き懇切丁寧であり、室生も亦
彼女を姉の如くに慕つてゐる。

二人が入社して以來今日に至るまで、姉は七ヶ年妹は四ヶ年と云ふ長い間、毎日給料は僅か三圓足ら
ずの小遣を残すのみで、あとは悉く國元に送金し、其の總額も今や貳千圓以上にも及び、而も尙ほ手元
には八百圓近い貯金をしてゐる。

此の感心な行に對して既に會社から、妹ツルエは昭和二年二月と、姉ヨシ女は大正十二年二月と同じ昭

和二年二月の兩回に亘り、精勤並に貯送金優良者として表彰された。
 斯うした絶えざる姉妹の尊き努力は空しからず、報らる可き幸ある日は来た。
 一時は逆境にあつた家運も、今は順風に帆を擧げたかの様に、今春我家も立派に新築されて、明るき幸福は一家を訪れてゐる。

○

至誠に燃ゆる乙女よ、力に勇む若人よ
 愛の絆に結び合ひ、皇國のために起たんかな。
 努力は開く運命を、正しき主張の汗によれ
 その汗に吾奮ふ時、人生何をか憂へんや。



兵庫縣佐用郡大廣村末廣三二〇八

岡田かめの

大正三年十月三十日生

至誠の人

孝女かめのさんの物心つく頃

風の強く吹くある晩の事だつた。

『そら火事だ、火事だ』

『それ藏が焼ける』

『あれは岡田さんの家だ、かめのさんの家だ』

『可愛想に』

と云つてる間に吹き来る風は火を煽つて、到々主家から藏から家財道具迄全部を焼き盡してしまつた。
 家の人丈が無事に助かつたのはせめてもの幸ひだつた。

これが今から十二年前、かめのさんが物心つくかつかぬかの頃でした。
 それ迄は村でも指折りの大きな農家で、かめのさんの兩親を始め祖父母など迄皆働いて田畑からの收穫も多額にあり安樂な毎日を送つてゐる。

不幸は續く

それが一時に家も藏も焼いてしまつては途方に暮れざるを得なかつた。これを苦に病んだお祖父さんは其後間もなく亡くなられた。

委の跡始末や毎日の生活苦に悩み抜いたお父さんは、氣の毒にも精神を喪失して夢の世界を辿る身となり、働けないのみかそれからは看護の手をさへ要することゝなつてしまつた。不幸は何處まで續くのだから

う。よしこれが岡田一家に對する神の試練であつたにしても餘りに大きい慘めさであつた。

お父さんの患ひも到頭三年續いた、夢の世界をさすらひながらも家のことのみ口にして遂に不歸の客となつたのはかめのさんが學校に行くのも間もない頃の事だつた。家の始末もつかぬのにお父さんに先立たれ女手ばかりになつてしまつた。

其時家には八十二になつた曾祖母さんと五十七の祖母さん。四つの弟二つの妹と僅かに働けるのはかめのさんのお母さん獨りで、お祖母さんが子守り片手に手傳つて下さる位のもの。それも寄る年波に充分の期待もされなかつた。

曾祖母さんの口から

『泣くにも泣けぬ不仕合せ』などと愚痴に似た歎息が漏らされてゐた。

秋の收穫も年一年と減少して行つた。反對に家の費用は益々嵩んで行く、然かもそれがお父さんの永の患ひでありつただけの費用を使つた後なので尙更耐えられない。お金を借りては今日の資に充て、田や畑はその「かた」ととられて行く。

燃え残りの少ない蠟燭の火のやうに段々と暗くなつて行く、家の中の淋びしさ。幼ないかめのさんの胸中にも轟々と淋びしさが迫つて来る。

生きる悲哀

『座して喰へば山もむなし』といふ諺の様に、愈々其日の生活に追はれるのみで何とも施すに術なく、近親の人々も随分と其世話に惱まされた。親類の人々も奨めて『一人でも人数を減らして』といふことになりお母さんは乳呑兒抱へてお里へと歸へられることになつた。貧しい中にも誰よりも可愛がつて下すつたお母さん！、冬の寒いときには自分の着物迄脱いで暖めて下すつたお母さん！、日に三度の食事も乏しい中から氣を配つて育て、下すつたお母さん！、今其お母さんとお別れして……

どうなるんだらうかと小さい胸を痛めて熱い涙は止めどなく流れて来る。

見返り、見返り立出で行くお母さんの姿も涙にくもつて見えわかず。

『皆んな身體を大事にして』と云はれるお母さんの聲もくもり勝ちだつた。

妹を抱いたお母さんの姿が村の端を曲つて見えなくなつたときかめのさんは到頭泣き伏してしまつた。曾祖母さんやお祖母さんも悲しい吾家の落魄を偲びつゝ、いぢらしいかめのさんの姿に泣かされるのでした。神様は何處迄岡田一家の者の試練をなさるのでせう。

鬼神を泣かすかめのさんの孝養

それからといふものは家中火の消えた様な淋びしい毎を送るのでした。そしてかめのさんが十一歳になつた春、村の親切者で通つた上谷さんのお家に兒守に行くことになつて、兒守しながら小學校に通ふこ

とになった。そしていたゞく僅かのお金は、其儘家に持つて歸つて年老いたお祖母さん達や弟妹達のお米の代にするのでした、他家の娘さん達が綺麗に着飾つて遊ぶときでも、かめさんは兒守の勉めを忘れなかつた家のことを忘れなかつた、たまの休み日に暇を得たときは、かめさんが奥の山から薪を背負つてかへる日でした。背負ひ来る薪は身の不自由なお祖母さん達への、せめてもの心盡しであり又それで暇があれば老人二人の按摩もとつた。

一方むづかる子をあやしつゝ、勉強するかめさんの学校の成績は、いつも一番二番を下らない出来栄で、学校の先生方や村人達の賞められものだつた。又上谷さんのお家の方々からも「かめさん」「かめさん」と皆のお氣にいりでもいつも可愛がられてゐた。

無一物の今日

窮迫した生活難に悩まされつゞける一家の者は今日では二度の食事も満足にとりかねる状態で、借金するより外に道がない、現在住つてゐる小さい家まで借金の「かた」になつてしまつて着る着物もない、十四歳になつて漸く尋常科を卒業したかめさんは高等科に行くどころか、早速家の人達の生きて行く方法を考へなければならなかつた。

家には九十歳になられた曾祖母さんと六十五歳のお祖母さんと十一歳の弟と九歳になつた妹とが居るこ

れ等四人の生活を尋常科を出たばかりのかめさんが、支えて行く事は到底望み得ない程の難事であつたそれが

「是からうんと働いて皆を安心させます」と學校を出るなり東洋紡績姫路工場に来て健氣にも家運挽回を期すべく勤めることゝなつたのである。

家の再興を目ざして働くことの愉快

工場に勤めてから其勤め振りの真剣なことに到底多くの人の及ぶ處でない。又恵まれない家に育つた者にも似ず性質温和、然かも従順で諸先生方を始め工場の上役や同輩達にも可愛がられてゐる。お部屋の皆さんとの交りも極めて圓滿に皆からも好かれてゐる。

毎月貰ふ給銀は全部これを家に送つて曾祖母さんや、お祖母さんを始め皆の者を喜ばし僅かばかりの自分の手に残るお小遣も一圓と使つたことがない。

四人の生命を年齢もゆかぬ細腕に引受けて健氣にも重荷を負ふて奮闘するかめさん、これを誰の罪と云ひ得よう。

朝な夕なに年老いたお祖母さん達が腫目合掌して、かめさんの健康と幸福とを祈られつゝあることを忘れてはならない、その爲めか、かめさんは殆んど一日の欠勤もなく健かにのびて行きつゝある。

かめのさんのお家にまた昔の様な暖かい春の風が一日も早く吹く様に、汗愛の孝子に幸多かれと祈るのである。

九〇



若き日は躍る

(一)

若さの誇り

友よ

若さの誇りのために
祝福の歌を歌はう。

原籍 兵庫縣安栗郡下三方村福知
製綿科組長 梶 師 唯 市

明治卅三年三月廿三日生

友よ
未成熟の誇りのために
希望の歌を歌はう。

躍らぬ胸は老ひたる胸
湧かぬ血は衰えたる血
戦慄かぬ靈は眠れる靈

友よ
若さと未成熟のために
歡呼の叫びを擧げよう。

(後藤靜香先生作より)

若さは、それ自身が限りない喜びです。
若さは、それ自身が限りない感謝です。

天の祝福と地の讚美は、青年の上に輝き、未来の光明は若者の上にあります。進歩と努力はこの時代の創造であり、『希望の歌』は青年の行進曲です。人生の開拓は青年時代にのみ行はれるのであります。

あゝ青春！ その文字には何と生々とした潑瀾たる空氣が感ぜられる事です！

梶師唯市君は青春十九歳（大正九年三月）にして我が工場に入社致しました。彼の家庭は、決して豊かなものではありませんでした。

そのみでなく、家には在來の借財がある上に、彼の叔父さんが事業に失敗して、莫大な負債と三人の子供を残して去つてからは、總ては彼の家の責任となりました。

澤山の家族と、乏しい家の現状、感じ易き青年の血は沸くのみでありました。

この時、愛する妹は既に家郷を去つて、我工場に在り孜孜として努力の日を送りつゝ、ありました。妹からの便りを讀む度に、如何に我が東紡姫路工場が『働きよき』處であるかを知ると共に家の現在

を救ふ爲にはどうしても其處で働かなければならぬと決心したのであります。

遂に彼の希望は實現されました。

憧れの東紡姫路工場の一員として、聞きしに勝る壯大なる設備と整然たる工場の状態を目のあたりに觀

て、如何に若き血は躍つた事でありませう。

：故郷にある老ひませる祖父母よ。日夜家事に餘念なき父母よ。愛する弟妹従妹弟達よ。

今こそ我が力強き第一歩を踏出すときはです。

あゝ、この廻轉する機械の微妙な響きに、私の若い胸はいみじくも奮ひ何にか知らず胸一杯に幸福が溢れて來るので御座います。

この環境の中で『働ける』私の喜悦をお察し下さい。……

彼はこう叫ばずには居られない氣がしてきたのであります。

彼の奮闘の記録の第一頁は、斯くして記され始めたのです。

(二)

この絹糸工業に取つて、最も必要な周到の注意を要する製綿料にあつて、彼の活動は開始されました。

彼は唯全精神全能力を集めて、如何に完全にその職を果たすかに日夜腐心して居りました。

彼の仕事に對する努力熱誠が如何に卓越して居つたかは、入社以來の同僚である一人は私に語つて呉れました。

『彼が仕事にどれだけ熱心であつたか、一つの事に熱中すると何も彼も忘れてその事に専心する、その

緊張振は寧ろ嚴肅な程でした。』

と口を極めて激賞して居るのを見てもよく判ります。

かのゲーテは言つて居ります。

『藝術に従事する者はいつも全力を注ぎて最善のものを創出せんと努めざるべからず。名匠はたゞ努力を知るのみ、世間の喝采の如きは、強いて求めんとせず、又強いて避けんとせず。自己を知る者は必ず自己ならざるべからず。』

優れたる藝術品になればなる程、その裏には誠に血のにじむが如き慘憺たる苦心努力を見るのであります。

我々の藝術品は、我が工場の製品であります。三千五百の人々の苦心の結晶になる創造であります。

藝術家の創作にその作家の魂を見る様に、我々の製品には、我々の人格が反映します。

——自分は満腔の熱誠を投じてその最善を盡せばいい。それが自分に課せられたる使命である。——

彼はこう思つていました。

彼のこの心根と勤勉が、部下の行動について常に周到の注意を怠らない上長の目に映らぬ譯はなかつたのであります。

彼が次第に昇進していつたのも當然の結果でありました。

(三)

一方寄宿舎に於いて彼の行状は、誠にこの好個の青年にふさはしきものであります。

遂に認められて室長となるや、全寄宿生をして、その名を呼んでさへ頼母しい氣持を抱かしました。

新入の人達に對しては特に懇切を極め、さながら家庭にあると同様の思ひをさせ恰かも親愛なる兄弟の如くでありました。

彼を室長に持つている事は、その室の人々の誇りでありました。

何故なら、その室の人々位融合して、整理整頓であれ、勉學であれ、運動であれ、全寮の人々をリードしてゆくものはなかつたのですから。

一日の仕事が終ると、彼の姿は我が工場のテニスコートの上に現はれます。輕快にコートの上を馳驅して、程好く疲勞を感じてくると、彼は汗を拭ひ、就寢時間まで靜かに讀書に耽るのでした。

時には愛する弟妹達へなつかしい手紙を認めるのでした。一字一句を認める内に、いつしか思ひは故郷の空に馳せて、あれからこれへと、様々にこの青年の胸には感ぜられてくるのでした。

あゝ、衰へたる我家の現状、いたましい肉親の人々——一人々々の風貌を思ひ盡くとき……
あゝ、彼等の今宵の夢は如何に？

熱い思ひは露となつて、頬を傳ふのでありました。「しかし俺はやるぞ！」
自分を頼る肉親の期待に添ふ爲にも、この誠實の青年の血は湧きあがり、更に奮闘を誓ふのでありまし
た。

家の債務と、叔父さんの残した借財は、約千圓程でしたが彼より先に我が工場にある妹のフミエさんと一
所に、兄は妹を働まし、妹は兄を力づけて、美はしい兄妹の協力を以つて次第に返済されていつたのでした。
彼等の収入の殆ど總てはその爲に投ぜられたのでしたが、彼等は介意しませんでした。

(四)

運命を支配するものは勇者です。

若き勇氣に溢れた血は、遂に勝利をもたらしました。こうして借財は完全に返済されたのであります。

しかもその上に田畑は購入されたのであります。

彼の一家の人々の喜悅こそ幾許であつたでせう。

衰えたる家名も恢復されました。

新たに我家のものとなりし田畑を打眺むるとき、肉親の人々の眼には感謝の色濃く、熱い涙がたゝえら
れていた事でありませう。

『天は自ら助くるものを扶く。』

この格言は、永遠に眞理です。

涙無くして語るを得ない、この並々ならぬ偉大なる梶師唯市君の行爲を想起する度に、この語を繰返し
讃歎するものであります。

しかし、彼の努力はこれのみに止りませんでした。

彼と協力して、借財の返還に、田畑の購入に努力した妹のフミエさんは、性來好める裁縫を以て身を立

てようとして、我が工場を退社し、神戸の技藝學校に學ぶ事になつたのであります。

妹の健氣な決心を聞きや、兄は泣いてその爲の努力を誓つたのでございます。

『俺が働いて必ず金は送つてやるから、お前は安心して一生懸命に勉強するんだよ。』

美はしい兄妹の情に、妹のフミエさんも如何に感激した事でありませう。

一ヶ月三十圓以上の金はその爲に送られました。

そしてそれは一ヶ年間繼續されたのであります。

(五)

大正十二年二月十一日、紀元の佳節を卜して催された我が工場の善行者表彰式に於て、彼は三千五百の

従業員の中より選ばれて、表彰せられるの榮譽を擔ふたのであります。

絶ゆる事なき彼の努力は、引續き翌年再び賞せられるに至つたのであります。

「曩ニ善行ヲ表彰セラレシヨリ、其身ヲ持スルコト益々謹嚴一層業務ニ勵精シ、技術愈優秀ノ域ニ進ミ部下ヲ愛撫スル、事至ラサルナク成績ノ進歩顯著ナルモノアリ、又餘暇ニハ補習學校ニ通ヒテ孜々トシテ勉學倦ム事ヲ知ラス、寮友ニ學ヲ勸メテ舍風ノ振作人心ノ作興ニ努ムル等ソノ篤行實ニ龜鑑トスルニ足ル……」

寧ろこの表彰狀が直截に彼の全般を物語つているのであります。

我が工場に表彰せられた者も數多くありますが——、引續き二回も表彰(赤章授與)せられた者は僅少なのであります。

彼の名譽はこれに止らず、大正十五年には、姫路市揚善會から、表彰せられる事になつたのであります。これらの榮譽を受けて、彼は益々奮勵を續けています。其後修養團精神の實行上斷然禁煙を執行して、今や製綿科に於ける第一人者として努力しつゝあります。

あゝ青春、青春の尊さは未成熟なるが故であります。成熟に至る道程であるからです。希望は、はるかなる彼方に輝き渡つています。

友よ。

曙の光りを負ひて、歡呼の叫びを擧げつゝ、確固たる足どりを以つて、進んで行かうではありませんか！。



兵庫縣飾磨郡水上村白國六四

白井まつゑ

明治三十五年一月十五日生

更生の悦び

一夜講習を受けて

昭和三年一月七日夜から八日にかけての、姫路工場に於ける修養團一夜講習は、講師の先生方も受講者も近來になき緊張裡に終始し、諸方面に異様な衝動を興へて終つたが、此の中にあつて感激の極、奮ひ立つた一女性を見逃がしてはならないと思ふ。白井まつゑ女がそれである。

彼の女は良人爲次君(電氣部組長)に勧めらるゝまゝに、第三會場の幼稚園に於て受講した一員であるがその夜、眞に感激して心竊かに期するものがあるやうであつた。

その翌日お午頃までかの女の姿が見えなかつた。その翌日もである。

次の夜！ 良人の前に手をついたかの女は

『此の家を新築したり地所を手に入れるに就ては随分御心配がありましたでせう、又今後もし色々御苦勞があること、思ひます。私は過ぐる夜の講習會にはあなたが勧められるので、いやいやながら行つたものですが行つて見ると實に私は馬鹿者であつたと云ふことに氣がつかまりました、ナゼ自分から進んで受講しなかつたでせうか、これを思ふ時私の胸は張り裂けるやうで御座います。懇々とお説き下さいました諸先生のお話を、お伺ひしてはじつとしてゐるのが、何だか空恐ろしくなつて参りましたので色々考へた末、會社の方へ御世話になることに決心し、貴方には無斷でしたけれども朝の間二日程参つて入社御許しを頂きました。どうぞ明日からでもやつて下さい。貴方に無斷で頼んだ事は呉れ／＼もお許しを願ひます。』修養團の講習によつてかの女は更生したのである。夫婦は手を取つて泣いた。

家を建てるまで

笠形山は根笹の上に草紅葉してその秀麗を秋天に見る爽かさ。かの女は大正十二年の秋、越知谷村宇作畑の足立氏から嫁いだのである。

ほんとにこれは聞きしに勝る茅屋である。

總努力によつて改築し兩親を安んじようとの議が持ち上つたのは、新婚の夢まだ覺めやらぬある日のことであつた。

それからのかの女は舅姑に仕へるかたはら野良にも行つた。山にも行つた。

が、此の家を見ては『こんな筈ではなかつた』にとの念が常に頭にあつて、兎角仕事にもぶり勝であつた子が生れるやうになつてからは、この不満が知らず／＼態度に表はれてくるやうになつた。

何時迄も同じ心を持つて新らしき幻想を追ひつゝ、一心に忍苦の生活を續けてゐる爲次君の目にもこれがどうして見えずに居やう。彼れはかの女の爲めに私かに祈り續けた。……

昭和二年の夏、家が出来上つた。一同歡びの内に引越して大きく足を延ばして寝た。されどこれにはかなりの遣り繰りのあることを考へて更に／＼働かねばならない。

汗愛行者としての爲次君はかういつてゐる。

『私の父は二歳にして祖父に死別し、非常に苦勞をしたといふ事を兼ね／＼言ひきかされてゐましたのでせめて晩年なりとも父を喜ばせたく、又之れまで住んでゐました家が餘程古くなり改築の必要を認めましたので、妻と相談の上大正十二年冬よりその準備金として、毎月會社に三十圓宛貯金し頼母子も三口掛けて参りました。昨年(昭和二年)父の還暦でもあり、又姫路總社の六十一年目の丁卯祭でもありますので、この意義ある年を記念する心持で、老い先き短かき兩親の壯健の内に家を建て、喜ばせたく、

お正月から話をして三月に工事にかゝりました。幸に滞りなく進んで六月末日出来上り移轉を致しました。間もなく田地を買つて呉れと勧める人がありましたので、一部宅地を含んで居りますこと故、一家相談の上何分出費多い折りの事なればその出金方法として金百圓掛けの頼母子拾口拂込濟を、金七百圓で落札し田地代に支拂ひました。それが掛け金としては、毎月貯金してゐます分から四ヶ月目に金百圓宛充てゝ行くこととして居ります。幸ひにして六年後になれば、頼母子も濟み貯金も従前通りに致して行く心算で働いて居ります。』

明るき家庭へ

播州の梅の村——白國の公會堂を南下した野の中に新開道路がある。それに北面して農家風のかつちりした新らしい一軒の二階家がある。その薨の下では老若二夫婦が感激に浸りつゝ、總親和總努力の光に燃えて、完全に我ものとなる歡びの日の實現の爲めに愛汗の精進を續けてゐるのである。あゝ偉なるかな奮起の力！それは如何なる障礙をも完全に貫き得るの念力である。



兵庫縣宍粟郡下三方村字福知一〇〇六
森太郎二女 中 本 シ ゲ エ
明治四十二年五月一日生



同
春藏長女 中 本 サ ダ 枝
明治四十三年三月卅一日生

愛郷に燃ゆる心

愛郷美談

二人の可弱い乙女が身は恵まれぬ家庭に育ち逆遇に果敢なみながらも、一度靈光を仰いで生命の躍動を覺ゆるや、共に奮ひ起ち共に力を協せ濁れる社會に美しい覺醒の波紋を投じ郷村に善風作興の炬火を點じたと云ふ一美談がある。

學びの友

一人は中本シゲエと云ひ今一人は中本サダ枝と云つて、同じ兵庫縣栗郡下三方村の福知の出身である。シゲエさんには姉一人と妹三人弟四人の弟妹があつて、父母を始め十一人の家族は養蠶を片手に僅かな田畑を耕しながらその日を過して居られた。

又サダ枝さんは六歳の時母を亡ひ、姉妹と一緒に祖母の手に育てられながら、どんなに辛いことがあつても堪へ難い恥しめを受けても、母なき家と思つてはいつも、じつと我慢してゐた。

奇しき因縁にて……此の二人の少女は幼い頃より骨肉もただならぬ親しき交りを結び、傍で見ると美やましいほどの仲好であつた。

学校も同じ三方村の小學校へ通つてゐた。

生れつき勉強好きの二人は成績も秀でて良く、クラスの首席はいつも二人で占めるのであつた。かくて六年の歳月は夢の如くに過ぎて、いよいよ卒業の日は来た。

卒業證書を手に校門を出た友人達は『やれ師範だ、やれ女學校だ』と思ひ思ひに上級の學校を受験して入學するのであつた。

向學心に燃ゆる乙女の胸は血に躍つた。

然し、それも恵まれぬ家庭に育つ二人の少女には叶はぬ空しい希願に過ぎなかつた。

昨日まで同じ學窓に机を並べ學びの道に勵んで来た友も、今日は笈を負ふ喜びに若き胸を躍らせながら

憧れの都に旅立つのである。

此の華やかな友の姿を眺めた、二人の少女は今更らながら我身の不遇が、怨めしく餘りの悲しさに相抱いて口惜し泣きに咽び泣くのであつた。

悲しき別れ

それから間もないこと、中本シゲエさんは家庭の事情から姫路の東紡の工場に働くことになつた。

シゲエさんは暫しの別れをつげんと一日その友を訪ねたのである。

これを知つたサダ枝さんの歎き……

『たつた一人の友も今は奪はれて行くのか、

噫。私は今から誰れを友とし、誰れを姉としよう。』

憐れにもサダ枝さんは泣き崩れた。

『サダ枝さん、堪忍して下さいね、私とて何んで貴女と別れたいことがあります、これには深い事情があつてのこと、直に歸へつて来ます、それまではどうかお身體をお大事にね……』

村端れの鎮守の森まで送られて来たシゲエさんは、涙の袖を拂ひながら慰める様に云ふのであつた。

『あら！ 私こそ涙なんか出して、御免下さいね。何もこれ限り會へないことじやなし、近い所ですも

の、時々は歸へつて下さいね、折々に是非お便りもね……」

『え、差し上げますとも、貴女もね。』

それでは……サダ枝さん……」

『いよいよお別れですか、暫くはお目にも懸られませぬのね、どうかお身体をお大切にね……』

固く握りかわされた二人の手には熱い涙が落ちる。

それは大正十一年の春三月も終りに近い廿八日のことであつた。

憤 起

工場に働くシゲエさんは、寝ても覺めても故郷のことが忘れられなかつた。戀しい我家のことや懐しいサダ枝さんのことが次から次と、思ひ出されて来て小さな心は千々に碎けた。

然し日を経るにつれ工場のこともわかり、仕事にも慣れて来て案外働き易い所だと思ふやうになつた。

それにも増してシゲエさんを喜ばしたのは、此の工場に女學校が在ることだつた。而もその女學校は他所の工場内に設けられた學校とは、全然趣きを異にし縣の認可を受けて設立された、名も東洋女學校と呼ぶ立派な私立女學校である。

幸にも學年替りの四月のこととて、シゲエさんは早速願書を出して、先づ入學試験を受けることに決

心した。

小學校を優等で通した彼女のこととて此の試験は美事に合格した。

さあ、それからのシゲエさんは物凄くほど一心不乱に勉強した。

『新参者の癖に生意氣な……』と彼女の健氣な武者振りを皮肉な眼で見る友もあつた。『いつまで續くものか』と冷やかな嘲りを浴せる者もあつた。然しシゲエさんには尊い一つの魂があつた。それは『きつと立派にやつて見せる』と云ふ負けじ魂であつた。

一念憤起の心に燃へたシゲエさんは、一切の誘惑と女の嘲りを一蹴して只だ黙々として不斷の努力を續けた。

教室で講義を聞く時の彼女の眞剣さこそ實に涙ぐましいまでの美しさであつた。

萬人夢に入る深夜一人月明によつて書を読むこともあつた。一分の休、一秒の暇も彼女に取つては千金に勝る尊いものであつた。

夏休みも終つて九月の第二學期始めには、各年級の編入試験が行はれた。負けぬ氣のシゲエさんは今度はまた二年生の編入を受験するのであつた。

入學して未だ半歳足らずの彼女には、全く無謀に近かつたが而もシゲエさんの努力は強かつた。彼女は見事にパスしたのだ。

彼女は友の嘲りと罵りとに報ゆるに、驚異と、美望と、尊敬の心を起さしむることを以てした。かくして大正十三年の春、彼女は榮ある桂冠を戴いて校門を出たのである。

友を慕ひて

姉と慕ひし友に去られたサダ枝さんは淋しい故郷が堪へられなかつた。

母なき家に埋もれてゆく我身の不遇を歎いては、朝な夕な悲しさに悶へ泣いた。而も絶えず胸に浮ぶのは熱い涙で別れた懐かしの友である。

かうした彼女にとつてシゲエさんからの便りはどんなに嬉しかつたであらう。

手紙には工場のことや町の様子が詳しく面白く書かれてあり、狭い故郷の外に世間を知らないサダ枝さんには聞くこと凡てが珍しかつた。

二千人にも近い多勢の少女達が、一つ所に働いてゐるのも驚異であるが、苦しい苦の工場で皆んなが楽しく働いてゐるとは不思議でならなかつた。わけて工場内に女學校が在るなどとは全く想像も出来ないことであつた。

然し次の便には入學の喜びが感激に満ちた言葉で綴られてあり、凡てが明白となつた、サダ枝さんは希望に輝く友の前途が美やましくてたまらなくなつてきた。

女學校卒業といふ便りを見て、榮光に輝く友の姿を想ひ浮べた時、サダエさんは今は一刻も居たたまらなかつた。

『働きながらも勉強が出来るのだ、私も行かう』

切ない胸の内を打ち開けて、やつと父の許しが出たサダ枝さんは、なつかしい友の後を慕つて同じ姫路の工場に向つたのは大正十三年四月十日のことであつた。

清き感激

サダ枝さんの一念は届いた、熱心ほど恐ろしいものはない。

小學校を出て以來全く家事に没頭して來た彼女も女學校の試験は見事に合格した。

丁度この頃から修養團の汗愛の靈火が、工場にも燃え上りかけた一日、明魂發揮の講習會が寄宿の大廣間で催された。

二人の少女も参加した。

講師の先生方は熱烈火の如き至誠の叫びを擧げられ、靈氣は堂に漲つて今は何物をも焼き盡さん勢ひ。

『暗い魂を通して眺むる世界は暗黒なり。』

花は無心に開けども、月は無明を照せども、涙に見れば花も泣き、笑うて仰げば月も微笑む。

迷へる者よ、世を怨むことなく人を責むること勿れ、人を裁く眼を轉じて己の魂を凝視せよ。一切の怨呪は自己の暗き魂の中に芽生へる、朝に祈りて罪を悔ひ夕に禱りて穢を浄めよ。斯くて明魂を現し、愛と汗との行者となる時明るき世界は開かれん』

至誠斷腸の聖涙の血叫び。

始めて修養團の精神を知つた二人は兩眼に熱い涙がみなぎつた、深い反省に今は言ふべき言葉もない。

『願は一つ。それは明るい世界の建設である。』

總親和、總努力の善風作興である。

誓願を確立して奮ひ立て。

点滴も石を穿ち焦點は焔を擧ぐ、女として同じ皇國の民なれば……

壇上壇下悉く泣き感激は實に深刻痛烈である。

先生も暫し無言……やがて涙に輝く兩眼を閉ぢ靜かに合掌さるゝのであつた。

その森嚴さ、壯重さに神秘の靈氣場に満ちた。

尊き哉 懺悔

壇上に眼目合掌さるゝ修養團の理事長勝部耕造先生が、同じ安栗郡の出身であると知つた時二人の乙女

今は餘りの感激に聲も立て得ずその場に泣き伏したのである。

醒めたる者には無限の力が湧く。

美しい處女の心に甦へつた二人の少女は、猛然として奮起し健氣にも明るき工場建設の戦士たらんと誓

ふのであつた。

努力は目覺しかつた。

かくて昭和二年春まだ淺き三月サダ枝さんも女學校を卒業した。

卒業式の晩であつた、二人はお互の卒業を感謝するために『一面の額』を村の小學校へ寄贈することに

決心したのである。

何んと美しくも亦目出度い企であらう。

極度の勤勞と節約とに堪へ、粒々辛苦の結晶!!

いとも美事な大額が三方村小學校の講堂に飾られたのは、それから間もない六月のことであつた。

もともと家を留守に出来ない事情にあつた、サダ枝さんは其の年の暮には再び村に歸へつた。

一度心に點ぜられた靈火は永劫に消ゆることはない。

己の使命に目醒めて明るき工場の建設に努力して來た彼女の心は、今は愛郷の熱火となつて燃へ上るの

であつた。

サダ枝さんは雄々しくも叫んだのである。

「村の人達よ、覚めよ。」

吾等の宍粟郡は縣下第一の修養團郡なるぞ。

見よ、勝部先生、勝原先生を始め山下末吉氏、小倉兼治氏等、幾多の戦士を出して今や天下の宍粟郡たらんとしてゐるではないか、然るに同じ吾村の現状は如何に、村の人達よ、立てよ、立ちて明るき里の建設に奮へ愛と汗とに輝く吾等の胸に平和あり……」
彼女のこの叫びこそ憎夫をも奮ひ起たすべく感激に満ちた聖き祈りではないか。

工場 の 鏡

シゲエさんは現在も引續き吾が工場に働いて、唯鷲地に愛と汗とに生きて居られる。

生れながらに天才肌の彼女は筆も良く立ち、自ら進んで修養團、希望社等の社外關係への通信や返信をも引き受け、又毎月一日には姫路市の城南小學校で開かれる相互修養會にも缺かさず出席してゐる。

又シゲエさんは今日まで六年の長い間、毎月國元へは多額の送金もなし家運も次第に順調となり本年の春には田地一反歩を購入された。

かうした彼女の善行は工場の範たるものとして、會社は昭和二年二月と三年の四月の二回に亘りシゲエ

んを表彰した。

シゲエさんの美舉は唯これのみに止まらない。

最近故郷の在郷軍人分會が今秋行はせらるべき、御大典の記念事業として忠魂碑建立の企てあるを聞くや早速同郷出身の人々に語り、自らは寮長手當を貯へた十圓の金と都合三十圓餘りの淨財を集めて送金した

かくて七月十日、忠魂碑建設後援會、女子青年團長、三木繁校長から一同へ涙ぐましい感謝状が届いた

波 紋 は 及 ぶ

一波動いて萬波生じ一人感憤して萬人に及ぶ。郷村を思ひ母校を愛し故舊を慕ふ乙女の至誠熾烈の情は忽ち濁れる故郷に、覺醒の波紋を描き沈滞せる青年の意氣を奮起せしめずにはおかなかつた。

涙の内に懺悔し涙と共に躍り立つた、青年處女が幾十名。婦人會も起ち、戸主會も感激して一村ごととく働いた。

今や覺醒の氣分は全村に漲つたのである。

噫、愛郷の心に燃ゆる乙女よ、自己を生かし、村をも明るく生かさうとする聖き祈りに吾等は感激の涙に咽ぶのみだ。



岡山縣川上郡湯野村

難波 徳 太郎

明治四十年一月二十五日生

男子の本領

彼の生家は田舎で何不足なく暮して居る農家の三男として生れた。そして大正八年三月尋常小學校を卒業するまで、實家に育てられて居たが、間もなく世話する人があつて、程近い難波忠藏氏の家へ養子に行くことになつた。此の養家に居る間の彼は、本當によく勉強もし、克己と忍耐の四字を心底に深く刻みつけられたのである。此の養家の難波忠藏氏といへば、郡内屈指の豪農家として稱へられて居る程で、節約と勤勉を家訓として、朝早くから夜遅くまで働くのが常であつた。十三歳の春此の家に養はるゝ身となつた彼は、學校に通ひつゝも感心な程働いたのである。彼は當時の苦しい生活を味はつたればこそ、今日の工場生活は餘りに勿體なくて感謝せずには居られないといつても言つて居る。尋常小學校を卒業して彼が養家に来てから間もなく同家では普請をすることとなり。毎日十五六名の雇人が石運び木材運び、土砂の運搬等營々として働くのであつた。新築せらるゝ家は流石大きなもので完成までには、五年餘の年月を要する

計畫であつた。彼は養父母の厳格な躰に從つて、朝早くから學校に行くまでと學校から歸つて夜遅くまで、雇人と共に一人前の男に負けぬ働きを續けた。夏の暑い日も、冬の寒い日も、陰日向なく働く彼の姿を見る人々は十三歳の子供の働きとしては、餘りに雄々しいとその働き振を激賞した程であつた。然し彼は此の激しい働きの内にも勉學の道は、決して忘ることなく熱心に通學したその爲高等小學校を卒業する時は成績優秀並に七ヶ年間の精勤證を授與せられたのである。卒業後は一生懸命仕事に精を出して働き夜間は同村の補習學校に通ひ、眞面目に勉強せし結果、四ヶ年間で終了すべき課程を僅か二ヶ年で終了證を授與せられたのである。かくして彼が此の四年間の熱心な勉學振りとは、一生懸命の働き振りは常に群を抜いてゐて郷村の人々から専ら將來あるものと囁目されてゐたのであつた。一日彼は靜かに自分の將來と、現在の世相を考へた此ま、養家に留まつて居れば、身代は遠からず自分のものとはなるが、勞せずして得る財よりも、緊禪一番獨立自營男子の自分を發揮して一花咲かさんと決心し、両親に懇願して養家の暇をとり大正十二年九月二十六日當姫路工場に入社したのである。彼は温和で寡言なため一見女性にも見まほしき優しい人柄ではあるがその思慮深く沈着にして而かも自らを信ずる點に至つては決して人後に落ちぬ。働きは正しい願ひを實現する唯一の道程であるとの信念を持ち、常に上長の命を遵奉し與へられた仕事に對しては感謝を以て蔭日和なく働くのである、寄宿舎に在つてはよく舍則を守り、自己を高めつゝ人々と共に楽しく暮すことの喜びを感じ努力せるため、寮を擧げて敬愛の的となつて居る、大正十四年頃より屢次修養團

の講習會が開かる、や卒先これに参加して以來、最も眞面目なる愛と汗の行者となり、朝夕室内の掃除は勿論、廊下その他の美化運動に或は奉仕作業に全力を盡して居らるゝ、又彼が青年訓練所へ入所するや、その精勵振は美事なものであつて、二ヶ年間一日の欠席もなく終了し、皆勤證及賞品を授與せられたばかりでなく終了後といへども勉學の志厚く、修身公民科には課外生として出席するといふ熱心さである、而かも日常冗費を節約し出来る限り貯金送金をなし、それによつて、嫂の病身を慰め勞はり或は古い先短かい両親に對し孝養の限りを盡して居る、殊に實家の副業である煙草栽培の補助として、立派な乾燥場を建てたのである夫れかあらぬか、その作物（葉煙草）が同地方四郡聯合作品共進會に出品せられて、一等賞を得たのもそのときであつた、そののみならず彼は毎月當工場發行の家庭時報や、愛汗雜誌を實家に送つては一家の者を楽しく明るく暮らすことに努力してゐる、此等の行に對しても、實家では殊の外喜んで居られるとのことである。

果然昭和三年四月當工場に於て善行者の一人として表彰せられたのである、彼は斯の如く各方面に向つて努力に努力を重ね、大なる自己を築き上げんとして居るのである、百折鍊磨幾春秋、必ずや彼の理想は遠からず聞届けられ、使命の遂行と共に立派な成果を齎らすことであらう。



原籍 兵庫縣宍粟郡富柄村

坂 口 カ ワ エ

明治四十二年七月十六日生

少女の力

貧家を救ふ爲に

彼女は十六歳のとき、常に悩みの中にある家庭を救ふ爲に、東洋紡績姫路工場に入社したのである。彼女の家庭は家族が多いばかりでなく、父の腕一本を頼りに一家の生計を支へて居る有様で、他に働き手のない上に、父は一日も酒がなくては過せぬ人であつた爲に一家の窮迫に絶えず、家庭を暗くして毎日涙で暮さねばならない日が續いたのであつた。彼女はこうした惨めな家庭に育ち又別に力になつてくれる人もないので、いつも他人は冷たいもの、自分の一家を虐げるものとばかり、考へて居たのである。それが爲か彼女は常に僻み勝ちで、本人の告白を聞けば、寧ろ不良性をまで帯びた淺ましい、人間ですと言つて居る位であつた。

愛の芽は萌して更生の道へ

境遇の改らん事を願ふ勿れ

心の改らん事を祈るべし。

彼女は作業に馴れる一方只金、金と、金をのみ追つて働いたのでありましたが一面心の糧として何物かを求めなければならぬと悶へて居たのであつた。然るに此の物足りない、彼女の心に、終に光明の與へられる日が来たのである。丁度大正十五年三月二十日より二十一日にかけ、當工場に於て修養團の一夜講習會が開かれ、彼女も出席することになつた、最初は何心なく會場に顔を出して居たのであつたが、岸田先生初め勝部、勝原兩先生の

「過去に勝ち現在に勝ち總立となつて總親和總努力、清き愛汗の行者となれ。」

「私慾を離れて献歸の精神に歸れ。」

「一人の力でよく家を明るくし、工場を明るくし村を動かし、縣を動かし國を動かす、焉ぞ男女の別あらんやと。」

口をついて出る言々句々は總て彼女の肺肝を刺し、悉く過去の自分、現在の自分を痛罵せられて居る様に感じ慚愧の念に打たれたのである。それからの彼女は更生の人として驚く程に、生活振りが改められて来た。室の掃除は勿論、工場での働き振り等一つとして人後に落つるものなく本當に自分の業務に向つて誠心誠意尊い使命を勵む様になつた。そののみならず彼女は、自己を生かし、又他人を生かすこの善風を

己が郷村にも普及せしめんと念願して止まなかつたのである。

環境は人を生かす

當工場が昭和二年四月十八日永遠に記念すべき修養團支部發會式を挙げ今や汗愛の靈火は工場の隅々までも燃え廣がり、白色倫理運動の効果は次から次へと善行を産むやうになつた。是を見た彼女は過去の懺悔と改悛の念を益々深くすると同時にキツト家を興し、村を振起たしめ、又出来得べくば、不幸な人々の爲にも盡せるだけ盡してみたいとも考へたのである。

一人の更生萬人を活かす

貧困な家庭を救ふため、毎月一、二圓の小遣錢を残す外全部我家に送金せなければならぬ彼女が、この僅少な小遣の内の幾分を蓄へて、郷土の善化運動の費用にとて郷里に送金し或は又同村出身の同志數名と力を合して眞劍な祈りと熱誠な念願を以て郷土の美化運動に力を注いだのである。

働けば働くほど濁れる心は清められ、眠れる魂は呼び醒まされ始めて明るい世間が見え出す様に、彼女も生れ更つて始めて本當の世間をみつめたのである。それが爲め陰氣であつた家庭が、生々と明るく輝いてくるばかりに同村に於て數回に亘つて行はれたる講習會の際村長の話題は期せずして彼女の身の上に

及び、今迄の苦しみの経歴から、現在の奮闘振を涙と共に語られたのである。これを聞いた全村の人々は皆泣いて感激し、全村挙つて善化運動に努力する様になつた。

彼女はつまらぬ自分がどうして、斯くまでに皆から讃へられるのかと、審かりながら益々道のために精進して居るのである。

慈母の聖愛に泣いて働く孝女の手紙

此の手紙は彼の女が初めて講習を受けた修養團の勝原悟一先生に宛て、送つた手紙であつて、原文そのままを記載する。

(勝原氏著『聖愛の生涯』より)

『尊い先生、すぎし日は本當に有り難う御座いました。お疲れの所をお休みもなく御指導下さいまして何と御禮申上げてよいやら唯々熱い涙にくれてしまひました。其後先生にはお變りもなく来る日もくも壇上に立たれ、私達のため、否國家のため、御奮勵下さる事と存じます。尊い先生のお姿を思ひ浮べては、いや、あの眞剣な魂の叫びにふれます時私の様な愚者にも強い／＼或る大きな力を與へて下さいました。本當に有り難う御座いました。講習を受ければ受ける程、我がみにくさがしみる／＼とわかつて参りました。今日まで歩いて来た道、尙現在歩みつゝある此の正しくない道、ゆがみにゆがんだ足あとが、鏡にうつすやうに見えて参りました。本當に私はあさましい人間なので御座います。修養團に救

はれるまでの生活は、鳥獸にも劣つた死の生活で御座いました。先生から『長谷川まさる』さんのお話を承つて本當に感激されて、思はず自分の過去に泣きくづれました。先生！何と云ふいぢらしくも尊い神のやうな方でしやう。

其れに反して私は何といふ罪深い人間で有りましたでせう。今日は何もかもすべてを懺悔さして下さい神佛の御前に、いや先生の御前に、せきらくとなつてお詫び致します。どうぞ聞いて下さいませ。

父が腕一本で養つて行く何も無い、まづしい家の五人目の子として生れました。貧しいながらも、父の愛と母の愛を一身に集めて育てられて参りました。父は人一倍仕事もよくしますが其の代り酒や煙草がなくては日のたゝない人で御座いました、村の人達も酒のみの父を知らない人はない程の呑助でございました。忘れも致しません丁度私が五歳の時、如何なる神のたわひれであつたのでしやうか父は酒と女に迷はされて家には一寸も歸つて参りませんでした。母は私達の行く末を案じて毎日／＼泣き暮りました。

私達も一緒に泣いてゐましたしかしさう果てた心の父には母の悲みなど何んでわかりませう。はては母までも追ひ出さんとしたのですけれども母は子供の愛にひかされて追ひ出されても追出されても歸つて来て涙の日を送つて居りました。父がたまに歸つて来れば、母に喧嘩をふつかけ、何んでもかでも打ちつけます。母は此の獸の様な父に何にも言はずに泣いて従つて居りました。母が相手に成りませんの

で、はては兄さん姉さん小さい私達にまでも、何んだかんだと言つてせめたてたのでした、これでも『お父さん』かしらと思ふ程でした。或時も父は晩から家を出て、三日たつても四日たつても歸つて来ません。父を恐れて居ながらも子供心に淋しくて、たまりませんので母にかくれて父の居る家まで行きました。私が行つた時、父は食事をして居りました。私が『お父さん歸りませう』と言つて私は泣きました。父はやはりに立つて『歸らんか!』と言つて私の頬を叩きました。父にしかられた私は泣きながら歸つたこともありました。母は身を粉にして働きました。山に行き畑に行き人のお仕事をさしてもらつて私達を養つて下さいました。

尊き母の愛

なか／＼父の目は醒めません一日／＼とはげしくなつて参りました。父の迷へる女に義理ある妹まで出来る様な事になつたのです。あの時の母の心になつたなればどんなに苦しかつた事だらうと思ひます。女中奉公に出て居た姉も、父の不義を聞いて歸つて来ましたが、あまりの事に驚いて氣がくるつたのです。母が薬を飲まさうとすれば、毒をのまして殺す氣かと言つてさわぎます、父はじつと、かげから此の様子を見て居りましたが始めてわかつて来たのでせう、男泣きに泣きながら、母や私達の前に手をついてあやまりました。さすが、ごうまんな父も姉の病氣を見ては、悔ひずには居られなかつたので

せう。其の後父は女ぐるいはやめました。酒ばかりはやめやうとはせず、尙はげしくなつて参りました。食る物がなくなつて困つても酒はやめず相變らず母を苦しめて居りました。姉さんは全快して再び奉公に出ました。丁度其の時私が八歳で御座いました。半年たらずの内に又もや姉のために泣き暮しました。先生こゝまでは家のことですがこれから私の懺悔を申します。亂れすさんだ家庭に育つて来た私は人よりも性質があらくなつて参りました。そして次第に不良性を帯びてゆきました。其の頃私の心にかたくきざみつけられたのは、世の中の人は皆悪い人ばかりだと思つて居りました。こうして私は手も足もつけられない罪深い人間となりました。此の様にしてすすんで行く私を、母はいかりもせず、ひまさへあれば涙と共に言ひ聞かせて下さいました。母に言はれた時は、おゝそうだ母に心配をかけてはすまない、何とかして善い人になりたいと、堅く決心致します。しかし友達は色々の事をいつて私をいぢめます。其の度に又しても自分の心は暗い方へ向つて進んで行き内に入ればこんな暗い家庭、外へ出れば人にいぢめられます。こんなにして一日／＼と私は正しくない人間となりました。然し母は何とかがして私を眞人間にしてやらうと思つて毎々／＼言ひ聞かせて下さる。涙を流して戒めます。母は罪深い私を怒りもせず常に可愛がつて下さいました。こうして尋常三年を迎へたのです。先生、其の年の七月七日、又しても母を泣かす大罪を犯したのです。先生、私は弟を殺した罪人でございます。今思つても涙より外に何物もないのです。朝夕はいつも許しておくれ、許しておくれと、佛様に参つて、少しでも罪ほ

ろぼしにと祈つてゐます。先生どうぞ語らせて下さいませ。

降り続く雨に川には大水が出ました。母は高粱の苗を植えるため、四歳になる弟を私に負はして置いて、畑に行かれました。お友達と五人遊びに行きました。其の中で私は弟を、今一人の方は女の子を負ひ六歳になる子供を連れて行かれました。友達の誘ふまゝに、隣村なる重光といふ所まで遊びに行つたのです。重光に行くには大分長い板橋を渡らなければなりません、行きがけは何の事なしに渡りましたが。歸りに五人連れだつて橋の中央まで行きましたときに五人の者が皆一度に川にはまつたのです。落ちた時、ハッと想つただけで其の後はどうなつたか少しも知りませんそれを向ふに見て居られたお友達が一さんに馳せ歸つて、私の家に行かれ何も言はずに、母にだきつき、坂口さんが川に、と言はれたさきり泣き倒れたさうです。母は、現場にかけつけました。其の時は早や村人の手によつて私どもは引き上げられて居たさうです。皆死んだ様になつて居ましたので早速醫者の家へかつぎこまれました。先生悲しい事には五人の中で三人はもう死んで居りました。助かつたのは私と今一人、六歳の女の子とでした。弟の死を見た母は悲しみの餘り氣絶しました。其の晩は母と私と死んだ弟と三人が、戸板にのつて歸つたさうです。けれども私は知りませんでした父は兄とともに、京都の方へ仕事に行つて居りましたが、電報に驚いて歸つて参りました。けれども其の時は早や弟の葬式は出して居りました。私もなきながらついて行きました。あまり父の歸りがおそいから火をつけやうと（火葬）言はれて、しん

せきの人々がいく度もいくども、火をつけられました。不思議な事には一寸も火が満足につきません困つて居る時遠くから待つてくつとさけびつゝ人力車が一臺走つて來ました。先生それが父で御座いました。先生私は今、十二寮の自習室で泣きながらこれを書いて居ります。死んだ弟は父に逢ひたかつたのでせう、父はそれから棺桶のふたを取つて、變り果てた我が子に涙をこぼしながら合掌して居りました。先生、私が殺したんです私さへあんな所へ行かなかつたなれば決して死ぬることはなかつたのです。

それから父は火だけなと私がつけやうと言つて、つけられました。果して火は一度にもえ上りました。弟の魂は本當に父を待つて居たのでせう。月日とともに私は學校も終りまして、貧しい家計を助けるため自分から進んで山崎の郡是製糸工場の女工となつて行きました。四月五日に！決心して行きましたものゝ歸りたくてくつ仕方がありません。二ヶ月といふものは泣いてばかり居りました。泣きながらも勤めて居りましたが、又しても神の試練が來ました。七月二日に、あの恐しいチブスにかゝつたのですそれと聞いた私の一家の人々は傳染の危険も忘れて、今日は父、明日は兄、明後日は母と言ふ様に、富栖から毎日歩いて來て下さいました。（安栗郡富栖村から約五里の距離）來て下さいましたも私は高熱のため、少しもわかりませんでした。父母は毎々くつ神様にお参りして下さいました。それまでは神様や佛様に手を合せた事のない父で御座いました。

郡是の工場では私は死んだと言ふはさだつたさうで御座います。私自身でさへよくも助つたものだと思ひました。私本當に父母の御蔭であると信じます。五十日程入院して居ましたが間もなく退院致しました、然し同時にこんどは足や手や顔が腫れて來ました。父は驚いて無理に私を連れて歸りました。そして貧しい中から色々世話して下さいましたので、身體はすつかり全快致しましたが、こんどは頭の髪が一本も残らず、すつかりぬけてしまひました。それで十六歳の時までは、どこへも行かず父母のもとに居りました。けれども年取る父母に心配をかけてはすまぬといふ氣になつて、丁度其の頃東洋紡績姫路工場に人がいると言ふ事を聞いた私は、父には相談もせず、内所でお世話になる約束を致しました。それと知つた父は紡績なんかに行けば又病氣になるといつて、大變叱られましたけれども、私の決心は堅いもので御座いました。今父の意に従つて、よけいの苦勞をかけるが後で皆に樂をさせるからだと思ふ時、どうしても父の意にしたがふことは出來ませんでした。

父の意にそむいて私は、東洋紡績に來ました。そして一生懸命になつて働き、貯金して置いて澤山たまればかためて送つたりとづけたりして居りました。月日のたつのは早いものです、今年の正月が來れば二年になります。先生私は何とかして家のために働こうと思つて居ります。私がお金を送りますとみんな喜んでくれます。私はお盆に一度家に歸りました。そして五十圓母に渡しました時母は泣いて喜んでくれました、どうしても親にお金をあげずには居られないのです。此の正月には百圓はどんな事が

あつても持つて歸つて、喜ばしてあげやうと思つて一生懸命働いて居ります。これがせめてもの、弟に對する一つの罪ほろぼしと思つて居ります。先生私は修養團によつてすくはれたことを信じます。まことに有り難う御座いました。何卒先生、いつまでも此の罪深い人間を正しい道に導いて下さいませ。お願ひ致します。(後略)

今や彼の郷土は自熱的の勢で善化の美風漲る

彼女はこうした過去の、血と涙で色どられた、生活から、現在の恵まれた生活に思ひを走らせては、幾度か感謝したことでせう。その度毎に、彼の心はさやく聲が聞えるのです。それは一日も早く明るき家庭と、住み良き郷の建設を計れと、彼女は此の聲を己が念願として、郷里で助役を勤めて居らるゝ恩師に宛て、熱涙肺腑をえぐる書面と、數冊の書籍とを送つて、郷里を生かすには、是非修養團の講習を開くことの必要なことを説いたのであります。彼女のこの切なる願ひに感じ、村長、助役、校長等は卒先富柄村に善風を捲き起さんと、早速戸主會、婦人會、青年會と相次で修養團の講習會を開いて努力せられた結果村内は到るところ淨化され今や村民は擧つて感謝感激の生活をおくるやうになつて來ました。

汗愛行者としての鑑

兵庫縣學務課秋山和平氏が昭和二年十一月六日、作川工場長へ寄せられた御手紙の一節を記載して彼女の善行を讃美したいと思ひます。

前略 今回小生儀安栗郡富栖村長よりの申請により、戸主青年婦人會の講習に参り申し候處、青年女子青年等の眞剣なる活動により殊に村内屈指の不良青年數名の覺醒されたことにより村民一同多大の感激筆紙に盡し難き次第に有之候。其の根本は全く修養團の精神に感銘して、更生され候ものと被存候へ共、最も偉大なる力を表されたるは御會社に勤務され居る十數名の同村出身の女工様方の眞剣なる祈りと誠意によりて村民の誠心に喰入り非常なる良結果を來たしたものと信じ申候、平素同村出身の女工さん方は貴下の御指導の宜敷ため大いに修養に努められ、自分の故山にもこの精神運動の入らんことを切望され、坂口カワエさんは自己の節約により五圓の送金をなし尠からず、村長、助役、校長を感動せしめ候當日の如きは一年一度の祭典にも歸らざる彼女が講習會に率先参加して、眞剣なる受講ふりには、よその見る目も神々しき感に有之候。

村長は感極まり、壇上に於て聲涙共に下ると云ふ有様に有之候、實に縣下の模範村として知られた富栖村は今や徹底的に汗愛の精神運動に舉村一致努力せられ居り候、是全く貴下の御指導宜敷を得られたる、坂口カワエさんはじめ同村出身の女工さん方の、御骨折りと私共實に有難く只々感謝の外無之失禮を省みず嬉しさの餘り、御禮申上度ペンの走り書ながら深く御禮申上候。

何卒御序の節坂口様はじめ同村出身の女工さん方に小生の喜びと感謝を御傳へ下され度候(後略)

投げられた一石は小さくとも、波紋は遂に全部の水を動かさざれば止まぬやうに、感激に満たされた同村は爾來舉村一致、あらゆる方面の善化を期し、理想郷の現出に努力せる結果、兵庫縣下の優良村として推獎を受けるやうになり、又坂口カワエさんの一家は過去に變る明るき平和と幸福とに浸り、お母さんの如きは常に歡喜感謝の美やましい生活をして居らるゝそうであります。



鹿兒島縣始良郡蒲生村字漆

宮ノ原ツキ

明治四十年七月五日生

捧ぐる心

鹿兒島灣に注ぐ別府川を三里程もさかのぼつた所、北の方から戸岳の連峯が兩手を擴げた様に伸びて来て一村をのんで居る百戸にも足らない村がキノさんの誕生地である。約百戸とはいふものゝ此處の谷に三軒彼處の木蔭に七軒といふ按配で全く純朴な山間の僻村である。村の人々は毎日午前三時か四時の頃から起きて一しきり働いた頃鎌を置いて漸くさし上るおてんとさんを拜むのである。農業の閑にはどこの家

でも煙草を作ることになつてゐる。

ツキノさんは學校を終へて五町ほどある小路を雨でも降れば殆んど谷川の様になるところによく煙草の畑や茄子の畑等へお父さんやお母さんの手傳ひに出かけたものである。このツキノさんには家内中が頼りとしてゐる一家の明星とも云ふべき兄さんがあつた。小學校時代から群を抜いて居つた彼は前途にもゆる希望を抱いて東京高師に學ぶことゝなつた。ところが遊學半にしてツキノさんの十六歳の時不慮の出來事のため突然此世を去つてしまつた。曉の光を失つたツキノさん一家の驚きと悲しみは實に想像に餘るものであつた。

然し彼女は絶望に近いこの悲しみの中にも徒らに悲歎にくれる意氣地のない女性ではなかつた。奮然として志を立て「自分はどんな苦しい目をしてしまふかまはない、自分には弟がある、この弟をして兄さんの後を繼がしめねばならぬ。」と終ひに彼女は大正十三年の一月二十一日、我が東洋紡績の前身東京モスリン大會根工場に入社されました。翌十四年の四月弟さんは亡兄の後を繼ぐべくツキノさんの涙ながらの激勵之辭に送られて鹿兒島第二師範學校に入學することになりました。ツキノさんはそれからといふものは自分はどうな不自由をしても毎月十五圓以上は學資の仕送りを欠かしたことがありません。又或時は書籍代を或時は着物を仕立て、郵送します。ツキノさんのこの献身的な勞働と弟さんの必死の勉強、夫れは涙を以てつゞられてゆく若人の立志傳でなくて何でありませう。激勵の涙の底には愛があり、徹夜の

勉強にも感謝の涙がある。

『姉さん！きつとやります。御恩は決して無にしません……』月日は流れて來年の三月は早や弟さんの目出度卒業の時が來ました。三番といふ成績で押し通して來た弟さんは本年の一學期末には終ひに首席まで漕ぎつけてしまつた。ツキノさんは無口な娘さんで、平素から餘り話さうともしない、又何事も餘り色に見せる人ではないが然しどことなく崇高な感じのする方である。ツキノさんはつゝましかかに語りました。

「御恥しうございます」

親類の人々から學資を借りて學んで居りました兄が卒業せぬ中に死にましたので家はどうすることも出来なくなりました。中學の試験に及第した弟もとう／＼止める事になりましたので弟の悲しみは一通りではありません。その時思ひついて名古屋の工場へ參りました。親の止めるのを無理に頼み弟を勵し師範へ入學させました。學資だけは欠かさず仕送りをして居ます。弟も大變喜んで呉れますので來年の卒業を楽しみに働いてゐます」

と黙々として自ら勵まし自ら慰めつゝ悲境のドン底を高遠な理想に向つて堅實な一步一步を踏みしめて行く若き女性の意志は磐石の如くに堅い。

この一文を綴るにあたつてツキノさんからは特に次の様なお願いがありました。かくの如き善行を削

除するに忍びず、こゝに掲載させていたゞきました。御迷惑の段はくれぐれもお詫びしておきます。

『先生御免下さいませ』

昨日は種々聞かれるまゝに答へましたが、寝てから考へますと私は少しも善行になる様な事はして居ないと思ひます、誰でも金の十圓や二十圓は送金いたします。先生どうぞ私の事は取り消して下さいませ。弟の成績の事などは全然取り消して下さいませ。弟の耳にでも入りましたら私は叱りをうけねばならないと思ひますから』……



岡山縣阿哲郡美敷村唐松

塚 本 熊 市

明治三十五年十月六日生

一石の波紋

當工場内に重心會なるものがある。之れは當社職工教育所の卒業生を一團とした作業上の研究を兼ねた相互修養機關である。會長吉田君を補佐して萬遺漏なきを期してゐる塚本熊市君は實に有爲の青年で入社日淺き大正十五年二月には早くもその善行を表彰せられ延いて組長となり同時に延展科甲番擔當者に補せ

られてゐる、當工場の進路目標に對し毎月の委員が募集する課題には大底欠かさず眞面目なる有益の投書
をなせるを見ても其眞劍さの一端は何ひ得る。
君も亦修養團によつて更正した一員である。

『僕は元來修養團の名さへ聞くのも嫌でありましたが、その理由は此の美名の下に隠れて一部の策士が賣名運動をなしてゐるものと考へてゐたからであります。然し今晚一初めて諸先生のお話を聞いて自分の大きな誤解であつたことを覺りました。どうか皆さん！今後の塚本熊市を見てゐて下さい。屹度工場
の成績を擧げて御覽に入れますから……』

昭和貳年正月、修養團講演會に於ての彼れの感話の一節である。眞に更正せしものは強い——工場の成績と自己練磨とは共に進んで聲明通りの實行に努力しつゝある彼れの姿の健氣さ！愉快さ！

『——その勤勉なること普通の人の及ばざる事、その部下を愛する事、人格の高き事、諸規定を確實に遵守せらるゝ事、身は質素にして腰低く私は日々擔當者塚本氏の行を見聞して修養を重ねつゝ仕事に従事して居りますが只々感謝するより外ありません。氏の善行を一々書きあらはしたきは山々なれども書き盡すことを得ず残念ながら筆を止むる次第であります（原文の儘）』
と一部下を感化心服せしめてゐる。嗚呼偉なるかな塚本熊市君！

彼れは近所の人達の噂に上つてゐるほどに按摩がうまいそうである。全く天才的といつていゝ程で、あ
る家の人達は感心し切つてゐるといふ事である。或ひは日頃嗜める剣道の産める餘技か？否、これは全く
氏の孝養より生まれた努力の賜であると言ひ聞いた時敬虔の念を持たざるを得なかつた次第である。
幼き頃のこと、晩になると母が肩を揉まして『ヤレ〜』と安心して寝られる姿を見て自分にも出来な
いことはないと思ひ肩叩きから初めたのが今日の噂に上る如くなつたので母を喜ばした幾星霜！それは實
に尊きものであつた。

曾て昨夏、その母が病を得られた時など君は一生懸命看護につくし湯治に遊山に只母の意の儘に従ひ遂
に全快せしめたといふ。
隠れたる善行！やがては現はるゝ時が来るのである。



原籍 兵庫縣朝來郡竹田村久世田

赤井久野

明治廿九年八月十九日生

伸びゆく生命

(一)

紡績會社に勤めて居る幾千の乙女達の中には實に勝れた女性を發見するのは珍らしいことでない。
それもその筈である何百里の彼方から彼女達は家の爲、自分の爲に見も知らぬ他郷を尋ねて働きに出
くるのだ。

その悲壯な氣持を考へて見たならば堂々たる男子をも愧死せしむるものがある。

茲に特記しやうとするのは、兵庫縣朝來郡竹田村久世田の生れで、赤井久野といふ乙女である。彼女の
幼なき時分のエピソードがある。

彼女が尋常六年の時であつた。

彼女の家の近所に住んでいた古川吉三といふ男が、妻に去られて、その離縁の原因を近所の人達の邪推
に依るものと妄斷したのか、亂心して、附近の家に抜刀で暴れ込んできたのだ。

彼女の父も母もこの暴漢の兇刃に傷さあはよと思ふ利那未だ幼ない彼女は健氣にもこの暴漢の防禦に必
死となつて争つたのだ。

村の平和は一朝にして血腥くさき慘劇に破れ混亂する人々の中を逃れて家に歸つた吉三は、火を放ち、
炎々たる猛火の中に身を投じて死んだ。

平安を愛する素朴なる村人にとつて戦慄すべき七人斬の惨事は、かくして終つたが、この際の彼女の男まさりの雄々しい行爲を見ても、いかにしつかりした氣性の乙女であるかといふ事は判るのである。

何故彼女が遠く働きに出る様になつた、直接の原因は父が暴漢の刃に斬られてから、長い間の心勞から心臓を病んで臥床中であるといふ事に歸せねばならぬ、それは謂ふまでもなく農家に取つて、唯一の働手である父が起てなくなつたといふ事は、最大打撃だからである。

幼い彼女の胸には、この父親の病氣と之に伴なふ家計状態を思ふとき、母親や、姉の慘憺たる心勞を側で見るとき、父を除いて男手の弟は未だ幼ないと考ふるとき、敏感な彼女は、悲壯な決心を定め奮起を決意したのである。

それは、尋常科を終つて、高等科へ行く様に、父母や姉からすゝめられても、「働きに行く」事を望んだのでも解るではないか。

大正九年七月、當工場に入社して以來、彼女の努力は、誠に驚倒せしむるものがあつた。而も、どんな辛い苦しい仕事でも、ひるむ事なくニコ／＼してやつて抜けるのである。

心には雄々しい決意が火と燃えて居ても、彼女はいつも微笑を含んでゐた。汗する人のみが知る働きの喜びが、自づと微笑となつて表はれるのである。

笑つて仕事を受ける、豊かな廣い氣持には、どんな人でも、愛情と敬意を感ぜずには居られないのだ。

足もとからは、しん／＼と氷の様な寒さのはい上つてくる嚴寒の日も、水につけた様に仕事着が幾度となく汗に濡る、極暑の日も、彼女の面から悲壯な決心と微笑とを奪ふ事は出来なかつたのである。

仕事が終つて、寮に歸つてからは、女の嗜みである、裁縫とお茶とお花を一生懸命に勉強した。そして時々催される洗張や御料理の講習會にも缺かす事なく出席した。

彼女の同郷の友で、

『田舎娘が、洗張やお花を習つたつて何になる。』と冷笑するものがあつた。

女としての完成、主婦としての嗜みを思ふ時こんな冷笑は意に介するに足らなかつた。

唯靜かに沈黙の微笑を以て酬ゆるのみであつた。

時うつりて、彼女をひやかした人々も、一度家庭の妻となつたとき、自己の教養の貧弱さを後悔して、彼女が故郷に歸つたときどうぞ餘暇に教へて下さい、としみ／＼と歸らぬ過去を恥ぢたといふ事である。

寮の部屋の人々は彼女を見習つて間食を止める様になつた。よき人格の反映は周囲を感化せずにはおかぬ。

この様にして、勤勉努力の結果、毎月の収入の殆ど大部分を家に送金するのであつた。

(二)

大正十四年十月、村では楽しいお祭の大鼓が、平和と豊饒を傳えて鳴響いて居た。山車をかつぐ若衆の掛聲は、それに和して人々を快い興奮と陶酔に誘ふのであつた。

歸村を急ぐ彼女の胸にも、幼かりし日の思出が蘇つてきた。

久方振の歸郷に、折好くお祭に出會つた彼女の喜びは、無残にも一步家の敷居をまたいだときに破られた。

容態急に激變した父は、既に危険に陥つて、病床を取巻く人々の顔には憂ひの色が深く刻まれていた。

轟く胸をやつと静めて父の顔をうかがい見れば、苦痛に衰え果て、吐く息さへもかすかである。

彼女は父に取縋つて泣いた。父の力無く延ばされた手をしつかと握つた時、母と三人の姉弟達は、涙に目はうるみ、胸迫つて、聲無く、唯握り合ふた手に、僅かに思ひを通ずるのみであつた。

嗚咽は次第に高くなつた。

『お父さん、しつかりして下さい。心丈夫に持つて下さい。』

と漸く口を出したけれど、啜泣にかき消えて仕舞つた。

健氣な彼女は、再び健やかな以前の父に歸す爲に、献身の努力を誓つたのである。それから一睡もせず、一心に看護に盡力した。

絶望とまで思つた人々さへも、彼女の熱心な介抱振に、新たな勇氣をそゝられた。

この熱誠な念力の通じたか、一日たち、二日たち、病は漸く危険界を脱したのである。

併し完全に恢復するには、入院して充分の療養をせねばならぬといふ醫者の説に従つて、彼女は會社の了解を得て、父に附添ひ豊岡病院に入院した。

時既に秋の盛りだつた。

垣根に咲くコスモスの花は一しほ寂寥と悲哀をしみじくと彼女の胸に感ぜしむるのであつた。

夜半、病室の窓を通して差込む月の光は、いよゝ清く、この可憐の乙女の胸に、何ものを思はしめたであらうか？

併し彼女はひるまなかつた。

二十にもならぬ乙女は、自分の肩に振掛つてきたこの重大な責任を、進んで荷ひ、碌々休む間さへもなく看護に専心したのである。

漸く僅かの暇を見出しては、圓山川の河畔をひそかにさまよい、咲き繁る秋草の花を集めて、病める父の慰めに供するのであつた。

時には又種々の書物を読み聞かして、父の退屈をまぎらせるのであつた。

病の爲に、兎もすれば苦痛を訴へる父を前にして、若い彼女の心勞は如何ばかりであつたらう。

けれど熱誠は遂に病を次第に快癒に向はしめたのであつた。

二十五日程経過して愈々全快した父と相共に我家へ歸つたとき、一家の歡喜は、いかばかりであつたらう。

父の病氣中に要した總ての費用は、彼女の汗と油によつて造られたもので支拂はれたことは言ふまでもなう。

(三)

再び工場に立歸つてきた彼女は、以前に倍して奮闘を續けた。彼女は遂に總ての人の敬愛を受けて、組長に任命せられたのであつた。

寮では室長とし、工場では組長として、新入の人達には特に懇切にいたはり、愛の限りを盡して世話するので『姉さん、姉さん』と慕はれるやうになつた。

彼女の今迄の努力熱誠は遂に、昭和二年二月十一日善行者として表彰の榮を受けしめたのであつた。

そうして、同年四月十七日、修養團支部發會式が、當工場に行はれてから、汗愛の二大精神は、やさしき彼女の琴線に織り込まれ誠實と努力は更に熱を加えてきた。

ある日、誰も厭がる便所と、便器をひそかに掃除するものがあつた。それは彼女を主とした同志の一團であつた。認められ様としてするのではなく認められない事を、ひそかに行はふとする氣持は實に尊いではないか。

はないか。

洗濯場に乾かしてある他人の腰卷の雫の落ちるのを、黙つてしぼつてやるのも彼女であつた。

棄てられた路傍の草花にも、温かい天地の慈愛と攝理とに感謝せずには居られない彼女であつた。

彼女の故郷のある婦人が病床に呻吟すると聞いては、同村の乙女達と計り、見舞金と温い慰問の手紙を送つた。思ひ掛けぬ乙女達より眞情溢るゝばかりの慰めの手紙のみか彼女等の尊い汗になる見舞の金さへ添えてあるのを受取つた人々の感激はそも幾許であつたらう。

厚い感謝の禮状は、この婦人の親戚の人からも出されたのであつた。

希望社の推薦された『合理的炊事法』を見付けて、直ちに其數部を購入して、母村の婦人會と、母校の補習科宛に送つたのであつた。

かくして、彼女の村の炊事の改善は着々と實行されていつた。唯だ一紡績女工手の力で、容易に實行し難き因襲的な炊事の改良が行はれるといふ事は、何といふ誇るべき貴い事であつたらう。

眞心から出る小善の及ぼす結果の偉大さは到底測り知る事は出来ない。

(四)

既に老境に入つた父母をばせめて新しい家に、住まはせやうといふのが、彼女の宿昔の念願であつた。

従来は毎月送金していたのを止めて、将来に備へる爲に、入社後四年以後は、貯蓄を續けて既に千圓を越えてゐたのを提供しようと決心した。

か弱い乙女の力で千圓の貯金さへ稀有の誇るべき事であるのに、而もその金は彼女の一生を飾る婚資として定められているのに、その儘總てを捧げやうとする氣持に至つては聞くだに涙のにじむ話である。

新しい土地は購入され、新しい家は建てられた。

誇らず、求めず、清純楚楚たる乙女子の尊い愛と汗の力から……

新家に移つて欣然たる老いの父母は、如何に健氣なる娘の與へられた事を天に感謝したことだらう。

疊の新しい香りにも、柱の艶々しい色にも、いとし子の温かい呼吸が感ぜられるのである。涙もろい両親は幾度となく顔見合はせては、嬉涙にむせんだのである。

「この様な立派な家で寝起する事の出来る様になつたのは、皆なお前のお蔭だ。お前には厚くお禮を言ふよ。」

久々に歸つた久野さんの前で、涙ぐみつゝ父に言はれたとき、

「まあ、そんなお禮なんか言はないで……」

「子供にばかり働かして、さぞ不甲斐の無い親だと思ふだらうけれども……」
母親の女らしい言葉は、

「お母さん、もうそんな……」

といふ娘の聲は途切れて仕舞つた。

その夜久野さんの一家の集いこそ、勝れたる詩人の筆にのみ記さるべき聖なるものであつた。

彼女の村で修養團講習會が催されたとき、必要な書物を三十冊近くも送つた事の如き、如何に彼女の村の人々が、村唯一の孝行者よ、娘達の生きた手本よと、稱讃の聲の高いのは無理もないことである。

あけぼのの園に咲く、ゆかりの色の花にたぐふべき清らかなる彼女に、榮ある喜びの日の一日も早く來らん事を願ふと共に今後更に一層の自愛、奮闘を祈る次第である。



兵庫縣揖保郡譽田村福田

石 原 定 吉

明治六年四月二十一日生

寄宿の小父さん

石原の小父さんといふよりも、寄宿の小父さんと呼び度い様な氣がする。

赤銅の様に日に焦げた肌の上に、一枚のシャツを着てニコ／＼しながら、朝から晩までせつせと寄宿の

世話をして呉れるあの小父さんが懐しくてならない。そこには不平とか、勞働問題とか、勤務時間とか、報酬とかいふ様な問題は全然あり得ない、そんな事は彼は未だ一度も考へたことがないといふ風に見える、吾々は小父さんの姿を見るとき何かしら、天地の恩寵を心から感謝し度いやうな心持ちがする。

小父さんは大正八年七月十三日創業勿々の我が姫路工場に入社したのでから最早十年になる。寄宿舎に入退社があるときには、小父さんは車の上に行李だのバスケットだの風呂敷包だのを満載して、ゴロゴロとひきずり出す。恰も我が子の歸つて来るのを迎へるやうに我子の旅立つのを見送る様な格好である。小父さんは手がすくと、工場の各所から植木屋さんの拂ひ落した、小枝や大工さんの残した鉋屑を拾ひ集めて来て自修寮へ運んで焚物に備へる。(自修寮といふのは女子寄宿舎に於ける主婦の養成所であつてこゝでは朝晩の炊事は自分達がすることになつてゐる...) 大きな枝があつたり、堅い節があつたりすると鋸や斧を持つて来て叮嚀に小さく割りはじめ。寮の子供達は群る様に寄つて来て『小父さん、小父さん』といつて何んでも頼めば、寄宿の小父さんはどんなことでも『よし、よし』ときいてくれる。

今年の正月、慰安を兼ねて、寄宿舎で『隠し藝大會』が催された。踊るものもあり、歌ふものもあり、プログラムは如何にも盛んに進行した。やがて寄宿の小父さんの姿は舞臺に現れた。その時の小父さんは赤銅にシャツの小父さんではなかつた。いかめしい袍裳をつけて右の手には扇子さへも握つてゐた。拍手は萬雷の様につた。小父さんの藝は淨瑠璃を語ることであつた、錆のついた其語り振りは驚くほど立派

なものであつた、平素黙々として語ることの少い小父さんにもこうした立派な藝術がある。

毎年、八月になすと寄宿舎では盆踊りが始まる、小父さんの最も好きなものはこの盆踊りである、三度の食事を止めてでもこの盆踊りだけは止められないといふほど徹底的に好きだ。夏の夕、炎熱すでに去つて涼風が夕顔の葉末を動す頃、ドン、ドン、ドンと盆踊りの太鼓が響く。女子寄宿の子供達は小父さんが打出す太鼓の圍りを毎夜々々踊つて廻るのである。小父さんの赤銅のやうな脊中からは玉の様な汗が流れる、何んとした家庭的な平和な場面であらう。

寄宿は小父さんの家だ。寄宿にこの小父さんの姿が見えないと吾々はいひ知れぬ淋しさを覺える。この小父さんは今では四千五百圓ほどの貯金を持つてゐる。吾々は小父さんが何時までも達者で平和な生活を送るやうに心から祈るものである。



龜 鑑

原籍 三重縣志摩郡神明村一九

谷 口 作 次 郎

明治卅年十月廿日生

愛する弟よ

夏休みも終り、新學期を迎へてそろ／＼忙がしくなつて居るだらう。

久しく相見なかつた友人達と久し振に會合して、どれもこれも青春の美に充實した健康と若さを誇る喜びに満ちてゐる事だらう。

聞き慣れた先生の聲さへ、新學期の劈頭には、新しい感激を催してくるではないか！

お前の今の緊張した氣持がよく解るよ。あまつさへお前の年頃に兄さんの抱いた氣持を回想して、或なつかしささへ感じてゐる。

一月の間をのび／＼と山に海に自由な空氣を呼吸したお前は、この恵まれた期間に充分心身の鍛錬に勉めた事と思つてゐる。この間の修養の如何が、お前の將來を左右する力は大きい、お前は必ず私達の期待を裏切らなかつた事と確信してゐる。

兄さんもよく勉めたよ。

今年の何十年振と言はれてゐる、猛烈な暑氣に耐えて流る汗を拭ひつつ工場の一角で奮闘した。

この緊張のお蔭で、今年の夏は一回も不快を感じず事なく過し得た事を喜んでゐる。

今更に、充實した生活には、誘惑（病氣）は侵入しないものだと感じたよ。

唯一人、夏の夜遅く讀書した際に感じた色々な事を、是非お前に話したいと思ふが、其れは何れ、歸郷

の時に譲らう。

今日話したいと思ふのは、若い苦勞を知らぬお前の將來の覺悟の爲にもなる様にといふ老婆心から、現在に勝れたある人の行爲を知らそうと思ふのだ、お前にはあまり感興は惹かないかも知れないが、押して記すのだ。

勿論この人とは、お前の立場は全然違つてゐる。

人生に於けるスタートもお前は、異つた方面から切らねばならないだらう。

併し、この人生に何より大切な不撓不屈の精神、努力に至つては、いささかも變りはない。

今はさ程に感じなくとも、いつかは今日の私の手紙を思出してくれるだらうと信じて、私は筆を進める。

東洋紡績姫路工場の倉庫に勤務して居る人で、谷口作次郎といふ人がある、今私が告げ様とする主人公

だ。彼は、年老いた兩親が、故郷——三重縣志摩郡神明村——を去る事を好まれないので、その孝養と、

愛する子供の養育を妻に托して、この姫路の地へ働きに來ていたのである。

愛する人々を残して唯一人働さにくる——これまでに決心したその堅い信念を思ふとき、ひそかに涙を

催してゐるではないか！

單に、己れ一人の爲なら、尙よい。彼には、老ひたる兩親と、二人の愛子と、妻との五人の生命を支ふる責任がある。

三十を過ぎた彼が、寄宿舎にあつて、弟の様な人達に伍して、つましい生活を送つては、はるかなる故郷の人々の平和と幸福を祈りつゝ、毎日献身的奮闘を續けて居るのである。

山の様に集つてくる原料を拜見場に引込み、拜見後は直ちに入庫の手續をする、面倒な袋の詰替え、順序よく原料袋を收容する苦勞、入庫済の原料の状態に對して拂ふ不斷の注意——中々一通りの苦勞ではな

いざ取入となつて、殺到する原料を一々整理する有様は、まるで戦場の様だ。

この間に彼のいつも微笑を含む男らしい奮闘を見るのである。

『さあ、やらうぜ。』

彼が掛聲をかけて、手鍵を袋に掛けると見る間に、十四、五貫もある袋は軽々と彼の肩に乗つてゐる。軽快な彼のこの動作に、他の人々も誘ひこまれる様に働き始める、彼はいつも先頭を切つて働く。

仕事の合間々々には、彼の口から、修養團の團歌が洩れる。疲勞は、この悲壯激烈のマーチにいつしか溶けて、新たな勇氣は、こん／＼として湧き上つてくるのだ。

血氣壯年の若者の集りである倉庫の現場に、美はしい愛と汗の華が咲きほこるのも、當然ではないか。

この奮闘の結果は、必ず毎月三十圓以上の送金となつて、故郷の人々に送られる。勿論、彼は一滴の酒も、一本の煙草も口にする人間では無い。

試みに、倉庫の幹部の人に彼の事を尋ねると、

『彼なら何をさせても安心です』

と答へられる。

何をさせても大丈夫といふ信頼は誠に大切な事だ。

この一語に、彼の全人格が表現されてゐる。

X X X X

寄宿舎に於ても彼は模範だ、室長として寄宿舎中の第一人者だ。

彼の優れた人格は、特に新入の人達の養成の爲に、養成室長を命ぜられるに至つた。

この工場の天下に冠たる誇るべき美風を、新入の若い人々に伝えるには、彼の如き誠實温厚の性格に待つ處が多い。

彼程、この尊い重大な責任を果すに適任者は無いといふ、工場の幹部諸氏の絶大の信頼があるからだ。彼は決してこの期待には背かなかつた。

『谷口』の名は、今では畏敬すべき人格の代名詞となつてゐる。

而も、彼はスポーツの趣味を解してゐる。

屢々テニスコートの上で馳驅する彼の姿を見る。

在郷軍人としても、彼が我が工場分會の誇りである事は、特に表彰せられたのを見ても明かである。更に彼の全幅の行爲を物語るものは、我が工場の名譽である善行表彰の榮を受けた事だ。時、昭和二年二月二十日、三千五百の従業員中より選ばれて、貴顯紳士列席の下に、この光榮を受けたのである。

愛する弟よ。

世には、我ら兄弟より、更に數等惨めな境遇にある人も多い。而も、彼等はその望みを決して棄ててはいない、層一層の努力を以つて、新しき生活の戦に臨んでゐる。

弟よ。

お前は今人生の曙の時に立つてゐる。

恵み深き御両親の愛護の下に、來るべき日の準備に専心してゐるのだ。この人生には、今のお前には解けない苦難が満ちている。

戦ひの首途に遅れを取つてはならない。よく努めるがよい。

力強い人は、敢然としてこの激浪渦巻く人生の波を乗切る様に、お前も、その翼を鍛え、その心臓に健康な空氣をウンと貯えて置くがよい。

私は、この谷口君の事を思ふ度に、自己の力弱きことを、痛嘆反省せしめられるのである。

所詮、人生の最後の勝利は、汗だ。愛だ。

吾等は谷口君にならつて汗愛の大旗をふりかさしつゝ、勇敢に進み行こうではないか！



兵庫縣神崎郡寺前村鍛治五五九地

藤原 きくえ

明治四十二年七月五日生

母に代りて

大正十年五月十六日、姫路を發した長蛇の列車が、生野路の風を切つて、今しも寺前驛へ入つて來た。「ハハキトク」の電報に大きな不安と悲しみを抱いて、改札口を出た藤原きくえさんが、宙を飛ぶ様に家路を急いだのが此時であつた。

息せき切つて飛び込んだ一室、其處に父や姉妹に見守られた母が、病苦に見る影もなく瘦衰へた姿を見たとき、十四歳のきくえさんの胸は、早や涙で一杯になつてしまつた。

『お母あさん只今、きくえです、お判りですか』

「オ、きくゑか、よく歸つておくれたつた」と口にこそ云はれなかつたけれど其の眼、その顔には「待つて居た」と云はぬ斗りの喜びが、感謝の涙となつて流れたのである。

其夜は見るも涙くましいきくゑさんの看護が續いた。息詰る様な重たい空氣の中に不安と憂愁の一夜が明けた。温い心づくしも甲斐なく眠むる様に母が逝かれた。それは正午頃であつた。

しめやかな野邊の送りもすんで一番上の姉は婚家へ、次の姉は奉行先へ、きくゑさんは泣き腫らした目で再び工場に歸つて來た。

火の消えた様な家庭に、三人の子供を残して、父は附近の製糸工場に通ひ、幼いきくゑさんの弟妹が、詫しい留守を預つて行く様になつたのは其れからの事であつた。

母なき家庭……父はどんなに不自由でせう。又弟や妹達はどうして居るでせう。こんな事を考へると、きくゑさんはもうたまらなかつた。

「父を慰めて上げたい、弟妹の幸福を計つてやりたい」一途に家を思ひ、父を思ひ、弟妹を思ふきくゑさんの至情は、其働の上に驚く程の眞剣味となつて現れたのである。送金は彼女の生命であつた。孝養は彼女の目標であつた。弟妹に對する勤めは彼女の使命であつた。

日曜毎に定つた様に歸宅して、家の面倒や弟妹の世話をする。ア一待遠しい一週間、友達を楽しむ休日、きくゑさんには更に働かばねばならぬ日であつた。

澤山の汚れ物、夜具の洗濯、家の御掃除、こんな事はきくゑさんの手で、一週に一度徹底的に行はれたのであつた。歸つて來る度に、父にも弟妹にも喜ばれる何品か必ず風呂敷包から出るのであつた。

日用品代を始末して弟妹の衣類を買つたり。身體の疲れを忘れて更け行く寄宿舎に、父の衣類を縫ひ續けてゐるきくゑさんを入々は度々見受けた。爾來六年彼女の不知れぬ努力は實に甚大なものであつた。

此間送金多額者として表彰された事二回、蓄財數百圓を投じて家屋新築の費に資した等の感すべき事件は可弱いきくゑさんの腕と心掛とで敢行せられたのであつた。

歸宅の折りは定つた様に詣でる母の墓、村の人達は此殊勝な心掛けに誰一人泣かされぬものはなかつた。

「ア、感心な娘」『お前方も藤原きくゑさんの様に』と界限に彼女の噂が擴つて今や故郷では評判の賞め者となつてゐるのである。

此の感すべき女性は今も尙精紡料の整理方として、毎日血の滲む様な努力を續けて居られる。室長としての彼女の寄宿舎に於ける生活には、蓋し範とすべき幾多の事柄のあることは申迄もない。

限られたる人生、限られたる生命の中から、永遠の光明を視つめて汗と愛の眞隨から得た合掌の心できくゑさんは貴き生活路を歩み續けられてゐる。



廣島縣比婆郡口南村大字水田一四一

澁川イサミ

大正元年十一月二十五日生

父を慕ひて

(一) 父を泣かした手紙

お父さん！ どうぞお歸り下さい。

私共はどんなにお父さんのお行衛を探しましたことか？ お母さんはお口にこそ仰やいませんが大變お淋しいことだろうと御察しますと、胸が張り裂けるやうで御座います。風の便りにお所を聞いた時は、ほんとに飛び立つ嬉しさで、一夜まんじりともせず只神佛へ御禮を申したことです。

村人が何と申しませうと私共はお父さんに従ひます。同じ家に一緒に居たいのが念願で御座います。之れがお父さんをお探してゐた第一義なのです。

お父さん！ 随分お久しう御座います。もう六年になるやうに思ひます。妾共は淋しう御座います。現在父が有りながら別居してゐるといふ情けなさ、世間が悪いのでなく私共の孝養の足りなかつたこと

が残念に存じます。

裏の柿は毎年よくなりますが殊に去年は吃驚する程よくなりました。柿に就て思ひ出しましたが昨年か一昨年の秋祭りのことです。新家の二郎坊が叔父さんの肩車に乗つて、喜んで氏神様から戻つて来るのをジツと見てゐた岩男（まだあの時分お母さんのお腹にゐましたが）が片言まじりで「僕も行く」といつて聞きません平常は大變おとなしい子ですので、此時丈は地團駄踏んで強請るので仕方なく母が肩車へ乗せて裏へ連れて行き、あの柿を捌いで與へやつと納まりがついたやうなこともあります。

お父さん！ 本當にお久しう御座います。

岩男が時々「僕のお父さんは」と聞くのです。其都度御勿體ないお話ですが「お父さんはあのお山へ行つて居られる、あなたが大きくなつたら連れてつて上げますよ」母と妾とは涙の顔を見合せてお處の早く知れかしと祈るばかりで御座いました。

みさよはもう六年生になりましたよ。大變達者でお母さんの手助けをして呉れてゐます。來年は卒業ですからそしたら會社の方へ呼び寄せて一所に働きたいと思つてゐます。お母さんが承知しますか知ら—それからみつゑですがもう十歳です。今は一生懸命勉強してゐます。此子丈は出来ることなら高等を卒業させてやりたいものだとも母とも相談してゐます。

お父さん！ どうぞお歸り下さい。

私も此の夏から會社の方へ御厄介になつてゐます。家の借財は幾分目鼻がつくやうになりましたからもう大丈夫だと思ひます。たとへお父さんが御酒を召上りましてもかまひません、是非お家にゐて頂きたく御座います。萬一目鼻のつきかけた借財が後戻りして一合の御飯を、六人で食べるようなことがありまして決して不平は申しません。只々お歸りになつて家の采配を振つて、頂きたい丈けなのです。母は大變この事を怒つてゐますが妹達の將來を思へば母も吃度許して下さるでせう。どうぞ切なるイサミの願をお聞き下さいまして、弟妹達の爲に歸つてやつて下さい。お願いします。親子協力して働きますればやがては嬉しい日が來ること、確信します。」

大正十五年の初秋、野分の去つた後の九州の炭坑で脚氣に悩んでゐる、友の世話をしつゝ此意味の手紙を受取つた父の倉吉は遙かに娘の方へ手を合して泣き崩れた、それは又悔悟の涙でもあつた。

(二) 父の 出 奔

石盤を持つ手に、盃を持つことを覺えた父は、毎夜のやうに、熟柿臭い息を、娘達に吹きかけるのであつた。終には喧嘩口論の對相手は倉吉だと、村の人から指ざされ蛇蝎のやうに忌み嫌はれて、益々荒んで行くやうになつた。今迄平和であつたイサミ女の家庭は、かうしたことから日一日と暗くなつて行くのであつた。其内に父は不圖した事から村に居られなくなり三人の子供と妊娠した妻とを、残して何處へとも

なく出奔してしまつた。背負切れない程の借財を残して居たことは勿論で、之れがかの女の十歳の時の出来事である。

男勝りだと云はれて居た、母親ウメノ女は十歳を頭に三人の娘を抱えて、日儲取りに出で一生懸命働らき漸く一家を糊してゐた。

風の便りには薬賣りになつたとも、又九州で炭坑稼ぎをやつてゐるとも、聞いたけれども母はも早此の父に望をかくることは出来ないとして仕舞つて、苦しさを耐へて働いた。其内に長男の岩男君が生れて益々母の手を要するやうになつて來た。それでも母は岩男君が寝た後に、夜中に起きて賃仕事をするのであつた。かうした中に育つたかの女は、氣丈な母を助けつゝ優秀な成績で小學校を卒業した。

(三) 父の 悔 悟

家産の復興は我双肩にありと自覺した、かの女は大正十五年八月姫路工場へ入社したのであつた。入社後は勤儉力行其所得金全部を、母の許に送り第妹三名の教養に全力を注ぎつゝ父を尋ねてゐた。かの女の懸念には工場の係員も感心して次の如く云つてゐる。

「入社以來殆んど缺勤なく業務に獎勵して、技術も亦非常に上達し同時頃入社せるものゝ内にも最も優良なり」と。總べては推して知るべしである。かくして家運挽回の曙光を認むるやうになつて、一家に喜の色が見えて來た。此の頃父の所在が判明

したので母の意に反するとは知りながら、家庭の現状を報告し父なき弟妹の悲しみを、訴へたる前記の手紙を書いて送つたのである。之れが三度四度と續いたので、さしもの父もかの女の至純至孝に動かされ前非を悔ひて居ても立つてもゐられなかつたので、知人を介して村の人達に詫を入れ六年振りて、我が家の敷居を跨いだのは、それから間もなき大正十五年の秋、村の稻の收穫に忙がしい時であつた。

(四) 明るき世界へ

父が歸つてからの一家は、喜びの内にあつた。殊に岩男君に至つては「お山から父ちゃんが降りて来た」と許り大變な歡びやうであつた。が、かの女は靜かに祈つた。外面はよくも母との間はどうかであらう？ 母は氣の緩みで病み付くやうなことはないかしら？ 村の人達との間はうまく行くかしら？ と探し當てた歡びの次ぎに起つた惱みは之れである。：：が、幸にこの惱みは杞憂であつた。一度本心に立ち歸つた父は、爾來殆んど禁酒したと思はれる迄に節酒して、家職たる石工職に精勵し昭和二年四月からは妹ミサヨをも會社に入れ、内外共に協力した活動の結果は、二年後の今では地方の人の信用する程の家運となつたのである。

十五の乙女の必死の願は神に通じて、鬼の如き父を悔悟せしめ、延ひては家運の挽回となり郷土の譽としてかの女を稱へぬものはないのである。今やかの女は東洋女學校にありて、業務の餘暇時間を勉學に専念してゐるが學徳備はりて故山に歸るのも近き將來にあらう。

長門に端を發した中國山脈が、江の川に中斷されて、廣きをなした日表に育ぐまれた女郎花！ その名は澁川イサミ女といふ。吾等はやがて咲け！ やがて實れ！ と祈るのである。



兵庫縣神崎郡仁豐野
精紡組長 吉田徳藏

明治廿八年二月六日生

堅忍不拔

(一)

(A)

したゝるのは汗だ。
ながれるのは汗だ。
あゝ身内から生命が激潮として燃焼するとき、

限りなき力に燦然として湧き上るのは、
生命の滴だ。
喜悦の熱涙だ。

あゝこの痛快を。

あゝこの法悦を。

自然はひそかに微笑みつゝある――

(B)

したゝるのは汗だ。

ながれるのは汗だ。

働くものは汗の創造者だ。

汗で洗はれた豪健な體軀を想像するがいし。

心臓には快い諧調と新鮮な血液。

明哲な頭脳と汗する體體は光明だ。

あゝこの健康を、

あゝこの祝福を

太陽はいま上りつゝある――

(C)

したゝるのは汗だ。

ながれるのは汗だ。

心の王國は今限りなき喜悦で一杯だ。

この時の歡喜こそ何者にも代え難い權威を持つている。

この王國に君臨するものは汗の王だ。

汗する人のみがこの尊い玉座の主だ。

あゝこの權威を、
あゝこの尊嚴を。

世界はいま平和の榮光に包まれて――

私は昭和三年四月、姫路市景福寺に催された姫路五社聯合の、修養團講習會の席上で私の隣に坐つてい
る人の眞摯な態度にひどく心を打たれたのである。

講師牧野秀先生は折から共産黨事件發覺の時でもあつたが、憂國の至情禁ずる能はず、火の如き熱辯を
以て、我等の奮起を要求せられたのである。

共同生活の本義から始つて、人間理想の完成に至るまで、壇上にある先生の御姿は誠に尊き限りであつ
た。

小原七三郎先生が、牧野先生を御紹介下さるときに、『神の姿を見る』と言はれたのも、これあるかなと
思つたのであつた。

爾來數ヶ月を経た今日さへも、その時の光景を想起せば、新たなる感激の胸に湧くを覺ゆるのである。
× × × × ×

斯くの如く先生の熱烈無比の御言葉は、席上にある總ての人の肺腑をえぐつたが、その内でも私の隣の
人の眞剣な有様は痛く心を突いたのである。

そして、そゝろに起る崇敬の情に、知人にその名を尋ねずには居られなくなつた。

吉田徳藏 精紡の組長 私の心に深くこの名はきざみこまれた。

今回再びこの名は念頭に浮んで來た。そして同君の事を記し得る事をひそかに欣快とせずには居られ
ない。

(二)

缺陷ある社會は能力を要求する。

現代は能力の時代である。

あらゆる社會が能力を探して居る。

空位空名は更に顧みて居ない。

活躍すべき自由の天地が待つて居る。

腕が揮いたくば先づ能力をつくれ。

能力の前には不平が無い。

我が悲運に泣かんよりは
無力無能の悲哀に泣け。

我等の尊敬する後藤静香先生は、「權威」の中で、こう言つて居られる。
私はしみじみとこの句を味ひつゝ、我が吉田徳藏君の奮闘の記録を忍ぶのである。

大正十年三月、彼は我が工場に入社した。
入社日ならずして、この有爲の青年は衆目の惹く處となつたのである。

この時、大阪の本社が設置してある、職工教育所は第一回の生徒募集を行つた。彼は進んでこの試験を受けやうと思つた。

この機会が自分の將來を決するのだと思ふと、受験中もひそかに心震ふのであつた。
試験もすみ、未來を定める運命の骰子は如何に現はれるであらうか、いらだしい數日は漸く過ぎた。
發表の日が来て入所許可者の中に我名を見出したとき、彼は躍り上らなければかりであつた。

『天、我にこの仕事を與へ給ふ。』
力強い奮闘の決心が堅められました。

嬉々として彼が入所してから、一年の年月は経過した。この間の彼の勉強振は、誠に驚嘆すべきものであつた。

優秀な成績を以て、彼が再び我が工場に歸つてから、第一期職工教育所卒業生として、彼の勤務振は、人々の期待する處であつたが彼はこれを裏切る様な事はなかつた。

好漢吉田徳藏の名は、厚意と信頼を以て口々に傳へられていつた。

彼が職工教育所で得た嶄新な教育と、生來の熱心努力は遂に多數の信頼を博して、組長に任せられるに至つた。

汗は彼の本領である。

働く事は彼に取つては、喜びである。

未明、彼は奮然床を蹴つて一里餘りの道を自轉車で駆けつける。

壯大なる機械の奏する進軍の調べに和して、彼の驚異的奮闘は始められる。

(三)

彼は、また我工場の善行運動の第一人者でありました。既に大正十五年二月十一日、善行者として善行赤章を受くる榮譽に接して居る。

彼は我が工場にある職工教育所卒業生を以て「重心會」を組織し、その會長となつて、活動をして居るのである。この會は

- 一、誠、敬、愛の三徳は吾人向上の糧なり。
 - 一、愉快に働け、愉快に遊べ。
- の二大標語を以て組織されて居る。

この重心會といふのは、人として心的方面的修養、心の力の重んずべきを意味して、職工教育所長森山弘助先生の命名されたものである。

そして、「重心」といふ雑誌を發行し、會員の意見發表の機關として居る。

そして其誌上には、特に吉田君の論文が生彩を放つて居ることは言ふまでもない。

この吉田君達の努力を以て、この會は、次第に確固たる地位を占たが、この團體の活動に一層の力を與ふるものが出て來た。それは、我工場に動かすべからざる基礎を据えた、白色倫理運動の急先鋒修養團である。愛汗の精神は若き人々の血を沸騰させる力強いものがあつた。

以前にも、總ての誘惑に打勝つ尊い信念は、彼の心中に炎々として燃え上つて居たが併し時には、果てなき曠野にさまよふ身とも觀じた事も、皆無ではなかつたが一度修養團の牧野先生の講演を聞くや、感激はこの有爲の青年の心魂に徹し更に、更に確固たる人格を建設する動機となつた。

「これある哉、この後は唯實行活動あるのみ。」

彼は奮起した。彼の同志一團の活動は一段の熱を加え、最善の努力を、仕事に傾倒するやうになつた。

家庭に於ても、工場に於ても、彼は無くてならぬ人物であつた。

彼の貯金の一部を以て、畑は買はれた。

青年團の副會長として、村の中堅青年として最も華々しい活動を續けた。

時には、この青年の汗になる尊い収入の一部分は病者や、貧困者の見舞金に送られたこともあつた。

感謝と感激は限りなく、この愛すべき青年の上に注がれ、大阪毎日新聞紙上に「尊むべき模範青年」として記された事もあつた。

(四)

私は、精紡科に於て、彼の評判の好いのに驚いたのである。

精紡科の人々は異口同音に、如何に吉田君が技術に、人格に卓越せるかを語るのである。

汗の人、愛の人、努力の人、信念の人、誠に精紡科の人々が彼を有するを誇りとする様に、我々はまた彼を我が尊むべき東紡姫路工場の一員として有する事を最大の榮譽とするものである。

更によき道へ、不斷の努力を盡しつゝ、堅實な足どりで進む彼の事を忍び、私は再び後藤醇香先生の句

を思ひ起したのである。

自ら信ぜよ！

信ずるに足る自己を作れ。

自己を信じ得ないものは

誰をも信じ得ない。

誰をも信じ得ないものは

誰にも信ぜられない。

互に信ずる世界に生きたい。

眼より眼へ。

胸より胸へ。

信の世界は單純である。

彼の勝れた行ひの總ては、自己の本當の力を信じている故ではあるまいか？
彼が自己を信じ得るのは、彼が本當に働く事を喜びとしているからである。

彼は愛の人であり、汗の人である。

私は、彼一人の存在に依つて及ぼす感化の力の偉大さに驚きつゝ。

この精進、この努力、好漢更に努めよと絶叫して擱筆する。



島根縣能義郡荒島村二三二四

清三郎長女 加藤キクノ

明治廿八年四月十一日生

聖愛の生涯

吾が姫路工場の紬糸科に、加藤キクノと云ふあどけない迄に、やさしい一人の女子が働いてゐる。

彼女は可弱い女性の姿に、威武も届す能はざる固き操守と、強き斷行心を持ち至誠一貫すべてを生かす

愛と汗との行者である。

本年の四月三日、神武天皇祭の佳辰に當りいとも盛大に舉行されたる、工場の表彰式に於て數千の従業員中より選ばれ榮ある表彰を受けたのである。



キクノさんは島根縣能義郡の荒島村に生れ、家族は両親に、弟三人と妹二人の、さゝやかながら誠に睦しい家庭であつた。父の清三郎氏は農業の傍ら石工をなし、又村の消防員を十五ヶ年間も勤績して曩に表彰されたこともある矢張り犠牲奉公の精神に富んだ人である。

斯うした豊ならずも圓滿な平和な家庭に育つたキクノさんは、幼い時から近隣切つての評判娘で朝早くから夕は遅くまで野良に出て父母を助け農事を勵み、夜は一生懸命勉強して學校はいつも優等で通した。

小學校を卒へたキクノさんは、大正十一年の春四月懐しい故郷を後に、遙る遙る姫路に来て吾が工場に働くこととなつた。何處に働いても唯これ奮闘努力、一瞬も怠ることなく己の仕事に精進した。

やがて室長に任命されるや、渾身の誠を捧ぐるキクノさんの實行行動は、忽ちにして室内の空気を一變してしまつた。彼女に動かされた少女達は、心を協せて仕事を勵むやうになつた。「加藤サン、加藤サン」と姉の様に敬ひ慕はれてゐるのも決して偶然ではない。

大正十四年の春のことであつた。

當時未だ小學校一年生であつた弟の正三君が、運動會の際に足を傷めそれが因で遂に筋炎に懸り松江市の錦織病院へ入院して大手術を受けることになつた。

然し、もともと餘分の貯へとても無い一家のこととして、父母は金の工面に人知れず頭を悩まさればならなかつた。

國元からの便りで始めて弟の奇禍を知つた、キクノさんは一時は餘りのことに驚いた。

然し「一羽の鳥を生かし、一人の惱みを去り得なばわが生命は無駄ならず」と聖者の言を信ずる彼女は今や吾が肉身の弟を救ひ得るのだと奮ひ起つのであつた。

「幸ひ手元に貯金がある。これを送らう」

長い年月、汗と涙で積上げた尊い五百圓の金、而もそれは彼女が嫁入仕度の貯へであつた。然し彼女の意志は強よかつた。固い決意は眉宇の間に閃めき、惜しみなく凡てを棄てて今は少しの未練もなかつた。

其の晩キクノさんは國元へ長い長い手紙を書き送つた。折りしも差し覗く月を拜んで「神よ！」と心に呼んだ。「希くはみ恵みを垂れ給へ」瞑ぢた其眼の長い睫毛を傳つて美しい露が溢れるのであつた。

金を受け取つた両親の歡び：「吾が子ながら感心な娘じや」手紙を讀む父の手は顫へてゐる。「孝行娘を持つ私達は幸福です」母の膝にはハラハラと玉の様な涙が落ちる。今は胸も迫つて聲も立て得ず只だ嬉し涙に咽び泣くのみであつた。

弟の病を癒やすためには水火も辭せずと、固き決心をしたキクノさんは朝な夕な遙か故郷の空を眺めては一心不亂に神佛を念ずるのであつた。その敬虔なる勤行は誰か涙なくして見られやう。

清き祈りが神明のお心に叶ひしか、一時は危険とまで云はれた正三君の病氣も、手厚き母の看護の中に快復して行つた。両親や弟妹の歡びは勿論のこと、此れを知つた村の人達も、今更の如くキクノさんの孝心を讃め稱へるのであつた。

◇ その年の暮、妹のアキヨさんも姉を慕つて同じ工場に働くこととなつた。

仲の好い二人の姉妹は互に慰められ勵ましつつ、親への孝養を怠らず月々四十圓以上の送金も缺したことがない。

一日の勤めを終れば

『お蔭様で今日一日を愉快に過さして戴きました、有難うございます』と神に感謝の黙禱を捧げ就寢の際には必ず寢床の上に端座して

『お父様、お母様、御達者ですか、お側に居つて孝行も出来ず申譯もありません。私達も丈夫です、どうか御安心下さい、では、お寝みなさい』と合掌するのである。其の眼は感謝に輝き心は法悦に満たされてゐる。

てゐる。

◇ 吾々は愛されん爲に生れて來たのではなく、愛する爲に生れて來たのである。従つてお互に愛されんことを望むよりは愛することを望む人となる可きである。

吾々お互の一生こそは小さい自我に縛られた、汚れた此の肉體の生涯でなくして、愛する者の爲に捧げんとする聖愛の生涯で有る可きだ。あゝ、聖愛の生涯！ こゝに眞の人生が有り、こゝに永遠の生命がある。



宮崎縣東諸郡移佐村上倉永二六七六

下野 蘭 盛 良

明治三十六年六月二十日生

奮闘の青年

雄々しい青年

圓型機の鈍い廻轉を見つめて立つ一青年がある。身の丈さはさほど高くはないが頑丈で色淺黒く口許しまり何處となく頼母しく見える青年、機械の調子を見終つた彼は臺の上に登つて行つた。仕事に勵む彼は

一寸の隙も見せず孜々として働いて行く。

『俺は働くんだ』

『働らいて家を興し親を喜ばすんだ』

これが常に彼の頭の中に燃えさかる念願であり覺悟であり一切だつた。

休憩時になつて遊び戯れる女工さん達を見やりては故郷に居る同じ年頃の妹達が思ひ出されて来る。両親と一處に家のものになつた畑に出て嬉しさに働らく様を思つては獨りニッコリと微笑むのだつた。

阿蘇の山遙かなり

九州宮崎縣の田舎、日向の國東諸縣郡穆佐村の上倉永に農を業とする、下野蘭次兵衛氏の長男として生れた盛良君は幼少の頃から極めて温順な性質の人であつた、幸か不幸か家は極めて貧困で少しばかりの小作によつて生活して行く一家の生計は、單に今日を支ふるに過ぎなかつた、弟妹達が漸く物心つかうかといふ頃小學校に通ふ盛良君は、いつも不如意勝ちな毎日に小さい胸を痛めるのでした。弟妹が段々大きくなるにつれて暮らしは益々困難になつて行く、長男である盛良君はどうしても、外の子供達の様に呑氣に遊べなかつた、學校から歸へると直ぐに畑に働く両親の手傳ひに出掛けるのだつた。

阿蘇の山に日が落ちて、空が眞紅になりそれから段々薄暗くなつて来る迄、田の畦道に妹のお守りをす

るのでした。一日の働きも終つてかへり来る家路、背負ふ妹の泣聲がかすれて灯もない吾家にかへり来るのだつた。そうしてさゝやかながらも一家そろつての夕餉は彼にとつて唯一の楽しみであつた。

貧困の中に漸く小學校を出た彼は到底高等科に行くことは望まれなかつた。同級生が高等科に通ふのを見ては

『俺も行き度いな』と考へてみましたがどうしても家計が許されなかつた。

學校を出ると直ぐ毎日両親の手傳ひに畑に出て行つた。日を経るに従つて随分と両親の力にもなつて来た。然し限られた田地を小作する彼一家にとつては、幾分の手傳ひにはなつたがさして収入の増加とはならなかつた。

『何とかして俺は家を興すのだ』

『それには働くに越したことはない』

『働くのもどうして働いたら』と

常々彼の頭を悩ますものは其働く方法だつた。

流れ行く大淀川の水を望んで、遙かに浮び出る雲を見つめた様に、鐵持つ手を休めては自分の頭の中から浮び出る雲の様な空想を辿つては將來を畫くのでした。

それでも毎日の働きは一日たりとも止めなかつた、亦両親を勞はりつゝ弟妹を愛撫することも忘れな

つた。

『此儘田舎に居つて働いたものだらうか』

『いや田舎は望みが無い』

『都會に出て一稼ぎしたものだらうか』

『都會はどんな處だらう』

と随分迷ひ始めた。

天 來 の 聲

幼い頃からよく近所の娘さん達が紡績會社に出かけて行くことを知つてゐた彼は

『是非一度紡績に行つて働きたい』と父に意中を漏らしてみた、然かし今日迄自分の手許で育て、來た兩親は、いそと賛成はして呉れなかつた。それには親としての心配があつた。

『都會に出て悪いことを覺えて來やしないだらうか』

『馴れない仕事に就いて身體を傷めやしないだらうか』

等と考へては切なる盛良君の願ひも聞かれなかつた。ふとしたことから父は姫路工場募集従事者青木さんと宮崎の街で會ふこととなり其話を聞いてみて今迄の心配も一掃され一つ働きに出してみようかといふ

氣になり茲に盛良君のかねての願ひが聞かれることゝなつた。

『是非お金儲けをしてかへります』

と言ひつゝ、愈々住み馴れた故郷を、兩親や弟妹に見送られて出るのでした、乗合自働車のそば迄來て呉れた兩親の目には、早や涙さへ見え小さい行李を積み込んで呉れる弟妹の顔にも暗い影がうかゞはれる。

『皆さんあつしやで』

『おまへも丈夫で』

と交はす話も後は自働車の爆音に消えて行く

『さうだ目的を達しなけりや二度と此道はかへらないんだ』と、ふり返へり見る故郷の山も今日は變つて見えた。

宮崎驛までの四里近い道も、何となく近い様に感ぜられ、照りつける夏の日も、彼には著しとも感ぜられなかつた。

唯々見送つて呉れた兩親や、弟妹の姿が、幻の様に浮んで來る。これが大正十二年七月、彼二十一歳のときのことだつた。

黙々として率先躬行

圓型機の側で働く盛良君には何處か變つた處が見られた。いつもどんなことでも率先してやつて行く、そして一日だつて勤務を怠けたことがない、勿論同僚の氣受けもよし、上役の見込みもよく、誰れが推選するともなしに模範工手となつてしまつた。

月末に貰ひ來る給料は、殆んど小遣も残さずに、全部貯金に積み立て、行つた。其頃故郷では高等科を出た弟を、印刷業の見習ひに出し、二人の妹も夫れ／＼尋常科を卒業して兩親の手傳ひをする事になり、今迄暗い感じのしてゐた家の中も、幾分の明るさを見る様になつて來た。

喜びの手紙

盛良君が入社して二ヶ年の歳月が経つた大正十四年の春、彼は汗と脂とになつた貯金の中から三百圓を故郷の兩親に送つて、老ひ行く兩親の老後を養ふ爲めに、又下野蘭家の財産として、田地を購ふ様に奨めたのであつた。

金を手にした兩親や、弟妹の喜びは、殆んど譬へるに物なく家の中を飛び廻つて喜んだ、そして早速父から盛良君へ皆の喜びが傳へられた。

御金はシツカリ受取つてお叔父さんの方に拂ひましたから安心して下さい。家は皆元氣で田を買ふたと云ふて喜んで飛び廻りております、おまへが田を買うたと云ふて人の評判がえらいものです。舊正月に

なれば操やら巖やら頼んでセマチ田（開墾すること）をしてすること（耕す様に）定まりて居ります。一反六畝十八歩と云へば誠に廣いですよ、これからおまへの金は一錢も他の事には使ひませんよ。田を未だ二三反は是非買をうと思ふてはまりて（力を入れて）居りますよ。

第一身體を大事にして下さい。又話しませう

さよなら

父　　よ　　り

盛　　良　　様

家の者の喜びを知つた盛良君は益々勵み出した。

又々田地を購ふ

働らくのが樂しみとなつた彼は、益々馬力をかけた。

入社して五ヶ年を経つたが唯の六日しか缺勤がない。姫路工場昭和二年度の善行者表彰式が舉行せられたとき、彼盛良君も皆勤の故をもつて、多數來賓の前で表彰せらるゝの光榮を擔つた。

此頃では働くのが愉快になつて來た。怠ける者の姿が、彼にはおかしく又可愛想に見られて來た。昭和二年の春になつて、貯金も相當の額に達したので、又々四百圓を父の手許に送つて、田地の購入方